

第三部

一〇、忘れられたホロコースト——二度目のレイプ

今日、アメリカ合衆国のどこであろうと、あるいはその世界の多くの場所で、アウシュビッツの恐ろしいガス室の写真を見たことのない子どもがいるだろうか？　あるいは、若いアンネ・フランクの印象的な物語を全く知らない子どもがいるだろうか？　さらに、少なくともアメリカ合衆国の小学生は、アメリカ合衆国が日本の広島市と長崎市に投下した原子爆弾の破壊的な効果について教えられている。では、多くのアメリカ人に、子どもでも大人でも、あるいは高い教育を受けた成人も含め、南京大虐殺について訊ねたらどうなるだろう。そのほとんどの人が六〇年前の南京で何が起こったのかを全く聞いていないことが明らかになるだろう。公的機関に所属する、ある著名な歴史家は、私に、彼女の大学院での日々で、この問題を取り上げたことは一度もなかったことを認めた。プリンストン大学に学んだある法律家は私に弱々しい口調で、彼女は中国と日本が戦争していたことすら知らなかったと言った。彼女の第二次世界大戦の太平洋戦争の知識は真珠湾と広島だけだった。この無知は、この国のアジア系アメリカ人にまで広がっている。その一人が私に披露した地理と歴史についての理解は目もあてられないようなものだった。彼女は私に聞いた。「南京？　なにそれ、王朝？」

六〇年前にアメリカの新聞の一面を飾ったあの事件は、ほとんど跡形もなく消え去っているように見える。この事件には「シンドラーのリスト」と同じような劇的な要素があるのに、ハリウッドは大虐殺を取り上げた映画を主力作品として撮ろうとしてこなかった。そして最近まで、アメリカの小説家も歴史家も、これについて書かない道を選んできた。

そんな事情を見るにつけ、私は殺害された三〇万人の中国人の歴史が、日本の占領下で彼ら自身が消滅したのと同じように消滅して、いつか世界が南京大虐殺はでっち上げで作り事だと主張する日本の政治家たちを信じるようになる日がくるのではないかと思ひ、恐ろしくなる。虐殺など何も起こらなかったのだと。本書を書くにあたり私は、歴史を探求するだけでなく、歴史編修を探索しなければならぬという視点を自己に課してきた。ある事件を歴史に残し、残りのものを忘却させるものは何なのか？ 南京大虐殺のような事件が、一体どうやって日本の（あるいは世界の）集合的な記憶から消え去っていくのだろうか？

南京大虐殺が広く認知されてこなかった理由の一つは、明らかに戦後のドイツと日本の戦争犯罪の取り扱ひ方法の相違に根ざしている。多分ドイツは、歴史上のどのような国よりも、政治的な自意識を、個々のナチ党員だけではなく戦争のときの政府それ自身が戦争犯罪について有罪であるという踏み込んだ認識に適合させてきた。しかし、日本の政府が、自己に対し、あるいは日本の社会に対して、同じことを強いたことは全くなかった。その結果、日本の社会に苦痛に満ちた真実を直視させようと勇敢に戦う一部の人がいるとはいへ、ほとんどの日本人は戦争犯罪を個々の兵士の隔絶された行為とみなし、あるいは単純に起こらなかった事件であるとさえみなしてきた。

日本では、第二次世界大戦時に何が起こったかについて、挑戦的な議論が提起され続けている。現在の人気のある歴史修正主義者の見方によれば、この国は戦争のときの民間人の大がかりな殺害について、いかなる責任をも負わないということである。日本人は自存自衛のために、そして西欧帝国主義支配からアジアを解放するために戦ったのである。さらに、その高貴な努力の報いに、日本は広島と長崎で究極的な犠牲者になったのだという。

この自己満足的な歴史の理解は今でも日本の歴史教科書の中にその居場所を確保していて、そこでは南京大虐殺を全面的に無視するか、または軍の行為についての日本にだけ都合のよい解釈を語っている。この政治的な色眼鏡の究極にあるのは、日本の超国家主義者の、これらの教科書は次世代に本当の歴史を語っていないのではないかと仄めかす反対者を沈黙させるための、訴訟から死まで、実に暗殺までもあらゆる方法に訴えた威嚇である。

しかし、歴史を書き直そうとしているのは狂信的な先端の集団だけではない。一九九〇年に、日本の保守政党である自由民主党の指導的な党員で、『No』と言える日本』などのベストセラーの著者である石原慎太郎がプレイボーイ誌のインタビュ記者に語った。「日本軍が南京で虐殺をおこなったと言われていますが、これは事実ではない。中国側の作り話です。これによつて日本のイメージはひどく汚されましたが、これは嘘です」。

当然、この発言は世界中の研究者とジャーナリストを激怒させた。一人は「日本が南京大虐殺を否定することは、ドイツがホロコーストを否定することと政治的に同じだ」と断言した。しかし、弾劾によつて石原を黙らせることはできなかつた。彼の応えは激烈な反撃だった。主張を覆す圧倒的な証拠を前に

して、彼は反証を展開した。世界は、極東国際軍事法廷が被告を南京大虐殺での役割について裁いたときまで、南京大虐殺を知らなかった。日本の従軍記者も、西側の記者も虐殺が行われているときの記事を書いていない。ニューヨーク・タイムズのフランク・ティルマン・ダーディンは、虐殺を目撃していない。聖公会牧師のジョン・マギーは一人が殺されるのを見ただけだった。

一九九〇年には、もちろん、ジョン・マギーは生きていなかった。自分を守るために反論することはできなかったが、彼の息子のデイヴィッド・マギーが石原の主張を論駁すべく労を執った。彼はメディアのインタビュアーに答え、南京大虐殺のシンポジウムに出席し、そこで彼の父親の記録文献を朗読し、彼の父親が日本の残虐行為を撮影するときに使用した実際のカメラを展示した。フランク・ティルマン・ダーディンは生きていたので直接行動した。サンディエゴで引退生活を送っていた彼は、石原の言葉を論駁するために記者会見を行い、そこで記者たちに、確かに彼は一九三七年の記事で、上海から南京までの農村地区を平和だと描写したが、この記事は日本軍が南京への進軍を開始する二ヶ月前に書いたものと説明した。

それ以外の石原の主張は、たやすく論破できるものである。当時の西側の新聞を見れば、多数の残虐行為の記事が見つかるし、日本の新聞ですら、虐殺の詳細な話を掲載していたのである。ダーディンについて言えば、彼の記事は当時のものだっただけではなく、ニューヨーク・タイムズの一面に印刷されていた。ジョン・マギーの手紙には、次のような一説がある。「女性の強姦は描写することもできない想像を超えたもの」であり、「私が言える限りでは、市内のどの街路にも、裏道にも死体がある。そして、私は下関を含む非常に広い地域を回ってきている」。

しかし、石原はやめなかった。彼は続けて、中国の南京大虐殺の主張が、アメリカの広島、長崎の爆撃の意思決定に影響を与えたのだと主張した。前の陳述の一つ一つがそれぞれ論駁されて繰り返すことが不可能になったので、石原は微妙に論点をずらした。しかし、ある一点では毅然として自説を守った。曰く、たとえ、ドイツ人がユダヤ人の殺害について謝罪したとしても、それは日本人が同じことをしなければならぬことを意味しない。日本人はいまだかつて、何らかの非道について、自らが有罪だと認めたとはいえない。

『プレイボーイ』誌のインタビュアーによっても、石原の経歴には傷がつかなかった。しかし、ほかの人が彼と同じように運が良いとは限らなかった。

——激論の渦中に巻き込まれた男の一人に、永野茂門陸将がいた。一九九四年の春、彼が法務大臣に就任してから何日も経たないうちに、彼は毎日新聞のインタビュアーを受けたが、これが彼の政治的な自殺に発展した。「私は南京大虐殺などはでっち上げだったと思う」。彼は新聞社に語った。「私はその直後に南京にいた」。彼はさらに続けて、朝鮮の慰安婦は性奴隷ではなく「公娼」だと言い、日本が「潰されそう」だったから、戦争をする以外の選択肢がなかったのだと論じた。彼の発言に対してアジア各地から巻き起こった猛烈な反発のために、彼は面目を傷つけられたまま辞任させられた。

——一九八六年九月に、藤尾正行文部大臣は、南京大虐殺は「単に戦争の一部」だったと宣言して、経歴に傷をつけることになった。文藝春秋のインタビュアーで藤尾は南京大虐殺当時の日本人の行為を弁護し、死者数は誇張されていると主張した。彼はまた、朝鮮は自分の意思で植民地化を受け入れたのだと主張し、東京裁判は「人種的報復」で、「日本の力を奪う」意味があったとも主張した。彼は、「歴史

と伝統を通じて日本精神を復元するにだけ」このような発言をしたのだが、その代償は彼の地位だった。その月に、日本の中曾根康弘首相は彼を罷免した。

——奥野誠亮は、戦争中、有名な特高（日本の秘密警察）の梟の課長だった。戦後、彼は出世して法務大臣になり、文部大臣にもなった。一九八八年以前に彼は日本の国土庁長官になり、閣僚の中では三番目の位置につけていた。しかし、その年の春に（A級戦争犯罪人が祀られ、拜まれている）靖国神社に参拝し、彼の第二次世界大戦に対する本当の見解を明らかにしたときに、彼の零落が始まった。「侵略の意図はなかった」。奥野は新聞記者に語った。「白色人種がアジアを植民地にしてきた。それが日本だけが悪いことにされた。だれが侵略国家か。白色人種だ。何が日本が侵略国家か、軍国主義か」。彼の発言はアジア中に騒動を起こしたために、奥野は自分の言葉を調整した。「私は日本が侵略者ではなかったと言っている。私は日本だけが侵略者ではなかったと言ったのだ」。五月には、奥野は辞任させられたが、最後まで自説を曲げなかった。彼は、辞職するのは政府から圧力をかけられたからで、前言を撤回するつもりはない、と言った。

——一九九四年八月、桜井新環境庁長官は、日本は侵略戦争をしようと思つて戦つたのではないと述べた。中国の強い抗議（中華人民共和国外交部のスポークスマンは「中国政府は、日本の閣僚が厚かましくも再び歴史的な事実を歪める発言をしたことを遺憾に思う」と述べた）に応え、村山富市は桜井の発言に対して謝罪した。彼はまた、「発言は不適切」という談話を発表して桜井を譴責し、彼に深夜の記者会見を開かせて、発言を撤回させた。

——一九九五年に、通産大臣で自民党の有力者である橋本龍太郎（後に日本の総理大臣になった）は、

第二次世界大戦での日本の意図は米英および「その他」とだけ戦うことだったと言った。彼は、日本は中国に対しては侵略的だったといわれても仕方がないが、他のアジア諸国に対しては侵略の意図はなかったのだと述べた。

本書の出版準備の最中にも、高官の否定発言は続いている。梶山静六内閣官房長官は、第二次世界大戦時の日本皇軍の性奴隷と強姦の被害者は自発的に契約した売春婦だったと述べて、幾つかのアジア諸国の憤激を浴びた。一九九七年の一月に、彼は日本軍の従軍慰安婦は「金のためだった」のであり、当時合法的に働いていた日本人の公娼と違わないと主張した。驚くべきことに、これらの言葉は、週末に行われる日本の橋本龍太郎首相と韓国の金泳三大統領との首脳会談の前日に発せられ、二人の首脳は梶山の発言に対して深い怒りを表明した。

後に梶山は謝罪のそぶりを見せたが、その謝罪が侮辱的で不真面目に見えたので批評家たちを激怒させた。内閣官房長官は彼の発言が「日韓首脳会談での不快感と韓国の人々の間の誤解を生じさせたこと」に遺憾の意を表したが、発言の撤回を彼は拒否した。梶山が自分の言葉で面倒を起したのはこれが初めてではなかった。彼は一九九〇年にアフリカ系アメリカ人を、地域に入ってきて荒廃させる売春婦にたとえた後に、法務大臣の地位を辞任させられた。

教科書問題

おそらく、日本の教育制度の不快で最も悪意的な面の一つは、教科書の検閲をとおして課される第二次世界大戦についての重要な歴史的情報への故意の妨害である。

日本の子どもたちは、ほとんど誕生の瞬間から、滑りやすい教育のピラミッドへの足がかりを求め、東大、つまり東京大学に入学するための先端にたどり着くために戦い始める。日本には、よい中学高校に入るための詰め込み主義の小学校があり、ここでは午前九時から午後六時まで勉強していて、よい小学校に入るための幼稚園があり、なんと赤ちゃんをよい育児所に入れる切符を保証するための独占的な妊婦の病室まであるという。

しかし、日本の有名な「受験地獄」の中で、学童たちは第二次世界大戦について、何を学ぶのだろうか？ 実は、ほとんど何も学んでいない。日本の教育制度全体が、ある特定の主題に対して、選択的な記憶喪失に罹っている。一九九四年までの日本の生徒たちは、裕仁の軍隊には、少なくとも二千万人の連合国の兵士とアジアの民間人の死に対する責任があったことを教えられなかった。一九九〇年代の初め頃の新聞記事が高校のある教師の話を紹介している。彼の生徒たちは日本とアメリカが戦争していたことがあったと教えられたときにびっくりしたという。生徒たちが最初に知りたがったのは、どちらが勝ったのかということだった。

どうしてこんなことが起こるのだろうか？ 日本の小中学校のすべての教科書は文部省の検定を受けなければならぬ。日本の批評家は、社会科の教科書が嚴重で詳細な審査に縛られていると指摘する。たとえば、一九七七年に日本の文部省は数百ページの分量がある標準的な歴史の教科書の第二次世界大戦に関する節を、わずか六ページに縮小した。その節はアメリカが東京を空襲している写真、広島の写真、そして日本の戦没者数から成っていて、相手側の死傷者、日本軍の戦時の残虐行為、あるいは中国人朝鮮人の強制連行と強制労働は無視されていた。

もし、一人の勇敢な改革戦士の努力がなかったら、この検閲制の多くは挑戦を受けないままでいたかもしれない。一九六五年に日本の歴史学者家永三郎は日本政府を訴えた。この訴訟は、三〇年間に及ぶ裁判闘争の始まりで、共感した日本の数千人の支持者の支援を獲得した。

家永に会った人は彼のひ弱さに驚かされる。この八〇代で禿頭の歴史家は歩くだけで震え、彼の声はほとんど囁いているかのようだった。しかし、その奥には、力強い意志が生きていた。

文部省は生徒たちのために南京大虐殺を記録しようとする家永の意図を妨害した。たとえば、教科書の原稿で家永は書いた。「南京占領直後、日本軍は多数の中国軍民を殺害した。南京大虐殺アトロシティとよばれる」。検定者が意見を書いた。「このままでは、占領直後に、軍が組織的に虐殺をしたというように読みとれるので、このように解釈されぬよう表現を改めよ」。

最終的に、家永の抗議を抑えて、この段落は次のように書き換えられた。「日本軍は、中国軍のはげしい抗戦を撃破しつつ激昂裏に南京を占領し、多数の中国軍民を殺害した。南京大虐殺アトロシティとよばれる」。この文章は虐殺に対する家永の議論と文部省の立場を折衷させていて、検閲官を満足させるものかもしれない。残念ながら、この文章には虐殺が白熱した戦闘の中で起こったという意味があり、単純に真実ではない。

検定者は家永に、強姦の記述全体を削除するよう要求した。「軍隊において士卒が婦女を暴行する現象が生ずるのは世界共通のことであるから、日本軍についてののみそのことを言及するのは、選択・配列上不適切であり、また特定の事項を強調しすぎる」というのである。

「侵略」という言葉でさえ禁句だと考えられた。検閲者は書いた。「侵略は、倫理的に否定的な含意を

もつ用語である」。文部省は、戦争のときの日本社会の風潮を非難する家永の努力にも苛立った。次の段落が問題視された。「戦争は『聖戦』として美化され、日本軍の敗北や戦場での残虐行為はすべて隠蔽されたため、大部分の国民は、真相を知ることができず、無謀な戦争に熱心に協力するほかない状態に置かれた」。文部省は、「日本軍の残虐行為」と「無謀な戦争」という表現が、第二次世界大戦時の「日本の立場と行為に対する一方的な批判だ」として、この一節を削除させた。

一九七〇年に家永が勝訴すると（東京地方裁判所の杉本良吉裁判長は、教科書の審査は事実の誤りと誤記の訂正を超えるべきではないと裁定した）、過激な超国家主義者が原告側弁護士、判事、そして家永自身に対する死の恫喝をかけ、ごろつきたちが家永の家の前で鍋や壺を叩き、スローガンを叫んで、夜も眠れないような状態にした。警察が家永を警護しなければならず、彼の弁護士団が法廷に出入りするときには秘密のドアを通った。

家永は、一九四八年に学士院賞を受賞したほかには（彼はそのとき「政治音痴」だったと認める）、歴史関係の公的な賞の選定委員会から一貫して無視されてきた。しかし、この歴史学者は歴史自体の中に地位を勝ち取ったのである。家永がその努力によつて、その名を非常に広く知らしめたことにより、極度に保守的な文部省の変更を求めるよう外国が抗議するようになった。一九八〇年代には数々の訴訟や政治行動が徐々に報われ始めた。一九八二年に、日本の高校の歴史教科書における南京大虐殺の歴史の歪曲は日本国内の白熱した問題になっていたが、国際外交の危機にまで発展した。日本の四つの主要紙のすべてが一面にこの問題の記事を掲載した。中国と韓国の政府は、日本がその侵略の歴史を記憶から抹消し、若い世代に軍国主義を復活させる基礎を築こうとしていることを非難する正式な抗議を提出

した。しかし、日本の文部省教科書用図書検定調査審議会の委員は記者に「米ソについては一、二行なのに、南京大虐殺は三行も五行も書く。これでは、日本人がいかに残酷かをいうためだと受けとれる。日本軍への誹謗だよ」といつて、自己を正当化しようとした。

最後に、教科書問題が知れ渡った結果、二つの成果が達成された。第一に、第二次世界大戦の歴史を塗りつぶそうとする文部省の方針を頑固に擁護していた藤尾正行文部大臣が罷免された。第二に、文部省内で、南京大虐殺はとうてい無視できないものだという意識が高まった。藤尾の罷免の前に、日本を守る国民会議が準備していた右翼教科書は、南京大虐殺を次のような論調で要約していた。「南京の攻防戦は、激烈をきわめた。このとき、中国軍民のこうむった犠牲（いわゆる南京事件）について、中国は日本側に強く反省を求めている」。藤尾の罷免後、文部省はこの段落を次のように書き直した。「南京の攻防戦は、激烈をきわめた。陥落後、日本軍が中国軍民を多数殺傷したことが報道され、国際的に非難をうけた（いわゆる南京大虐殺）」。

もちろん、教科書の検閲の問題は解決には遠い状態である。南京大虐殺を公然と否定する代わりに、日本の役人の一部はその規模の最小化に焦点を置いている。一九九一年に、文部省の検定者は南京大虐殺の中国人の死者数の言及をすべて取り除くよう命令した。当局はその人数を検証するための十分な証拠がないと信じているというのである。三年後に、文部省は教科書の著者に、南京大虐殺で日本兵が一日で殺した人数を二万五千から一万五千に減らすことを強いた。元の版の教科書は一日に二万五千人の捕虜が「始末」されたという日記の説明を引用していた。しかし、文部省の圧力を受けた教科書の出版社は日記の引用を短くし、次のようにした。「佐々木部隊は一万五千人の人々を処理した」。

学术界による隱蔽

少数の例外は別にして、日本の学术界は南京大虐殺の研究を避けてきた。あるものは、この主題が歴史研究の価値のある対象になるための、あるいは歴史家が日本人の非行を判断するための十分な時間が過ぎていないと主張してきた。また、日本人の戦時の誤った行為への批判に対して、憤然と反撃するものさえない。「我々はいつまで、我々の犯した誤りについて、謝罪しなければならぬのか？」ある人は興奮して言った。

他のものは日本の弁解者として行動し、むしろ保守的な日本の超国家主義者と同盟して、大虐殺の重要性と死者数を最少にしようとしている。南京大虐殺の歴史と第二次世界大戦史のその他の性質を歪曲する改革運動に自ら立ち上がった有名な歴史修正主義者が、東京大学教育部教授の藤岡信勝である。彼の煽動的な主張は、たとえば、南京大虐殺で殺された人数は中国人が主張するものよりも遙かに少ないとか、南京のほとんどの被害者は民間人ではなくゲリラ兵だったとか、あるいは日本軍によるアジアの性奴隷、あるいは「従軍慰安婦」は、通常の売春婦だったとかいうようなものである。藤岡はこの女性たちが金銭的な補償を受け取ることを「籤を引く」ことと同一視し、日本政府にこれらの女性たちへの謝罪の言葉を撤回するだけでなく、日本の歴史教科書から彼女らに関する情報をすべて取り除いてしまうよう要求した。

日本では、南京大虐殺のまじめな研究の多くは、フリーの著述者やジャーナリストなど、伝統的な学術社会の外側で営まれている努力に委ねられている。工場労働者である小野賢二の例は、その最も重要

なものである。一九八八年に彼は、南京大虐殺の時期に会津若松連隊に属していた地域の農民たちへのインタビュを開始した。独身だった小野には、この課題に打ち込む時間があった。彼は工場のシフト勤務の間に三六時間の休息時間を使用でき、扶養責任のある家族もいなかった。六年後、小野は六〇〇軒の家を訪れ、二〇〇人の人にインタビュし、三〇ほどの日記のうち二〇の日記を複写し、七人のインタビュをビデオテープに撮影したということだった。彼の発見の一部は、「週刊金曜日」に掲載され、日本人の取材源だけに基づいた、初めての労作として高く評価された。一九九六年に、彼は共著で南京大虐殺についての重要な著作を書いたが、ずっと日本人の報復の影を感じながら暮らしており、右翼の狂信者の餌食になるのを恐れ、写真を撮られることも拒否している。

自主規制

日本の検閲は、教科書検定を行う政府だけが実施するわけではなく、自分自身を監視するという形で、メディア自身によっても行われている。いろいろな意味で、私的な主体によって行われる自主規制は、重要な一点を微妙に厳しく狙い撃ちすることができるので、政府の検閲よりも陰険である。

映画「ラスト・エンペラー」の南京大虐殺のシーンに配給元が施したことを見れば、日本で機能している検閲制がどのようなものであるかが暴き出される。一九八八年に、映画配給会社の松竹富士株式会社は、ベルナルド・ベルトルツチ監督の溥儀の伝記映画から、南京大虐殺を描写する三〇秒のシーンを除去した。当然、これを知ったときに、ベルトルツチは怒り狂った。彼は声明を公表した。「日本の配給元は、私の許可なく、私の意思に反して、私に知らせることすらせずに、南京大虐殺の全シーンをカッ

トしただけでなく、私とプロデューサーのジェレミー・トーマスが映画を切断する基本的な同意を与えていたと新聞社に発表した。これは絶対的な虚偽であり、不快極まりないことだ」。

ベルトルツチの抗議により、配給元は切り取られたシーンを即座に復元した。彼らは自分たちの行いについて、さまざまな弁解をした。松竹富士株式会社の窪谷元之代表取締役は、「混乱と誤解」について謝罪し、彼の会社が南京大虐殺のシーンを日本で見せるのは「刺激的すぎ」だと考えたと説明した。「フィルムのカットは私たちの独自の判断です。私たちはそれがこんなに大きな問題になるとは考えもしませんでした」と彼は言った。松竹富士株式会社のもう一人のスポークスマン斉藤みつひろ (Saito Misuhiro) は、「日本の観客のために」そのシーンを除去したのだと言った。日本の映画評論家の中根たけひこ (Nakanetake Takehiko, a Japanese film critic) は、そのシーンをカットする決定は、配給元の臆病さと超国家主義者の暴力的威嚇の両方から生じたと推測する。「私は、映画の配給元と多くの劇場経営者の両方が、映画館の外で揉め事が起こるのを怖れたのではないかと思っています。これらの人々の中には、戦争のときの中
国における日本の行動は、聖戦の一部だったとまだ信じている人がいるのです」。彼は記者にそう言った。

南京大虐殺をめぐる論争

南京大虐殺に関する書物を著した勇氣ある日本人は、しばしば容赦ない攻撃に向き合うことになる。

洞富雄と本多勝一の例を挙げてみよう。早稲田大学の日本史の教授である洞富雄は一九六六年に、中国で行った虐殺を調査するために中国を訪れた。後に彼は、南京大虐殺に関する彼の研究を数冊の著作にして出版した。朝日新聞社の著名なジャーナリストだった本多勝一は、一九七〇年代と一九八〇

年代に中国本土に行つて南京大虐殺の生存者にインタビューし、日本の出版界で南京大虐殺を議論するというタブーを破つた。最初、彼の調査は「朝日新聞」に連載され、後に増補されて一冊の書物になった。洞および本多はいずれも、日本軍の兵士は一九三七年から一九三八年にかけて三〇万人前後の人々を殺害したという結論に達した。

両者はいずれも、日本で強暴な反動にさらされた。洞と本多に対するもつとも激しい批判者の一人は超保守派の論客鈴木明で、彼は『南京大虐殺』のまぼろし』と称する論文によつて二人の調査に挑戦した。鈴木は、本多や洞の記述のいくつかは捏造であり、南京大虐殺を実証する基本的な資料が存在しないから、南京大虐殺は「まぼろし」であると主張した。彼の論文をもとにして出版された本は、文藝春秋ノンフィクション賞を受賞し、文芸批評家は彼の「すぐれた勇氣」を絶賛した。洞が鈴木に対する反論を連載するやいなや、日本の幾人かの有名な著述家が鈴木を擁護すべく立ち上がった。

もう一人の論者は松井石根の庇護を受けたと自称する田中正明である。一九八四年に彼は本多に対抗するために、松井の陣中日記を資料に使用した『南京大虐殺』の虚構』という本を出版した。田中は、本多を「敵のプロパガンダ」を吹聴したと非難し、ヨーロッパや中国とは異なり、「歴史上：日本にないのは、計画的、組織的な大量虐殺だ」と主張した。その理由は、彼によれば、日本人が西欧人や中国人とは異なる「価値基準」をもっているからだというのである。多くの歴史修正主義者が田中の後に殺到し、本多と洞への攻撃に参加した。田中の本の前書きを書いた右翼の論客渡部昇一も、本多は「当時の日本軍将士、日本人一般、更にこれから生まれてくるわれわれの子供に対して犯罪的である」と論難した。

やがて、二つの陣営間での激しい論争が沸き起こった。一方の陣営は洞、本多およびその支持者から

なるリベラルな「虐殺派」で、もう一方は鈴木と田中が率いる保守の「まぼろし派」である。リベラル陣営はその調査結果を「朝日新聞」やその他の雑誌に公表し、保守派は「文藝春秋」、「諸君!」、「正論」といった右翼的な出版物に寄稿した。リベラル派は日本政府に中国での戦争犯罪の謝罪を要求したが、保守派はそのような謝罪は兵士たちへの侮辱であり、外国による日本への内政干渉であると考えた。

皮肉なことに、歴史修正主義者が南京大虐殺を否定するために、「虐殺派」に対する反証として始めた調査の資料が、彼ら自身の議論を反駁することになった。たとえば、一九八〇年代に旧陸軍将校の親睦・研究団体である偕行社は、南京大虐殺を否定するため、一万八千人の会員に証言を求めた。結果は「まぼろし派」を狼狽させるものであり、多くの偕行社の会員は南京大虐殺の詳細を確認し、虐殺の内容を証言したが、それは日本の強硬な保守論者でもぞつとするようなものであった。松井の配下にいた一人の将校は、参謀将校の命令による捕虜の殺害を一二万人前後と見積もった。しかし、のちに彼はそれを「数万人を下らない」という数に変更した。これが圧力を受けてのものであることは疑問の余地がない。しかし、その証言はこの調査の本来の目的を無効にし、偕行社の雑誌の連載のまとめの部分で、編集者は「この大量の不法処理には弁解の言葉はない。旧日本軍の縁につながる者として、中国人民に深く詫びるしかない。まことに相すまぬ、むごいことであつた」と書いた。

しかし、やがてさらに驚くべき事件が起こった。一九八五年、大衆歴史雑誌「歴史と人物」は、新たに刊行された松井の陣中日記に九〇〇箇所もの誤りがあるのを発見した。そのほとんどは、一次資料への意図的な改竄であり、この露見は日本中の歴史家を憤慨させた。それ以上に驚くべきことは、それらの改竄を行なった人物が、歴史の歪曲について強固な批判を論じていた田中正明その人であったことで

ある。

脅迫

南京における自分の犯罪を公然と認めた日本の最初の古参兵である東史郎に起こったことは、日本の脅迫システムにおける壮観で最悪の例である。一九八七年に、彼は元日本軍兵士として初めて、南京大虐殺での自分の役割を公開の場で謝罪し、衝撃を走らせた。大虐殺の五九年目の記念式典に参加するために、南京へ出発する前日に、彼は京都で新聞社とテレビ局に対して記者会見し、記者たちの質問に答えた。その結果は殺到する批判と殺人の脅迫だった。自分自身を護るために、東は会社を退職し、京都市の外の小さな村に引越し、そこで警棒、棍棒、催涙スプレー、鎖、メリケンなどの武器を保管する武器庫を作った。

長崎市長本島等の受難は、彼が市議会で共産党員に、天皇の戦争責任についての彼の考えを質問されたときに始まった。それは、一九八八年二月七日の、真珠湾攻撃から四七年目の記念日のことだった。そのとき、天皇裕仁は癌のために遠からぬ死を目の前にして、国中が、休日の祝い事を中止して昭和時代の終わりを悲しんでいた。本島は、海外の戦争に関する記事を読み、自分でも軍隊生活を送った経験から考えて、天皇の戦争責任はあると思うと答えた。彼の表明に対して、即座の激しい反応が返った。翌日、憤激した市議会議員や自由民主党の県連が彼の言葉を撤回することを要求したが、彼は「自分の心を裏切る」ことはできないといって拒絶した。

そこで彼の反対者は、暴力的な宣伝行動で嫌がらせをし脅迫して、市長を跪かせようとした。自由民

主党は県連の顧問を解任しただけでなく、さらに進んで県知事に市長への政治的な協力を拒否するよう説得した。右翼集団は本島の死を叫んだ。一九八八年一月十九日、二四の超国家主義集団が三〇台の街宣車で長崎市内を走り回り、「天誅」による本島の死を要求する言葉を叫んだ。二日後、長崎で氣勢を上げている集団は六二に増え、街宣車の数は八二台になった。神社本庁を含む多数の保守組織が彼の弾劾を叫んだ。一九八九年一月七日の裕仁の死から二週間も経たないうちに、右翼の狂信家が背後から本島を撃った（実際は本島元市長が狙撃されたのは、昭和天皇の死の一年と一〇日経った一九九八年一月一八日——訳者）。弾丸は彼の肺を貫通したが、市長は奇跡的に生きのびた。暗殺の試みは全国の右翼過激派を感激させ、ほとんどがその行為を「天罰」以外の何ものでもないと言張した。

南京大虐殺は、九年間の戦争の間の日本の野蛮な長い武勇伝における一つの事件でしかない。すでに大虐殺の前に、日本はタブーを破り、航空兵力を戦場での武器としてでなく、民間人を威嚇攻撃する手段として使用したアジアで最初の不名誉な国になった。そして、その軍事力により、上海に始まり南京を通って内陸部に向かって行った殺戮の戦役を発動した。

日本には、中国人の「最終解決」に当たるものはないが、大日本帝国の政府は中国の一定の地域にいる人間を全滅させる政策を是認していた。その最悪のものの一つが、中国共産党のゲリラ部隊が激しくかつ効果的に日本軍と戦っていた華北における「三光」作戦（奪いつくし、殺しつくし、焼きつくす）である。ある戦死した日本軍の大佐が、日記の中でこの政策の残酷な平明さを暴き出している。「私は上官から、この地域の人間はすべて殺せという命令を受け取った」。

その結果として、一九四一年、北部中国の住民を根絶やしにすべくテロ攻撃の大作戦が計画され展開された。これはその人口を四、四〇〇万人から二、五〇〇万人に激減させた。少なくとも中国研究者の一人、ジュールス・アーチャーは、その地域からいなくなった一、九〇〇万人のほとんどが日本軍に殺され

たのだと信じている。他の学者たちは、何百万人もの人が安全な場所に逃げたに違いないと推測している。China's Bloody Century (中国の血まみれの世紀)の著者R・J・ランメルは、たとえ減少した人口の五パーセントだけが殺戮の被害者だったとしても、一〇〇万人に近い中国人が殺されたことになる指摘する。

日本軍はまた、中国人に対して無慈悲な生物兵器の実験を遂行した。そのあるものは、一九四二年四月のドーリットル東京空襲への報復として、アメリカ軍の飛行機を助けたと疑われた中国の農村に向けられたものだった。爆撃機の着陸地となった可能性がある地域で、日本軍は二五万人の民間人を虐殺し、二万平方マイル(約五万平方キロメートル——訳者)の区域内にあるすべての中国の飛行場を掘り返した。この戦争で他の地域について行われたのと同じように、ここでは、都市と農村地区全域が疫病の標的にされた。現在では、日本の飛行機がペスト菌を感染させた蚤を上海、寧波または常德などの大都市地域に散布したこと、コレラ、赤痢、チフス、ペスト、炭疽熱、パラチフスなどの疫病を発病させる微生物をフラスコに入れて、川、井戸、貯水池、そして家屋に投じたことが分かっている。日本軍はまた、食べ物に致死性の病原菌を混入して、中国の民間人と軍人に感染させた。チフス菌を混ぜた餅を、露営地の周囲の腹を空かせた農民に食べさせるためにばら撒いた。チフス菌とパラチフス菌を注入した巻きパンを、釈放する前の数千人の中国人捕虜に与えた。

最終的な死者数は、一五七万八千人から六三二万五千人の間という、ほとんど信じがたい値である。R・J・ランメルの慎重な推定によれば、三九四万九千人が殺され、四〇万人以外は全員が民間人だった。さらに、彼は、日本軍の略奪、爆撃、そして医学実験が主要な原因で発生した飢餓と疫病によって、

数百万人が死んでいったと指摘する。これらの死を最終的な死者数に加算すれば、日本人は中国を攻撃した戦争で一、九〇〇万人を越える中国人を殺したのだと言ふことができる。

ほとんどの人は、虐殺を実施していたときの日本の兵士と将校の心を一体全体どのようなものかを通り抜けていたのかを想像することもできない。だが、多くの歴史家、目撃者、生存者、そして虐殺の加害者自身が、何が日本の皇軍のむき出しの残忍性を駆り立てたのかについて論じている。

ある日本の学者は、南京大虐殺をはじめとする日中戦争の非道の恐怖は、「抑圧の移転」と呼ばれる現象によって引き起こされたと信じている。Hidden Horrors: Japanese War Crimes on World War II (隠された恐怖—第二次世界大戦における日本の戦争犯罪)の著者であるタナカ・ユキによれば、近代日本の軍隊はその創設時点で、二つの理由から、残虐性を帯びる大きな可能性を孕んでいた。その理由とは、将兵に課せられた気紛れで残酷な待遇や扱いと上下関係が天皇との近さによって決定される日本社会の階層構造である。南京の侵略の前に、日本の軍隊は自分の兵士に際限のない屈辱的な仕打ちを課していた。日本兵は将校の下着を洗濯させられ、上官によって血まみれになるまで平手打ちされているときに、屈従して立ち続けていなければならなかった。オーウェル流の言葉を使用して、日本兵の日常的な殴打、あるいは「鞭撻」は、士官による「愛の行為」という用語で表現され、「鉄拳制裁」による日本海軍の暴力的な折檻は、しばしば「愛の鞭」と呼ばれた。

よく言われることだが、最も権力を持たない人間がある人々の生殺与奪権を与えられると、しばしば最もサディスティックになる。日本兵が海外に出るということは、階層の下位において、硬直的な階層に

よる憤怒をたぎらせている人間が、突然、そのはけ口を与えられるということだった。外国や日本領の植民地では、日本兵は、天皇の代理人として、従属者の間でとつともない権力を行使することができた。中国では、たとえ最下層の日本人でも、最も有力で最も著名な現地人よりも上位であると考えられたのであるから、何年もの間の抑圧された怒り、憎しみ、そして権威に対する恐れが、南京で制御できない暴力となつて噴出することになったことを理解するのは容易である。日本兵は、上官がどのように彼を虐待しようとも黙つて耐えていたのだから、ここでは、中国人は彼がどのような虐待方法を選ぼうとも、それを受けなければならぬのだと。

学者たちが信じている残虐行為の第二の要素は、日本軍の多くが中国人に対して抱いていた悪意的な蔑視観である。その意識は、数十年間のプロパガンダ、教育、そして社会的な規範化によつて培養された。日本人と中国人の人種的な特徴は同じではないとしても、似ているのだが（この類似性は、歪んだ形で、自分たちは唯一無二だという彼らの幻想を脅かしていたかもしれない）、皇軍には中国人が人間以下の存在だと考え、それを殺害することに、虫を叩き潰すことや豚を屠殺することよりも重い道徳的な問題を感じることはない人たちがいた。事実、戦前及び戦中のあらゆる階級の日本の軍人たちは、しばしば中国人を豚と比べた。たとえば、ある日本軍の将官が記者に言っている。「率直に言えば、君と僕は、中国人をみる観方が根本的に違う。君は中国人を人間として扱っているようだが、僕は中国人を豚だと思つている」。南京で中国人捕虜を一〇人ずつの組に縛り、組ごとに穴に突き落とて、焼き殺した日本軍の将校は、この殺人を犯しているときの感覚が豚を屠殺しているときのもと同じだったと説明して彼の行為を弁明した。一九三八年、日本兵東史郎は南京での日記の中で、「一人の支那人の命より、一

匹の豚の方が大切なのである。なぜなら豚は食えるからである」と告白している。

第三の要素は宗教である。暴力に神聖な意味を吹き込むことにより、日本の皇軍は暴力を文化の規範にした。そのすべての構成部分が、ヨーロッパ人を十字軍やスペインの異端審問に駆り立てたものと同じ位の強力さを持つていた。「すなわち一つの弾丸にも皇道がこもっており、銃剣の先にも国徳が焼き付けられておらねばならぬ」。ある日本の士官が一九三三年の演説のなかで、こう宣言した。

中国における自分たちの任務の正しさを疑う日本人はほとんどいなかった。南京大虐殺に参加した元日本兵の永富博道は、天皇は生まれながらの世界の支配者で、日本人は人種的に世界の他の民族よりも優位にあり、アジアを掌握することは日本の運命だと信じ込むように躡けられたと言った。地方のキリスト教聖職者が彼に「神と日本の天皇とどちらが偉いのか？」と聞いたとき、彼は「天皇」が正しい答えであることを疑わなかった。神よりも高い存在を一方においたとき、日本の軍部が、戦争は暴力を伴うとはいえ究極的には日本だけでなくその犠牲者にとっても同じように有益だという信念を採用するという、次の段階に進むのは難しいことではなかった。あるものは、虐殺は日本の勝利を成就するために必要な道具だと考えていた。しかも、日本の勝利こそが、「大東亜共栄圏」の下で良い中国を作り上げることに貢献し、それを援助するものである。この姿勢は、無感覚に学生や兵士を殴り、打撃の合間に、これはすべてお前たちのためなのだと言っていた教師や将校たちのそれと共鳴する。

多分、日本の中国への圧迫を正当化しようとした松井石根大将の言葉が、自己妄想におちいった当時の共通した心理状態を最もよく要約しているだろう。一九三七年、上海に派遣される際に、彼は支持者に「自分は戦に行くというより兄弟をなだめるつもりで行くのだ」と語った。後に彼は中国侵略につい

て語っている。

抑も日華両国の闘争は所謂「亜細亜の一家」内に於ける兄弟喧嘩にして……恰も一家内の兄が忍びに忍び抜いても猶且つ乱暴を止めざる弟を打擲するに均しく其の之を悪むが為にあらず可愛さ余つての反省を促す手段たるべきのことは余の年来の信念にして……。

戦後史がどのような経路を辿つたとしても、南京大虐殺は人間存在の名譽に染み付いた汚点だった。しかし、汚点を特に厭わしくしているものは、歴史がこの事件に対する適切な終幕を全く完遂していないことである。六〇年が過ぎても、国家としての日本は未だに南京の犠牲者たちを埋めようとしている。一九三七年のように土の下に埋めるのではなく、歴史の忘却の下に。こうして、恥知らずな違反行為が複合的に進行する中で、これを系統的に記録し語り継ぐこととする人があまりにも少ないので、西側では、南京大虐殺はほとんど闇に葬られかけている。

本書は、これらの犠牲者を日本の歴史修正主義者の更なる冒瀆から救い出し、南京の埋もれた数千の墓所の数百にでも、自分の手による墓碑銘を捧げようとする努力を開始するものだった。それは、人間の性質の影の部分に対する個人としての探求になった。南京の事件は、多くの重要な教訓を後世に伝えている。その一つは、文明は絹布のように薄いということである。日本は例外的に邪悪で危険な民族で、けつして変わることはないと信じている人もいる。しかし、いくつもの書棚に積み重ねた日本の戦争犯罪に関する意味深い文献を読み、それ以外にも、遠い世界史に遡って古代からの虐殺の記録をも読んで

きた後の私の結論は、それとは異なるものである。第二次世界大戦の時期の日本の行動は、危険な民族の産物なのではなく、危険な政府の産物である。脆い文化の中で簡単に出現することができる危険な時代において、人間の自然な性質に従えばけつして受容することができない危険な事柄を人々に合理化させ納得させ、そこに誘導するという、危険な政府の産物である。我々は南京大虐殺という歴史の事実からの警告を正しく受けとらなければならない。人間という存在は、なぜこんなにも容易に、自分たちの若者を、その良い本性を抑圧させ効率的な殺人機械に変えてしまう鑄型にはめ込むことができるのだろうか。

南京の事件から得ることができるもう一つの教訓は、ジェノサイドにおける権力の役割である。歴史を通して大規模な殺戮のパターンを研究したものは、政府における純粹な権力の集中が致命的であることに気づく。それは、抑制されない絶対的な権力は南京大虐殺のような大虐殺を行うことができるという意味に他ならない。R・J・ランメルはデモサイド（ジェノサイドと政府による大量殺人の両方を含めるために彼が作り出した用語）に関する世界最高の権威であるといつてよいだろう。彼は、一九九〇年代に、今世紀に起こった虐殺とそれ以前の時代に起こった虐殺の両方を対象にした、系統的かつ数量的な研究を完成した。その研究の印象的な核心を、彼はアクトン卿の有名な言葉の言い換えによって要約している。「すべての権力は殺す。絶対的な権力は絶対的に殺す」。ランメルは、政府内部の制約が小さければ小さいほど、政府は恣意的に行動し、その指導者が外国の政府との戦争を遂行しようという暗い衝動に襲われやすくなるということを発見した。当時の日本も例外ではない。南京大虐殺のような残酷行為は、抑制されない権力である軍と皇族のエリートに支配され、制約されない力を持つ少数者の、

病んだ目標の実現のために、その国民全員を駆り立てるような独裁体制に対して譲歩した結果の必然でないとしても、予測可能な帰趨だったのではないだろうか。

多分、第三の教訓は最も悲惨なものだろう。それは、ジェノサイドを受け入れることを可能にし、考えられないような事態に対して、すべての人々を受動的な傍観者に変えてしまう、恐ろしい安易さの中にある。南京大虐殺は世界中の一面のニュースだったが、世界のほとんどは市全体が屠殺されているときに、傍らに立っていて何もしなかった。南京大虐殺への国際的な反応は、現在のボスニア・ヘルツェゴビナとルアンダでの虐殺に対する反応と不気味に相似している。何千もの人々が信じがたい悲惨な状況で死んでいるときに、世界中がCNNを見て、悲痛な気持ちになっている。アメリカ合衆国やその他の国々が、ナチの「最終解決」の遂行を妨害するために早期に介入することができなかったのは、ジェノサイドが戦争の中で秘密に効率よく遂行され、連合軍の兵士が強制収用所を解放しその目で戦慄の規模を見るまでは、ほとんどの人が報告をその通りに真実であると受け入れることができなかったからだという議論もあるかもしれない。しかし、南京大虐殺に対しては、あるいは旧ユーゴスラビアの虐殺に対しては、そのような弁明は通らない。南京大虐殺は、「ニューヨーク・タイムズ」のような多数の新聞の紙面に掲載され、明らかなものだったし、ボスニアの非道は実質的にすべての家庭のテレビで放映されていた。明らかに、人間の本性のある部分には、非常に邪悪な語ることもできない行為であつても、それが十分に遠方で発生していて自分を脅かす恐れがなければ、数分間に陳腐化させることを許してしまう要素がある。

悲しいことに、日本が南京の犯罪を謝罪するどころか、それを認めることさえも拒絶し、日本の超国

家主義者が世界史からその事件を消去しようとしているという事態の、まさに日本の二度目のレイプの前で、または世界は受動的な傍観者として行動している。不正義の程度を測るための信頼できる基準は、日本とドイツの政府が自分たちの戦争による被害者のために実施した戦後補償を比較するだけ得ることが出来る。確かに、金銭だけでは殺された被害者を生き返らせることはできないし、生存者が受けた拷問の記憶を消し去ることはできないが、少なくとも、被害者に対して行われたことが他の邪悪な行為をも代表していたことを伝えることができる。

ドイツ政府は補償金と賠償金で少なくとも八八〇億ドイツマルクを支払っていて、二〇〇五年までにさらに二〇〇億ドイツマルクを支払うことになっている。ドイツ人が支払った総額を、個々の被害者への補償金、失われた財産の損害賠償、補償年金、国交正常化に基づく支出、特別な事例の最終的な賠償金、そしてイスラエルおよび他の一六国との包括的な合意による金額に分数すれば、合計は約一、二四〇億ドイツマルク、つまり約六〇〇億米ドルになる。日本がその戦争の被害者に支払ったものは皆無に近い。スイスでさえもユダヤ人の銀行口座から盗まれたものに換えるために数十億ドルの担保を用意する時代に、多数の日本の高官たちは、自分たちの国が補償をすることはおろか、謝罪ですらも必要とするようなことは何もしなかったと信じ（あるいは信じているように装い）続けている。そして、彼らが政府が犯したと非難されてきた最悪の犯罪の多くは、起こらなかつたことで、それが発生したことを示す証拠は、中国人やその他の反日分子が捏造したものだとして抗弁し続けている。

今日、日本政府は戦争賠償の問題はすべて一九五二年のサンフランシスコ講和条約で解決したという立場を取っている。しかし、この条約を細かく読めば明白なのが、この問題は日本の財政状態が改善

されるまで延期されただけに過ぎない。「日本国は、戦争中に生じさせた損害及び苦痛に対して、連合国に賠償を支払うべきことが承認される」。条約の第五章第一四条は言う。「しかし、また、存立可能な経済を維持すべきものとすれば、日本国の資源は、日本国がすべての前記の損害及び苦痛に対して完全な賠償を行い且つ同時に他の債務を履行するためには現在充分でないことが承認される」。

冷戦の最大の皮肉の一つは、日本が補償を支払う責任を逃れただけでなく、アメリカ合衆国から何十億ドルもの援助を受け取り、そのことによって旧敵国が経済大国としてアメリカを脅かす競争者になることを支援したということである。現在、アジアには、日本国民の間に復活しつつある軍国主義を、大きな関心を持って眺めている人々がいる。レーガン政権時代にアメリカ合衆国は日本がその軍事力を強化するのを後押しした。これは、日本の侵略戦争の被害を受けた多数の人々に警戒感を抱かせるものだった。「歴史を無視する人は、歴史の被害者になるでしょう」。フィリピンの外務大臣カルロス・ロムロは警告した。彼は、ピューリッツァー受賞者で、第二次世界大戦ではマッカーサー元帥の副官を務め、日本の文化が生み出す競争的な国民性を理解していた。「日本人は非常に決断力のある国民です。第二次世界大戦の終結時に、日本が最上位の経済大国になるとは誰も予想しませんでした。しかし、彼らはそうなった。もし、彼らに軍事大国になる機会を与えれば、彼らは軍事大国になるでしょう」。

しかし、冷戦は終結し、中国は共産主義のさなぎから急速に抜け出し、戦争で日本に虐げられた他のアジア諸国も国際的な経済の競争社会での成長により、日本に挑戦することが可能になってきた。数年の間には、日本の戦争犯罪に対する活動の大きな進展を見ることができるとも言える。アメリカでは、人口割合におけるアジア人の比重が増しつつある。そして、中国系アメリカ人や中国系カナダ人の若い

世代は、彼らの親の世代の職業が科学分野に偏重していたのとは異なり、法律、政治、ジャーナリズムなどの、歴史的に北米のアジア人が従事してこなかった職業の分野における影響力を急速に獲得しつつある。

南京大虐殺に関する一般的な認識の度合いは、私が本書の執筆準備を始めた時期と、それを書き終えた時期の間で、大きく増加している。一九九〇年代には、南京大虐殺、従軍「慰安婦」、日本の生体医学実験、あるいはそれ以外の第二次世界大戦期の日本の残虐行為を取り上げた多数の小説、歴史書、そして新聞記事が書かれた。サンフランシスコの学校地区委員会は、南京大虐殺の歴史をカリキュラムに含めることを計画しているし、中国人の不動産業者の間では、中国のホロコースト博物館を建設しようという青写真がつけられている。

本書の完結の間際に、アメリカ合衆国政府は日本を彼らの戦争の過去に向き合わせるべきだという活動家の要求を受け入れ始めた。一九九六年一二月三日に、司法省は日本の戦争犯罪人の監視リストを作成し、彼らの入国を禁止した。一九九七年四月、前駐日大使ウォルター・モンデールは新聞記者に、日本は真摯に直ちに歴史に向き合う必要があると語り、日本がその戦争犯罪に対して完全に謝罪することを希望すると表明した。南京大虐殺は、間もなくアメリカ下院に提出される法案でも取り上げられている。一九九七年の春に、人権活動家と協力した法律家が、第二次世界大戦における日本軍のアメリカ人とその他の国の捕虜の虐待を告発し、戦争の犠牲者に対する公的な謝罪と補償を求める法案を起草した。日本政府に、戦時における政府の遺産のすべての真実を直視させようとする運動は、日本国内においてさえ支持を集めている。戦争での残虐行為の公的な否定は、自分たちは単に日本人でありさえすれば

良いのだとは考えない日本市民たちに、大きな羞恥と困惑を感じさせている。発言する少数派は、彼らの政府が将来、隣国からの信頼を勝ち取ろうと思うならば、その過去を認めなければならないと確信している。一九九七年に、和解のための日本評議会は、次の声明を発表した。

過去の戦争で、日本は他のアジア諸国に対する侵略者として、傲慢に、尊大に振る舞い、多数の人々、特に中国の人々に悲劇をもたらした。一九三〇年代を含む一五年間、日本は中国に対する戦争を継続した。戦争行為が続く中で、数千万人の人々が犠牲になった。ここに、我々は日本の過去の過ちを真摯に謝罪し、彼らの許しを請うものである。

日本の現在の世代は重要な分岐点に立っている。彼らは、日本の侵略戦争は聖戦だったし、アメリカの物量のためにだけ負けた戦争だったと自分自身を欺き続けることもできるし、真実を認めて、彼らの国の恐怖の遺産を完全に解消することもできる。日本が戦争に敗れ、その苛酷な「愛」を、それ以上人々に課することができなくなったために、世界は良くなったという真実である。もし、現代の日本が真実を擁護するための処置を何も講じなければ、彼らは歴史により戦争時の祖先と同じように自分たちもまた不名誉の中に取り残される危険を背負うことになる。

日本は、かつて南京で犯した悪行を認めなければならぬ法的な義務だけではなく、道義的な責任も負っている。最低でも、日本政府は公式の謝罪を発表し、騒乱の中で人生を失った人々のために補償を支払う必要がある。しかし、最も重要なのは、将来の世代の日本の市民に、虐殺の真実を教育すること

である。日本が国際社会で尊敬に値する国になり、その歴史に染みついた暗黒の章の終結を完遂することを望むのならば、これらのすでに遅れた対応を踏み進むことが決定的に重要なのだ。

謝辞

本書の執筆中に、私は多大な負債を負った。本書の作成の最初の段階から多数の組織と個人が際限なく私を支えてくれた。この数年間、私を助けるためにその時間と専門知識を割いてくれたすべての人に謝辞を述べるのは不可能だが、多くの方々についてここで特記しておかなければならない。

私の両親、張紹進と張盈盈の二人の博士は、南京大虐殺とその歴史における重要性を私に最初に語ってくれた。私は、彼らが時間を省みずに私の草稿を読み、重要な文献を私のために翻訳し、電話を通して長い議論の間に貴重な助言を与えてくれたことに深く感謝している。彼らは、賢明で、情熱的で、啓示的な、文筆家にとって理想的な夢のような両親である。本書を書いている間、彼らが私にとってどのようなものだったのか、私以外には真に理解できる人はいない。

私の編集者スーザン・ラビナーも、本書の歴史的重要性を認識し、私の執筆を勇気づけてくれた。数週間、数ヶ月を越える間、彼女は私の原稿を一行ごとに精査しただけでなく、彼女の素晴らしい理解力によってそれを大きく改善させた。編集長としての重い管理責任と、ベイシック・ブックス社を離れる直前に彼女が感じた個人的な圧迫感の中で、それをなし遂げてくれた。今日の出版の世界に、スーザン・ラビナーのように文学の才能、真実の核心に迫るノンフィクションの技能に関する深い知識、そして著者に対する真摯な配慮を兼ね備えた編集者は他にいない。彼女と長く仕事をともにできたことは、私の

喜びだけだけでなく、私の特権だった。

世界抗日戦争史実維護聯合会は私が南京大虐殺を研究するときの大きな支えであり、私に写真、論文、そして世界中の重要な関係者との連絡方法を提供した。同盟の中で、特に私にお力を貸してくれたのはイグナティアスおよびジョセフィン^{ドイツ}、デイヴィッドおよびキャシー^{ツェン}常、ギルバート^{チャン}張、ユージン^{ウエイ}魏、^{ツァオ}J・J・曹、クオホウ^{ツェン}常の方々である。

本書に血肉を与えてくれたのは、重要な文献の翻訳を支援してくれた方々である。四種類の異なる言語（英語、中国語、日本語をしてドイツ語）で書かれた一次資料を利用する書物を完成させるために、私は友人、同僚、そして面識のない方々の好意にまでも強く頼らなければならなかった。聡明なハイテク分野のエグゼクティヴ（企業の上層の経営者）で、五ヶ国語に堪能な私の友人バーバラ・メイジンは、貴重な時間を割いてドイツ語の外交報告書と日記を英訳してくれた。サンディエゴ在住のスギヤマ・サトコはボランティアで日本兵の戦時の日記を翻訳してくれただけでなく、南京の元日本軍兵士東史郎と私の文通の手紙を翻訳してくれた。

ハンブルクの歴史家チャールズ・バーディックとマーサ・ビージマンは、南京安全区の責任者だったジョン・ラーベの子孫を探し出すのを助けてくれた。私はジョン・ラーベの孫娘ウルスラ・ラインハルトに感謝の言葉を述べたい。彼女は、ラーベの人生の詳細な説明と、彼の報告書および日記のコピーを提供してくれた。また、朝日新聞社のジェフ・ハイネンにも、彼の好意によりラーベの文献の素晴らしい翻訳を提供してくれたことに、多大な感謝の言葉を述べたい。

東海岸への取材旅行を成功させてくれた友人たち。ニューヨークの湯美如^{ナンシー・タン}は、彼女の素晴らしいド

キュメンタリー映画 *In the Name of the Emperor* (天皇の名において) に関連する資料を貸してくれた。シャオピン、邵子平と彼の家族はニューヨーク州ライ市で、親切に、部屋、食事、そして優しいもてなしを与えてくれ、ニュー・ハーヴェンのエル大学神学大学院の図書館に通うために彼らの自動車を貸してくれた。リーシェンイン、李昇言と彼の妻ウィニーC・李^リ (美華論壇の前の発行人)、および歴史家のマリアン・スミスは、ワシントンDC滞在中の私に私心のない態度で交通手段、宿泊施設、そして精神的な援助を与えてくれた。国立公文書館では、ジョン・テイラーが南京大虐殺関係の信じられないほど多数の資料の検索方法を指導してくださり、地方の軍事および外交記録、日本の外国事務所の交信の傍受記録、OSS (戦略情報局) の記録と原稿、および極東国際軍事裁判の証拠を見つける手助けをしてくれた。

太平洋文化基金会は、私のアジアへの取材旅行の費用を負担してくれた。南京では、江蘇省社会科学院歴史研究所副所長孫宅巍と侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館の副研究員段月萍が、私と共同で南京大虐殺に関する貴重な中国語文献を調査し、また市内各地の処刑場に案内してくれた。通訳の楊夏鳴と王衛星は、私と長時間作業し、文献の翻訳や取材したビデオテープのインタビューの筆写を手伝ってくれた。

中華民国では、現代歴史研究所の李恩涵が、私が中央研究所に滞在し大虐殺に関する調査を継続する手配をしてくれた。「中国時報」の記者キャロライン林は、親切に私にこの問題についてのさまざまな連絡先と資料を私に提供してくれた。古参兵林宝丁、林荣坤、程君清、王万勇そして劉永忠も彼らの資料に対する前例のない取材の機会を私に許してくれた。

南京大虐殺の何人かの生存者たちは、彼らの体験を私に話して、過去の恐怖を再現してくれた。ロサ

ンジェルスの牛先明^{ニウシェンミン}、南京の陳徳貴^{チェンデグイ}、ホウ・ツァンチン^{ホウツァンチン} (Hou Zhanqing)、李秀英^{リーシューイ}、リュウ・フォン
 フォア (Liu Fonghua)、ニウウ・ヨンシング (Niu Yongxing)、潘開明^{パンカイミン}、唐順山^{タンシュンサン}、夏淑琴^{シャシューチン}、中華民國の
 シャン・ツァオフ (ジエフリー・シャン)、ツウー・チュアンユイイ (Zhu Chuanyu) の各方々である。

アメリカとヨーロッパの目撃者の生存者とその家族のほとんどが、彼らの時間と情報について無制限
 に寛大で、私の電話インタビューに応じ、大虐殺の写真、文献、そして映画フィルムまでを提供してく
 れた。ロバートおよびモートン・ベイツ、タニア・コンドン、フランク・テイルマン・ダーディン、マ
 リオン・フィッチ・エクスター、ロバート・フィッチ、マージ・ガレット、ピーター・クレイガー、エ
 ンマ・リオン、デイヴィッド・マギー、アンジーおよびハリエット・ミルズ、フレッド・リグズ、チャー
 ルズ・ソーン、リランド・スチュワード、エディス・フィッチ・スワップ、マージョリー・ウイilson、
 およびロバート・ウイilson・ジュニアの各方々である。

オクスフォード大学のラナ・ミッターおよびクリスチャン・ジェセンクリンゲンバーグ、コロンビア
 大学のキャロル・グラックをしてハーヴァード大学のウイリアム・カービーは時間を割いて出版前の本
 書のレビューをしてくれ、貴重な学術的示唆により本書を充実させてくれた。

サンフランシスコでは、何人かの日本人およびアジア人が私に会い、南京大虐殺と日本人の第二次世
 界大戦の責任の否定についての彼らの視点を議論した。一九九七年五月三十日のワークショップを組織
 するときのハル・ムラカワが援助してくれたことと、シタニア・タムが事務所をミーティング用に使用
 させてくれたことは嬉しいことだった。ワークショップの参加者たちには、大きな謝意を表したい。ア
 キラ・ドウムラ、ケイコ・イトウ、ケンジ・オカ、チン・ジェン、スエコ・カワニシ、コニー・イー、

ヒロキ・ヤマジ、ノリコ・ヤマジ、ヤスヒロ・ヤマジおよびその他の方々である。

本書を完成させるためにさまざまな方向から私を補助してくれたのは、サイモン・アヴェネル、マリリン・ポウル、フランク・ボアリング、マーク・カジガオ、ジュリアス・チャン、バーバラ・カリトン、ジム・カルプ、エドワード・ドッツ、マーク・エイクホルト、デイヴィッド・ファーンズワース、ロバート・フリードリ、リチャード・フモサ、クリス・ゴフ、ポール・ゴロブ、ギルバート・ヘア、ヒロ・イノクチ、ロン・キン、ペトラス・リウ、デイヴィッド・マックワーター、カレン・パーカー、アクセル・シュナイダー、ジョン・スウイーニー、シゲヒサ・テラオ、マージョリー・トラヴァース、アオ・ウオン、ゲイル・ウインストン、ウーティエンクエイ呉天威、イシジェイムズ伊、および史咏シヨウなどの方々である。

最期に、私は私の夫ブレットン・リー・ダグラス博士に感謝の言葉を捧げなければならない。彼は中国での日本の残虐行為の恐ろしい話を次から次へと聞かされることを、不平も言わずに我慢してくれた。彼の愛、智慧そして勇気が私に本書を完成させる力を与えてくれた。

註

原書の註は、

1. 章の名前で分類されている。
2. 原書のページと、註記の対象となる文章が抜粋されている。
3. 対象部分の根拠となる文献、引用元の文献、あるいは著者の解説などが書かれている。

という構成になっている。本書では、以下の順になっている。

1. 章の順に分類されている。
2. 原書のページについて註記対象の翻訳テキスト（ゴシック表記）。
3. 対象部分の根拠となる文献、引用元の文献、あるいは著者の解説の翻訳を書く。文献に日本語訳版があり、それを確認している場合は、併記する。引用文献が日本語の文献の場合は、それを書く。日本語文献からの引用と思われるが、参照経路がはっきりしない場合は、分かっている範囲の情報を書き、その旨明記する。その他、不明点がある場合にも、判明している情報を書き、その旨明記する。〔 〕内は訳者による。

※原註各項目の行頭で示す肉太の数字は原書のページ数であり、この翻訳書では本文の欄外上端につけた肉太の数字と対応している。

序

- 4 後年、極東国際軍事法廷の専門家は：「表：日本の南京大虐殺の推定犠牲者数」文書番号 1702、極東国際軍事法廷法定証拠、1948、第二次世界大戦戦争犯罪集、箱番 134、項番 14、記録グループ 238、米国立公文書館。
- 5 ある歴史家は…と計算しているが：呉志鏗（ウーツークン）による推計。*San Jose Mercury News*, 1988 年 1 月 3 日。
- 5 カルタゴのローマ人：フランク・チョークとクン・ジョナサン Frank Chalk and Kun Jonassohn, *The History and Sociology of Genocide: Analyses and Case Studies* (ジェノサイドの歴史と社会学: 分析と研究, New Haven, Conn.; Yale University Press, 1990) p.76。
- 5 ティームールの不気味な残虐行為：アーノルド・トインビー Arnold Toynbee, 1947, p.347 を引用、Leo Kuper, *Genocide: Its Political Use in Twentieth Century*

(ジェノサイド：二十世紀におけるその政治利用、New Haven, Conn. : Yale University Press, 1981) p.12。

- 5 実に、歴史上の最も破壊的な戦争は何かという標準で考慮した場合でさえ：ヨーロッパ諸国の死者数については、R. J. ランメル R. J. Rummel, *China's Bloody Century : Genocide and Mass Murder Since 1900* (中国の血まみれの世紀：1900年以降のジェノサイドと大量殺戮、New Brunswick, N. J. : Transaction, 1991) p.138 参照。
- 6 南京では、イギリスによるドレスデン空襲とそれに続く集中砲撃の結果……よりも多数の人々が殺されたということになる：ドレスデン空爆の統計資料は、ルイス L. スナイダー Louis L. Snyder, *Louis Snyder's Historical Guide to World War II* (ルイス・スナイダーの第二次世界大戦史ガイド、Westport, Conn. : Greenwood Press, 1982) p.198-199 を使用した。
- 6 前述の最も内輪の見積もり数の二六万人を採用するにしても：ブリゲイジャー・ピーター・ヤング編 Brigadier Peter Young, *The World Almanac Book of World War II* (第二次世界大戦の世界年鑑、Englewood Cliffs, N. J., World Almanac Publications/Prentice-Hall, 1981) p.330。広島と長崎の原爆投下による死者数については、Richard Rhodes, *The Making of the Atomic Bomb* (New York : Simon & Schuster, 1996) p.734,740 参照。Rhodes は、1945年の末までに、広島で約14万人、長崎で約7万人が死んだと主張する。死は継続し、5年後には合計で、広島で20万人、長崎で14万人が原爆に関係する原因で死んだとする。しかし、五年後の両市の死者数を合わせても、南京大虐殺の犠牲者数の最大の推定値よりも少ないということに注意すべきである。
- 6 強姦された中国人の女性は二万人から八万人に上ると見積もられる：キャサリン・ローゼル Catherine Rosair, *For One Veteran, Emperor Visit Should Be Atonement* (一人の元兵士にとって、天皇の訪問は償いであるべきだ)、ロイター、1992年10月15日。ジョージ・フィッチ, *Nanking Outrages* (南京の暴行)、1938年1月10日、ジョージ・フィッチ・コレクション、エール神学大学院図書館。中華民国の歴史家李恩涵(リーオンハン)は、8万人の女性が強姦され、切り刻まれたと推定する。'The Great Nanking Massacre' Committed by Japanese Army as Related to International Law on War Crime (日本軍が犯した「南京大虐殺」戦争犯罪の国際法との関係での考察、*Journal*

of *Studies of Japanese Aggression Against China*, 1991年5月) p.74。

- 6 多くの兵士は強姦に飽き足らず：生存者への著者のインタビュー。
- 6 「けだもの集団」：クリスチャン・クレーガー *Days of Fate In Nanking* (南京の運命の日々)、ピーター・クレーガー所蔵、未刊行の日記。米国立公文書館の東京裁判判決書にも。
- 7 「ヒトラーのナチでもやらないことだ」：ロバート・レッキー *Delivered from Evil: The Saga of World War II* (悪魔からの解放：第二次世界大戦の物語) (New York: Harper & Row, 1987), p.303。
- 10 会議の期間中に、私は南京大虐殺に関係する二冊の小説と：R. C. ビンストック R. C. Binstock, *Tree of Heavens* (天国の木、New York: Soho Press, 1995)。ポール・ウェスト Paul West, *Tent of Orange Mist* (オレンジの霧のテント、New York: Scribners, 1995)。
ジェームス伊 (イン) および史咏 (シーヨン)、*The Rape of Nanking: An Undeniable History in Photographs* (ザ・レイプ・オブ・南京：否定できない歴史の写真集、Chicago: Innovative Publishing Group, 1996)。
- 12 「ベルリンのど真ん中にヒトラーを祀る大聖堂を建設する」：ギルバート・ヘア、著者との電話によるインタビューで。

第一章 南京への道

- 19 古代のこの島では：タナカ・ユキ, *Hidden Horrors: Japanese War Crimes in World War II* (隠された恐怖：第二次世界大戦での日本の戦争犯罪、Boulder, Co.: Westview, 1996), p.206-8 (英語の本では、アメリカ流にユキ・タナカとしている)。タナカによれば、近代日本の武士道は、古代の本来の目的の武士道から墮落している。元の掟は、武士が、些細なことではなく、正しい原因に対して死ぬことを命令している。しかし、第二次世界大戦の時期に士官たちは、訓示の言葉を思い出すときに詰まったというような、多くの馬鹿げた理由で儀式的な自殺を図った。同時に、忠節の概念は、盲目的な服従と無謀な暴力の蛮勇に置き換えられた。
- 20 驚くべきことに、日本軍の部隊の場合には：メイリオン・ハリーズとスージー・ハリーズ Meirion Harries and Susie Harries, *Soldiers of the Sun: The Rise and Fall of the Imperial Japanese Army* (太陽の兵士：大日本帝国皇軍の興

亡、New York: Random House, 1991), p.vii.

- 21** 「これと同じような状況を言うならば…」：サミュエル・エリオット・モリスン Samuel Eliot Morison, *Old Bruin: Commodore Matthew C. Perry 1794-1858* (老いた熊さん：マシュー C. ペリー提督 1794-1858、Boston: Atlantic-Little, Brown, 1967)
- 22** 「器械ニ於テハ彼ニ及フヘクモ有ラサレハ」：デルマー M. ブラウン Delmer M. Brown, *Nationalism in Japan: An Introductory Historical Analysis* (日本の民族主義：歴史的分析の序説、Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1955) p.75。(ブラウンは馬場文英・李行山人編『元治夢物語』のアーネスト・サトウによる翻訳版である Japan 1853-1864 から原書第一巻丁七の箇所を引用している)。
- 24** 「海外に拡張して他国を支配するよう運命づけられている」：「太陽」1905年7月号、前掲書、144 ページで引用している。
〔訳註：「太陽」1905年7月号、鳥谷部春汀「人物月旦—所謂の博士組」に、日本は戦争によって中国朝鮮を征服して領土を拡張しなければならないという趣旨の議論が展開されている。この要約記事が、Japan Weekly Mail, 1905年7月22日に掲載されている。destined to expand and govern other nations という文言は、Japan Weekly Mail の、
With all the forward nations there is the feeling, “We are destined to expand and govern other nations.”
の部分から引用したものと思えるが、この記事は原文の要約なので、この文言に合致する原文の文言がどこにあたるのかは、明瞭ではない。強いてそれを特定するとすれば、30 ページの「而して他の大なる領土を有する国民と競争して、終にその征服する所となるを免かれざらむとするの観あり。是れ正さしく時代の趨勢なりと謂ふも可なり」の部分であろうか〕
- 24** 近代化によって、この国は：前掲書、152 ページ
- 26** 人口は、一九三〇年代には約六千五百万人に膨張しており：ポール・ジョンソン Paul Johnson, *Modern Times: The World from the Twenties to the Nineties* (現代：20年代から90年代までの世界、New York: Harper-Collins, 1991), p.189。
- 26** 「免(まぬが)るゝ途(みち)は三つしかない」：W. T. デバリー編 W. T. deBary, *Source of the Japanese Tradition* (日本の伝統の源泉、New York, 1958), p.796-797。前掲書、189 ページで引用。

[橋本欣五郎『青年に贈る』平凡社、1937年、187ページ]

27 軍の宣伝担当者であった荒木貞夫は問いかける。なぜ：前掲書、189ページで引用。

27 日本の強欲の目標は：同前、393ページ。この時代の日本の超国家主義者の一部のアメリカ合衆国に対する野心については、「海軍作戦代理局長の記録、1882-1954、海軍情報局、海軍武官の報告書、1886-1939、箱番525、項番98、記録グループ38、米国立公文書館」を参照。すでに1932年12月の合衆国海軍情報局の報告書は、日本でよく売れている本の多くが戦争に関する本で、特に日米戦争の可能性についての本であることを指摘している。この報告書およびその他の文献は、日本によるアメリカ合衆国に対する攻撃を主題とする日本の書物、論文、パンフレット、および講演の内容を分析している。これらの出版物の表題には、「アラスカ空爆」、「ハワイ攻撃」、あるいは「カルフォルニア攻撃」などというものがあった。アメリカ海軍情報局が所蔵している、その種の日本のプロパガンダの少数の例を紹介する（記されている名前は英語の報告書で書かれているままのもので、スペルは間違っているかもしれない）。

—K. 水野大佐 (Captain K. Midzuno) の講義は、日本軍が真珠湾を航空機で攻撃する戦略を構想していただけだけでなく、アメリカの東京空襲の可能性を予見していたことをも明らかにしていた。

—「日本の危機：太平洋大海戦 (*Japan in Danger: A Great Naval War in the Pacific Ocean*)」でナカジマ・タケシ (Nakadzima Takesi) は、海戦と航空戦によって、日本の対米戦争で勝利するシナリオを描いていた。

—「増大する日米危機 (*Increasing Japanese-American Danger*)」で、セサ・タネツグ海軍中将 (Vice Admiral Sesa Tanetsugu) は、日米の衝突は避けられないと確信していると書いていた。

—イケザキ・タラクタ (Ikedzaki Talakta) は「運命付けられている日米戦争 (*The Predestined Japanese-American War*)」という、日米戦争の不可避性についての論文集を編集している。新聞の書評はこの本を「情熱的な祖国愛の労作」と賞賛し、読者に「日本が剣を抜けば、虚飾に満ちた尊大なアメリカは無力である」と保証した (1933年2月3日の報告書、p.260)。

27 「東西両強国の生命を賭しての戦いが、恐らく従来も然りし如く、新世界出現のための避け難き運命である」：デルマー・ブラウン、前掲「日本の

民族主義」p.180。大川周明の『亜細亜、歐羅巴、日本』82 ページも参照。
英訳は、IPS 文書番号 p.64、p.34 「分析」。

〔訳註：大川周明「大川周明全集第二巻」、大川周明全集刊行会、1962 年、
872-873 ページ〕

- 29** 中国との避けられない戦争に備えて：テッサ・モリス・スズキ Tessa Morris Suzuki, *Showa : Inside History of Hirohito's Japan* (昭和：裕仁の日本の内側の歴史、New York : Schocken, 1985), p.21-29。
- 30** 「わが国はアジアの最先端にあり」：イアン・ブルマ Ian Burma, *The Wage of Guilt* (罪の報い、New York : Farrar Straus & Giroux, 1994), p.191-92。
- 30** 「お前はなぜこんなちっぽけな蛙のことで泣き出すのだ?」：同前 p.172。
- 30** 「日本社会には根深いアンビバレンスが存在していた」：1997 年 7 月 17 日付けのラナ・ミッター (Rana Mitter) からの著者宛ての手紙。
- 31** 勅語の言葉を言い間違えた何人もの教師が：Harries and Harries, *Soldiers of the Sun*, p.41。
- 31** 日本の小学校への訪問者は：入谷敏男, *Group Psychology of the Japanese in Wartime* (戦時の日本人の集団心理、London and New York : Kegan Paul International, 1991), p.177,191。〔入谷敏男『日本人の集団心理』新潮社、1986 年、188 ページ〕
- 31** 虐待：同前。
- 32** 「きさまが憎くて殴るんじゃない」：同前、p.189。〔『日本人の集団心理』、257 ページ〕
- 32** 日本の訓練の猛烈さは：106/5485、1928 年 2 月報告書、p.136、イギリス公共記録事務所内のイギリス戦争局資料、Kew London。OSS (米戦略情報局) の日本軍の訓練に関する報告書は、教化の過程を次のように要約している。「些細な規則違反や誤りにも即時の厳しい罰が課せられる。きびきびと行動しろ、大声を出せ、私語は慎め、にやにやするな、がんばれ、要求するな、家族を忘れろ、情緒的になるな、すべてを厳格に行え、自己満足するな、安逸、食欲、喉の渇きを訓練で抑え込め、黙って苦痛と困難に耐えろ、お前らは天の子だ」。
- 32** 「人生の多感な時期に」：106/5485,1928 年 2 月報告書、p.84、イギリス戦争局資料。
- 33** その年の八月、三万五千人の増援部隊が：デイヴィッド・バーガミニ

David Bergamini, *Japan's Imperial Conspiracy* (天皇の陰謀、New York:Morrow, 1971), p.11。〔いいだもも訳『天皇の陰謀－I 南京大虐殺と原子爆弾』、78 ページ、現代書林、1983 年〕

- 33 一九三〇年代、日本軍の指導者は：ジョン・トランド John Toland, *The Rising Sun : The Decline and Fall of the Japanese Empire* (日の出：大日本帝国の興亡、New York:Random House), p.47。杉山陸軍大臣は「中国を三ヶ月で叩きのめせば、彼らは平和を求めてくる」と予言した。

第二章 六週間の暴虐

- 37 「思想取締り、弾圧、拷問の専門家」：デイヴィッド・バーガミニ *Japan's Imperial Conspiracy* (New York:Morrow, 1971), p.16。〔いいだもも訳『天皇の陰謀－I 南京大虐殺と原子爆弾』、89 ページ、現代書林、1983 年〕
- 37 「獣的」：木村久遯典『個性派将軍中島今朝吾』光人社、1987 年、212 ページ。
- 37 「覆面将軍」：菅原裕『日本心覆面将軍柳川平助清談』、経済往来社、1971 年、9 ページ。
- 37 蘇州市の例を見てみよう：呉天威「南京大屠殺再研究」、雑誌『抗日戦争研究』、43 ページ、中国社会科学院、1994 年、第 4 期。中央档案馆、中国第二歴史档案馆。吉林省社会科学院編『南京大屠殺図片示例』、長春、吉林人民出版社、31 ページ、1995 年。ディック・ウィルソン Dick Wilson, *When Tigers Fight : The Story of the Sino-Japanese War, 1937-1945* (虎が闘うとき：日中戦争の物語、New York: Viking, 1982), p.69。
- 38 チャイナ・ウィークリー・レビュー誌によれば、この侵略行為により：*China Weekly Review* (1938 年 3 月)。
- 38 「放火破壊されていない建物はほとんど見当たらない」：マンチェスター・ガーディアン紙の記者ティンパリーがこの記事を書き、1938 年 1 月 4 日に、他の記事と一緒にロンドンに電送した。
- 38 日本軍が南京に照準を定めた一二月七日：この節の松井と朝香宮の交代については、デイヴィッド・バーガミニ, *Japan's Imperial Conspiracy*, 第一章 p.22 (『天皇の陰謀』、100 ページ参照)。
- 39 「宜しくない」：『木戸日記』、468 ページ、前掲書 p.23 で引用 (日本語

版 102 ページ)。

- 39 「支那軍民をして皇軍の威風に敬仰帰服せしめ」：中山寧人、極東国際軍事法廷での証言、議事録、21893 ページ (33081ff., 37238ff., 32686 [キャンベラ] も参照)、バーガミニ前掲書 p.23 (翻訳 102 ページ) で引用。
- 39 「皇軍が外国の首都に入城するは」：バーガミニ、前掲書で引用。東京裁判判決、47171-73 ページ (米国立公文書館) も参照。
- 40 この報告を聞いた後、朝香宮の指令部から：バーガミニ、*Japan's Imperial Conspiracy*, p.24 (日本語版 103 ページ)。脚注の田中隆吉に関する情報は「南京大屠殺凶片示例」35 ページより。(バーガミニの著書は註が貧弱なので、慎重に使用しなければならないが、引用部分は田中にインタビューしたことを思わせる)。
- 41 大隊戦闘詳報：吉林省社会科学院編「南京大屠殺凶片示例」62 ページで引用。この英訳テキストは、伊と咏 (ヨン)、*The Rape of Nanking*, p.115。
- 42 「千、五千、一万ノ群集トナレバ」：木村「南京の戦い：中島第十六師団長日記」(中央公論社、東京、1984 年 11 月 24 日)。中島の日記は日本の雑誌「歴史と人物」(1984 年 12 月) の付録で公開された。彼の日記のこの部分の英訳文は、伊と咏、*The Rape of Nanking*, p.106。
- 43 「壮観な眺めである」：東史郎、『わが南京プラトーン』(青木書店、東京、1987 年)、104 ページ。
- 44 五万七千人：東京裁判、評決。
- 45 「部隊 (ぶたい) の方が聊 (いさゝ) か呆 (あき) れ気味 (ぎみ) で」：本多勝一『南京大虐殺の研究』(東京、晩声社、1992 年) 129 ページで引用。〔訳註：1937 年 12 月 16 日、朝日新聞〕
- 46 三時間か四時間たつころ：栗原利一、毎日新聞、1984 年 8 月 7 日。
- 46 「焼かれたあとは黒こげの死体の山が残った」：本多勝一「南京への道」(朝日新聞社、1987 年)。伊と咏、*The Rape of Nanking*, p.86 で引用。
- 46 兵士たちが大量に投降した後：「民間人の殺害」の節については、南京大学歴史学部の高興祖 (ガオシンツー)、呉世民 (ウーシーミン)、胡雲工 (ホーヨンゴン)、査端珍 (ツァールイチェン)「日本帝国主義与南京大屠殺一関与南京大屠殺的中国機密档案的英訳文」、中国語から英語への翻訳はロバート・P. グレイ (pgray@pro.net) による。「新華文摘」南京大虐殺特集号、第一部、1996 年 3 月 21 日も参照。

- 46 城壁の外側に、川に沿って（川は文字通り血で赤く染まった）、池に湖に、そして丘陵の上に死体が積み重なった：高興祖「南京惨案」『日本侵華研究』（1990年11月）、70ページ。
- 47 虐殺行為は、南京にいた多数の日本人従軍記者たちに衝撃を与えた：日本のジャーナリストの南京大虐殺に関する記事の英文翻訳は、伊と咏、*The Rape of Nanking* の p.52-56 にある。
- 47 「一列にならべられた捕虜が、つぎつぎに」：同前。小俣行男『中国戦線従軍記者の証言 現代のドキュメント—侵掠』（現代史出版会、徳間書店、1982年）77-78ページ。
- 47 とみれば、碼頭一面は真つ黒く折り重なつた屍體の山だ：今井正剛「侵華日軍在中国的暴行」（中国軍事科学院、1986年）、143-144ページ。
今井正剛「南京城内の大量殺人」特集文藝春秋 1956年12月号、159ページ。
- 48 最初の列の処刑が終ると：小俣行男『中国戦線従軍記者の証言 現代のドキュメント—侵掠』（現代史出版会、徳間書店、1982年）、20ページ。
- 48 南京には一日おくれて入った：森山康平『証言記録三光作戦—南京大虐殺から満州国崩壊まで』（新人物往来社、1975年）、18ページで引用。
中国語版『南京大虐殺和三光政策：歴史的教訓』（四川教育出版社、1984年）、8ページ。
- 48 「私は関東の大震災の時、本所の緑町河岸でたくさんの人が折重なり死んでいるのを見たが」：楊奇橋「対田中正明九点質問的反駁」『百姓』（香港）、第86期で引用。〔佐々木元勝『野戦郵便旗』第一部～第五部、現代史出版会、1973年、222ページ〕
- 49 「しかし、女が一番の被害者だったな」：胡華玲「南京暴行中的中国婦女」『日本侵華研究』（1991年11月）、70ページで引用。〔森山康平、前掲『証言記録三光作戦—南京大虐殺から満州国崩壊まで』、20ページ〕
- 49 生き残った古参兵たちは、公式には軍中央は敵国の女性を強姦することを禁止していたと主張する：東史郎から著者への日付のない手紙、1996年。
- 49 兵士たちは強姦の被害者の陰毛で作られたお守りには：ジョージ・ヒックス George Hicks, *The Comfort Women: Japan's Brutal Regime of Enforced Prostitution in the Second World War*（従軍慰安婦：第二次世界大戦における日本の野蛮な体制下の強制売春、New York: Norton, 1994）、p.32。
- 49 「はじめ、私たちはピーカンカンというような俗語を使用しました」：In

the Name of the Emperor(天皇の名の下に、映画)での東史郎のインタビュー。
プロデューサーは湯美如、共同監督はクリスティーン・チョイ。

- 49 「そして、たいていやったあとで殺しちまう」：胡華玲「南京暴行中の中国婦女」『日本侵華研究』(1991年11月)、70ページで引用。[森山康平、前掲『証言記録三光作戦—南京大虐殺から満州国崩壊まで』、22ページ]
- 50 「多分、強姦しているときには」：東史郎から著者への日付のない手紙、1996年。
- 50 二〇人ほどの女性の強姦容疑で：「谷寿男的公開起訴状：一个参加南京大屠殺的領導者」『和平日報』、1946年12月31日。
- 50 「金を払うか、そうでなければ終わった後でどこか分からぬところで始末をつけてしまえ」：デイヴィッド・バーガミニ、*Japan's Imperial Conspiracy*、p.45 (『天皇の陰謀』、147ページ)。
- 50 「大元帥陛下万歳！」：デイヴィッド・バーガミニ、*Japan's Imperial Conspiracy*、p.39 (『天皇の陰謀』、134ページ)。
- 50 翌日、西側のニュースメディアは：Hallett Abend, *Japanese Curbing Nanking Excesses* (New York Times, 1937年12月18日)
- 51 「しかるに今自分は、夢にさえ考えなかったもっとも悲しむべき結果をもたらした」：岡田尚、東京裁判での証言、p.32738
- 51 「落胆せずにはいられない」：同前、p.3510-11
- 51 「あのように叱責したことはなかった」：ディック・ウィルソン、*When Tigers Fight*、p.83。
- 51 「現在の日本の軍隊は、おそらく世界でもっとも軍紀の乱れた軍隊だろう」：同前、p.83。
- 51 「不法な行動が続いているという噂がある」：バーガミニ、*Japan's Imperial Conspiracy*、p.43 (日本語版142ページ)。東京裁判、証拠番号2577、「議事録」(キャンベラ)、p.47187
- 52 「私の部下たちは大変悪い、きわめて遺憾なことをしてかした」：日高信六郎の証言、東京裁判、21448ページ
- 52 「慰霊祭の直後」：花山、186ページ。バーガミニ、*Japan's Imperial Conspiracy*、p.43 (日本語版137ページで引用)。
- 52 「中支那方面軍は」：吉見『世界に問われる日本の戦後処理1〈従軍慰安婦〉等国際公聴会の記録』(大阪、日本、東方出版、1993年)85ページ。

- 53 しかし、一九九一年に吉見義明は防衛庁（当時）防衛研究所図書館から：防衛庁の図書館での吉見の発見の英語の記事は、*Journal of Studies of Japanese Aggression Against China* (1992年2月)、p.62。発見は、1992年1月、当時の宮沢喜一首相が韓国ソウルを訪問した日の朝日新聞の朝刊一面に掲載された。
- 54 「ブラックホール」：セオドール・クック (Theodore Cook), 著者との電話インタビュー。
- 54 「今日まで」：“Some Notes, Comparisons, and Observations by Captain E. H. Watson, USN (Ret) (Former Naval Attaché) After an Absence of Fifteen Years from Japan,” 海軍作戦局、海軍情報部、一般通信、1929-42、フォルダー P9-2/EZF16#23、箱番 284、記録グループ 38、米国立公文書館。
- 54 アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトは著書『菊と刀』で：ルース・ベネディクト, *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture* (Boston: Houghton Mifflin, 1946)。日本語訳『菊と刀—日本文化の型』(講談社)。
- 56 「競争大接戦中の少尉たち」：バーガミニ, *Japan's Imperial Conspiracy*, p.21 (日本語版 97 ページ)。大阪毎日新聞、東京日日新聞も、*Japan Advertiser* 紙と同様、すべてこの殺人競争を報道した。
- 56 ある日、小野少尉が言った：ウィルソン, *When Tigers Fight*, p.80 で引用。
- 57 「新兵はみなこんなものだが」：同前。
- 57 「彼らの眼は殺気を帯びていた」：ハルコ・タヤ・クックおよびセオドール E. クック Haruko Taya Cook and Theodore E. Cook, *Japan at War: An Oral History* (New York: New Press, 1992)、p.40。〔訳註：富永正三『ある B・C 級戦犯の戦後史—ほんとうの戦争責任とはなにか』(水曜社、1977年8月15日)に同様の記述がある〕
- 58 「忠節は泰山よりも重く」：東史郎から著者への日付のない手紙、1996年。
- 59 私は、殺戮された何千の死体の山の間を歩いてトラックで移動していたことを思い出す：ジョアンナ・ピットマン Joanna Pitman, *Repentance* (後悔, *New Republic*, 1992年2月10日)、p.14 で引用。
- 59 「兵士たちが銃剣で乳児を突き刺し、生きたまま熱湯の鍋の中に放り込んだことを知っている人はほとんどいません」：同前。

第三章 南京の陥落

- 61 長い間称賛されてきた都市である：南京の文学芸術の遺産、古代史、および阿片戦争の条約については、英語版ブリタニカ百科事典第 24 巻 (1993) を参照。
- 61 そして、一九一一年に国民党の指導者孫文が：アメリカナ百科事典、第 29 巻 (1992 年)。
- 62 その絵には、明代に造られた武将と動物の複雑な石像：鼓楼の歴史については、Julius Eigner, *The Rise and Fall of Nanking*, *National Geographic* (1938 年 2 月) を参照。カラー写真入りの Eigner の記事は、大虐殺直前の南京の生活に関する素晴らしい描写を提供してくれる。
- 62 「虎踞龍蟠 (虎がうずくまり、龍がとぐろを巻く)」： *Encyclopedia of Asian History*, vol. 3 (1988)。
- 62 最初に侵略されたのは：南京の侵略については、Julius Eigner, *The Rise and Fall of Nanking*, *National Geographic* (1938 年 2 月)、p.189。Jonathan Spence, *The Search for Modern China* (New York: Norton, 1990), p.805、p.177-74 参照。
- 63 街路には古い南京の痕跡が残っていた：Julius Eigner, *The Rise and Fall of Nanking*, *National Geographic* (1938 年 2 月)。Anna Moffet Jarvis, *Letters from China, 1920-1949*, 箱番 103、記録グループ 8、ジャーヴィス・コレクション (Jarvis Collection)、エール大学神学大学院図書館。1995 年 7 月 29 日におこなった、南京大虐殺の生存者で以前人力車の車夫だった幡開明へのインタビュー。
- 63 彼は強調する：ジョン・ギレスピー・マギー師, *Nanking Yesterday and Today* (南京の昨日と今日)、南京放送局からの講演、1937 年 5 月 28 日、デヴィッド・マギー所蔵。
- 64 一九三七年の夏：著者の生存者へのインタビュー。
- 64 「空襲の避難訓練があったのかしら」：1937 年 10 月 25 日の張小松の友人への手紙、金陵書簡集、フォルダー 2738、箱番 136、シリーズ IV、記録グループ 11、UBCHEA、エール大学神学大学院図書館。手紙の内容が事実であることは、1997 年に著者が行った、現在マサチューセッツ州ウォルサムに住んでいる張小松への電話インタビューで確認した。
- 65 現在はサンフランシスコで東洋医学の開業医になっているフランク邢

(シン) は：1997年1月28日の、サンフランシスコでのフランク邢への著者のインタビュー。

- 65 私の祖父も、南京から疎開するときに、いま一步で永遠に離れ離れになるところだった：1996年5月25日、ニューヨーク市での私の母方の祖母張以白、母張盈盈、伯母張玲玲とのインタビュー。
- 67 中国兵の長い列が：11月の上海戦の時期の南京の描写は、J. J. ヒュー司令官の米国アジア艦隊最高司令部宛書信（便箋の先頭に「揚子江巡回、米国艦パネー」）参照。1937年11月8日付、1937年11月7日情報週報、海軍作戦最高司令部、海軍情報部、一般通信、192942、フォルダー A8-2/FS#2、箱番 194、項番 81、記録グループ 38、米国立公文書館。
- 67 二〇万以上の日本軍が：793.94/11378A、国務省一般記録、記録グループ 59、米国立公文書館。伊と咏, *The Rape of Nanking*, p.9.
- 67 どちらも実際には相手を信頼していなかった：孫宅巍（スンツァイウェイ）『1937 南京悲歌』（台北、先智出版社、1995年）、31-32 ページ。
- 68 「私が残るか、君が残るかだ」：同前 27-31 ページ。
- 68 記者たちの前で、彼は激しい演説をした：106/5353、1938年1月2日、公的記録事務所イギリス戦争局、キュー、ロンドン。孫宅巍『1937 南京悲歌』、33 ページ。
- 68 「朦朧としているか、あるいは葉が効いている」：Harries and Harries, *Soldiers of the Sun*, p.219.
- 68 「彼はひどく発汗し」：孫宅巍『1937 南京悲歌』、33 ページ。
- 69 まず、蔣はほとんどの政府職員に、南京の西にある三つの都市、つまり長沙、漢口、および重慶に移動するよう命令した：E. J. マーカート司令官の米国アジア艦隊最高司令部宛書信（便箋の先頭に「揚子江巡回、米国艦ルーゾン [旗艦]」）参照。1937年11月22日付、1937年11月21日情報週報、海軍作戦最高司令部、海軍情報部、一般通信、192942、フォルダー A8-2/FS#2、箱番 194、項番 81、記録グループ 38、米国立公文書館。
- 69 数日のうちに、荷物を満載した公用車と見られる自動車が街路を埋め尽くし：ミニョー・ヴォートリンの日記、1937-1940、1937年11月16日と19日、12月4日、p.71-72、p.94-95、エール大学神学大学院図書館。
- 69 そして、一二月の中旬に、去っていった政府職員と入れ替わって五万の中国軍が到着した：同前、1937年11月17日、p.72。

- 69 上流の港から到着した彼らは:J. J. ヒュー司令官の米国アジア艦隊最高司令部宛書信(便箋の先頭に「揚子江巡回、米国艦パネー」)参照。1937年11月29日付、1937年11月28日情報週報、海軍作戦最高司令部、海軍情報部、一般通信、192942、フォルダー A8-2/FS、箱番 194、項番 81、記録グループ 38、米国立公文書館。
- 69 一二月までに、九万の中国軍が南京地区に集結したと推定される:孫宅巍「南京大屠殺与南京人口」『南京社会科学』37、第3号、(1990)、79ページ。
- 69 軍隊は南京の姿を変貌させた:F. ティルマン・ダーディン, Japanese Atrocities Marked Fall of Nanking After Chinese Command Fred (中国軍司令官逃亡後、南京陥落時に日本が行った残虐行為、ニューヨーク・タイムズ、1937年12月22日)。21 U. S. Citizens Now in Nanking: Only Eight Heed Warning to Evacuate Besieged City (21人のアメリカ市民が今南京にいる。8人だけが、包囲下の都市から疎開せよという警告を考慮している)、シカゴ・デイリー・ニューズ、1937年12月7日。793.94/11466、国務省一般記録、マイクロフィルム、記録グループ 59、米国立公文書館。Harries and Harries, *Soldiers of the Sun*, p.219。
- 69 一二月の初めに、軍は:A. T. スティール, Nanking Ready for Last Stand; Defenders Fight Only for Honor: Suburban Areas Aflame; Chinese May Destroy in Defeat (南京の最後の抵抗。防衛者は名誉のためにだけ戦う。郊外は火に包まれた。中国人は敗北すれば都市を破壊するかもしれない)、シカゴ・デイリー・ニューズ、1937年12月9日、p.2。ダーディン, Japanese Atrocities Marked Fall of Nanking (南京陥落時に日本が行った残虐行為)、p.38。ミニ・ヴォートリン、1937-40年の日記、1937年12月7日、p.99、エール大学神学大学院図書館。
- 70 「憤怒と苛立ちのはげ口」:ダーディン, Japanese Atrocities Marked Fall of Nanking (南京陥落時に日本が行った残虐行為)、ニューヨーク・タイムズ、p.38。
- 70 一二月二日、故宮博物館の財宝…を梱包した幾百もの箱が:ミニ・ヴォートリン、1937-40年の日記、1937年12月2日、p.93、エール大学神学大学院図書館。
- 70 六日後の一二月八日、蒋介石:蔣の出発の詳細については、以下を参

照。レジナルド・スウィートランド Reginald Sweetland, *Chiang Flees to Escape Pressure of 'Red' Aides* (蔣、流血の事態を避け、逃亡する)、シカゴ・デイリー・ニュース、1937年12月8日。フランク・ティルマン・ダーディン、*Japanese Atrocities Marked Fall of Nanking After Chinese Command Fred* (中国軍司令官逃亡後、南京陥落時に日本が行った残虐行為)、ニューヨーク・タイムズ、1937年12月22日、p.38。793.94/12060、報告書番号9114、1937年12月11日(日本軍動向の日次記述)、制限報告、国務省一般記録、記録グループ59、米国立公文書館。

- 70** 上海の戦闘の間：日本と中国の空軍に関する統計資料については、孫宅巍『1937 南京悲歌』、18 ページ参照。また次の資料も参照。ジュリアン・ブルーム Julian Bloom, *Weapons of War, Catalyst for Change: The Development of Military Aviation in China, 1908-1941* (戦争の武器、変更への触媒：1908年から1941年までの中国における軍事航空の発展)〈博士学位論文、メリーランド大学 n.d.〉、サンディエゴ航空宇宙博物館、文書番号 28-246。リーネ・フランシロン Rene Francillon, *Japanese Aircraft of the Pacific War* (太平洋戦争期の日本の航空機、London, Putnam, 1970)。関川栄一郎, *Pictorial History of Japanese Military Aviation* (日本の軍事航空の歴史図解)、デイヴィッド・マンデイ編 (David Mondey, London, Ian Allan, 1974)。ロバート・マイケッシュとショウゾウ・アベ (Robert Mikesh and Shorzoe Abe)、1910年から1941年までの日本の航空機 (Annapolis: Naval Institute Press, 1990)。
- 71** 上海戦において、イタリア人に訓練された中国軍飛行士は：バーガミニ, *Japan's Imperial Conspiracy*, p.11 (日本語版 77 ページ)。
- 71** 一二月八日、蒋介石と彼の顧問たちが市を去ったその日に:A.T.スティーラー, *China's Air Force, Disrupted by Superior Planes of Foes, Leaves Nanking to Its Fate* (中国空軍、優勢な敵軍機に粉碎され、南京を運命に委ねる)、シカゴ・デイリー・ニュース、1937年12月8日。
- 71** 第二に、重慶に移動した政府職員は：南京大屠殺歴史編集委員会編 (中国第二歴史档案馆)「有関 1937年12月日軍南京大屠殺罪行的文件集」、第二巻、江蘇古籍出版社、1987年、46 ページ。
- 71** 第三に、兵士たちは同じ地域の出身ではなかったので：元南京中国軍の医療補助員だった魏虎への著者のインタビュー。1997年1月17日、カルフォルニア州サニーヴェールにて。

- 71 第四に、この軍隊の「兵士たち」の多くは：同前。
- 71 疲労し、飢え、さらに病に冒され：「有関 1937 年 12 月日軍南京大屠殺罪行的文件集」(1987)、46 ページ。
- 71 何よりも最悪だったのは：同前。
- 72 「無辜の民衆」と市の「古蹟、名勝」を護る最良の方法は：伊と咏, *The Rape of Nanking*, p.32 で引用。許志庚 (シユーツーグン)、『我們不要忘記：南京大屠殺 1937 年』北京、中国文学出版社、1995 年、43 ページ。
- 72 「我が軍は前線で寸土も譲らずに」：孫宅巍『1937 南京悲歌』、98-99 ページ。許志庚 (シユーツーグン)、『我們不要忘記：南京大屠殺 1937 年』、44 ページ。
- 72 しかし、非公式には、唐は休戦交渉を模索していた：国務省一般記録、793.94/11549、記録グループ 59、米国立公文書館。「ドイツ駐華大使館」ドイツ外交報告書の文書番号 203、国家歴史档案館、台北、中華民国。提案に対する蔣の拒絶は、唐と南京安全区国際委員会に衝撃を与えた。1938 年 1 月 24 日の手紙で、W. プラマー・ミルズが書いている。「唐將軍は、蔣總統に提案を受け入れさせることを保証していたので、翌日、彼がそうしないことを知らせる電報を漢口から受け取ったときには、我々は驚いた」。家庭所蔵、W. プラマー・ミルズの娘アンジー・ミルズ (Angie Mills) より。
- 73 一二月一〇日、日本軍は都市の降伏を待った：許志庚『我們不要忘記：南京大屠殺 1937 年』、44 ページ。バーガミニ, *Japan's Imperial Conspiracy*, p.29 (日本語版 115 ページ)。
- 73 一二月九日から一二月一日まで：唐生智の蒋介石宛の電報。「有関 1937 年 12 月日軍南京大屠殺罪行的文件集」(1987)、35 ページで再録。
- 73 一二月一日正午、唐の本部に顧祝同將軍からの電話が入った：孫宅巍『1937 南京悲歌』、122-23 ページ。
- 74 唐は命令を促す蔣の電報を受け取った：同前 123 ページ。
- 74 一二日午前三時：同前 124 ページ。
- 75 しかし、ぎよっとするような報告が唐に届けられた：伊と咏, *The Rape of Nanking*, p.38。
- 75 シュベアリンクは旗と伝言を日本軍に渡すことに同意したが：C. F. ジェフ司令官の米国アジア艦隊最高司令部宛書信 (便箋の先頭に「米国艦オフ」)、1938 年 2 月 14 日付、1938 年 2 月 13 日情報週報、海軍作戦局、海

軍情報部、一般通信、1929-42、フォルダー A8-21/FS#3、箱番 195、項番 81、記録グループ 38、米国立公文書館。この報告書には日本の報復を恐れて、新聞社に公表されなかった宣教師からの手紙（ジョージ・フィッチの日記、名前は伏せられている）の抜粋が引用されている。ジョージ・フィッチ、*My Eighty Years in China* (私の中国での 80 年間、Taipei, Mei Ya Publications)、p.102。

75 その日の午後、彼の幕僚たちが二度目の会合に集合するほんの数分前に：孫宅巍『1937 南京悲歌』、124-26 ページ。

76 予想通り、退却命令は：同前。

76 彼らの兵士たちは日本軍との戦闘を継続し：ディック・ウィルソン、*When Tigers Fight*、p.70。

76 そのような、全面的に悲劇的な状況下の退却の合間にも：ダーディン、*Japanese Atrocities Marked Fall of Nanking*。A. T. スティール、*Reporters Liken Slaughter of Panicky Nanking Chinese to Jackrabbit Drive in US*、シカゴ・デイリー・ニューズ、1938 年 2 月 4 日。F. ティルマン・ダーディン、*U. S. Naval Display Reported Likely Unless Japan Guarantees Our Rights ; Butchery Marked Capture of Nanking*、ニューヨーク・タイムズ、1937 年 12 月 18 日。著者の生存者へのインタビュー。

77 しかし、城門の前は：城門の前の密集状態、火事、死者、および川を渡ろうとする絶望的な試みの詳細については、次の資料を参照。A. T. スティール、*Panic of Chinese in Capture of Nanking, Scenes of Horror and Brutality Are Revealed* (南京陥落時の中国人のパニック、恐怖と残忍の光景)、シカゴ・デイリー・ニューズ、1938 年 2 月 3 日、p.2。アーサー・メンケン Arthur Menken、*Witness Tells Nanking Horrors as Chinese Flee* (目撃者は中国人の逃亡での恐怖を語る)、シカゴ・トリビューン、1937 年 12 月 17 日、p. 4。ダーディン、*Japanese Atrocities Marked Fall of Nanking*、p.38。フィッチ、*My Eighty Years in China*、p.102。ウィルソン、*When Tigers Fight*。高興祖、呉世民、胡雲工、査端珍「日本帝国主義与南京大屠殺」。著者の生存者へのインタビュー。

77 唐は埠頭へ向かう運転手付きの黒塗りの乗用車の窓から：唐の埠頭までの移動の詳細については、孫宅巍『1937 南京悲歌』、133-35 ページ参照。

78 恐れをなした船の乗組員は、押し寄せる群集を追い払おうと：カルフォ

ルニア州モンテレイ・パーク在住の生存者牛先明への著者のインタビュー。
中華人民共和国南京市の生存者へのインタビュー。

- 78** その夕刻に、中山路で火事が発生し：水門付近でどのように火災が発生したかについては、論争の対象になっている。A. T. スティールは、中国兵が交通部一百万ドルの事務所のビルと記念会館一に放火し、内部に貯蔵されていた弾薬をすべて破壊しようとしたと書いた (Panic of Chinese in Capture of Nanking, Scenes of Horror and Brutality Are Revealed)、シカゴ・デイリー・ニュース、1938年2月3日。別の人は、日本の誤射された砲弾が弾薬の付近で破裂して発火させたのではないかと推測している。二台の軍用車が水門のトンネルの下で焼け焦げて燃え上がったと考えている (ディック・ウィルソン)。
- 79** あの日ほど暗く悲しいことはなかった：孫宅巍、前掲書、133-35 ページ。

第四章 六週間の恐怖

- 81** 元の人口の約半分が：孫宅巍『南京大屠殺与南京人口』、75-80 ページ。
- 82** 砲火に巻き、爆撃に巻き：フランク・ティルマン・ダーディン、Japanese Atrocities Marked Fall of Nanking After Chinese Command Fled、ニューヨーク・タイムズ、1937年12月22日、p.38。ミニ・ヴォートリン、1937年40日の日記、1937年12月14日、p.110。
- 82** 後年の目撃者の証言によれば：許伝音、東京裁判における証言、連合国作戦占領本部の記録、東京裁判速記録、項番 319、記録グループ 331、2562 ページ、米国立公文書館。許は証言している。「入城した日本兵は非常に粗暴で野蛮でした。彼らは目にした人すべてに向けて発砲しました。逃げ出す者、通りにいた者、付近にいた者あるいはドアから覗いた者すべてが銃撃され即死でした」。幾つかの新聞記事、日記、そして手紙の内容が許の言葉と符合している。「近づいて来る日本兵に興奮し、恐怖して走り去る人は全員、射撃される危険に見舞われた」。F.ティルマン・ダーディンは書いている (ニューヨーク・タイムズ、1937年12月22日)。「舗道の上には、うつぶせに倒れている何人もの老人が、見られた。明らかに、日本兵の気まぐれにより、背後から撃たれたのである」。リーダーズ・ダイジェスト (1938年7月号) に掲載されたジョージ・フィッチの日記も

参照されたい。「走り去ることは即座に弾を撃ち込まれることだ」。彼は書いた。「多くがジャップのスポーツのような雰囲気の中で撃たれた。彼らは苦力、商人、そして学生たちの顔に明らかな恐怖の表情が表れたのを見て笑っていた。私は、悪魔たちのピクニックを連想した」。

- 83** 何千人もの不幸な市民たちとは異なり：著者の唐順山へのインタビュー。1995年12月25日。
- 87** 生き埋め：南京大屠殺史料委員会および南京図書館編「関与1937年12月日軍在南京進行的恐怖大屠殺の原始史料」南京江蘇古籍出版社、1985年7月、142ページ。
- 87** 切断：捕虜を木の板に釘付けにした事件については、林達「血泪金陵」宇宙風71（1938年7月号）、前掲書に再録、142-144ページ参照。林達は目撃者ではないが、唐という生存者にインタビューした。捕虜を木や電柱に礎にして、銃剣の練習台にした事件については、朱成山「侵華日軍南京大屠殺幸存者証言集」、（南京、南京大学出版社、1994年12月）、53ページ。「恐怖大屠殺の原始史料」（1985）、142-144ページ。日本人が被害者の肉片を切り取った事件については、「南京大屠殺罪行的文件集」（1987年）、66-77ページ参照。目をえぐり出し事件については、高興祖、呉世民、胡雲工、査端珍「日本帝国主義与南京大屠殺」参照。十字鉤による虐殺については、南京から逃れた兵士（氏名は不明）の記事「京的獸行目撃記」、漢口「大公報」、1938年2月7日、「恐怖大屠殺の原始史料」に再録、129ページ参照。
- 87** 火による死：許志庚「南京大屠殺」（南京、江蘇文芸出版社、1994年11月）、74ページ。高興祖、呉世民、胡雲工、査端珍「日本帝国主義与南京大屠殺」。「南京大屠殺罪行的文件集」（1987年）、68-77ページ。
- 88** 氷による死：高興祖、呉世民、胡雲工、査端珍「日本帝国主義与南京大屠殺」。
- 88** 犬による死：「南京大屠殺罪行的文件集」（1987年）、68-77ページ。
- 88** 日本人は犠牲者を酸に浸し：高興祖、呉世民、胡雲工、査端珍「日本帝国主義与南京大屠殺」。
- 88** 幼児を銃剣で突き刺し：許志庚「南京大屠殺」、138ページ。
- 88** 「人々を舌で吊り上げた」：査亭臣（チャーティンチェン）、Hell on Earth:

The Japanese Army in Nanking During 1937-1938: A Barbaric Crime Against Humanity (地上の地獄：1937-1938年の南京の日本軍、人道に対する野蛮な犯罪)、*Chinese American Forum* 1、no.1 (1984年5月)。

- 88 後に南京大虐殺を調査した日本の記者は：ウィルソン、*When Tigers Fight*、p.82。
- 88 生殖器さえも消費された：「京的獸行目撃記」128ページ (1937年12月日軍在南京進行的恐怖大屠殺的原始史料の草稿には、ヴァギナや肛門を串刺しにした話とともに、去勢の話が言及されていた)。
- 89 *Against Our Will: Men, Women and Rape* (意思に反して一男、女そして姦姦) という画期的な書物を書いたスーザン・ブラウンミラーは：著者のスーザン・ブラウンミラーへの電話インタビュー。
- 89 推定値は最小の二万人から：キャサリン・ローゼル Catherine Rosair, *For One Veteran, Emperor Visit Should Be Atonement*。フィッチ, *Nanking Outrages*、1938年1月10日、フィッチ・コレクション。李恩涵 (リーオンハン), *Questions of How Many Chinese Were Killed by the Japanese in the Great Nanking Massacre* (南京大虐殺で日本人によって何人の中国人が殺されたかという問題)、*Journal of Studies of Japanese Aggression Against China*、1990年8月、p.74。
- 89 そのような子どもたちのほとんどは、こっそりと殺された：サイラス・ピーク (Cyrus Peake) およびアーサー・ローゼンボーム (Arthur Rosenbaum) によるルイス・スマイスへの口述歴史インタビュー、クレアモント大学院、1970年12月11日、1971年2月26日および3月16日、箱番228、記録グループ8、エール大学神学大学院図書館。
- 90 「数えきれない」：「ドイツ駐華大使館」報告書番号21、p.114以降、ドイツ外交文書、国家歴史档案馆、台北、中華民国、農民の王耀山 (75歳)、梅友三 (70歳)、王運奎 (63歳) および夏明豊 (54歳) により、「1938年1月26日に、南京付近のセメント工場に滞在していたドイツ人とデンマーク人の紳士に提出された」。
- 90 日本人は南京のあらゆる階層の女性を強姦した：胡華玲「南京暴行中の中国婦女」。
- 90 あるものは文字通り一軒一軒の搜索を行い：ミニ・ヴォートリン、日記1937-40、1938年3月8日、p.212。
- 90 このため市内の若い女性たちは、恐ろしいジレンマに陥った：同前、

- 1937年12月24日、p.127。
- 90 た例えば、日本軍は市場で女性に米と小麦を鶏と家鴨に交換するという話をでっちあげた：徐淑希，*Documents of the Nanking Safety Zone no.266*（上海、香港、シンガポール：Kelly & Walsh, 1939年）、p.128
- 90 兵士たちの一部は中国人の裏切り者を雇って：高興祖、呉世民、胡雲工、査端珍「日本帝国主義与南京大屠殺」。
- 90 強姦事件の三分の一は日中に発生したと推定されている：フィッチ，*Nanking Outrages*（南京の暴行）、1938年1月10日、フィッチ・コレクション。
- 90 生存者は、明るい日差しの中で：著者の生存者侯占清とのインタビュー、南京、1995年1月29日。
- 90 神聖な場所だからといって：フィッチ，*Nanking Outrages*、1938年1月10日、フィッチ・コレクション。
- 91 毎日、一日二四時間：「大公報」の一節を高興祖、呉世民、胡雲工、査端珍「日本帝国主義与南京大屠殺」に再録。
- 91 「口でペニスを洗う」：徐淑希，*Documents of the Nanking Safety Zone no.436*、p.154。
- 91 「彼女に棒を突き刺した」：ディック・ウィルソン、p.76。徐、p.123。
- 91 八〇歳代の多数の女性が：胡華玲「南京暴行中の中国婦女」，*All Military Aggression in China Including Atrocities Against Civilians and Others : Summary of Evidence and Note of Argument*（民間人などに対する虐殺を含む、中国における軍隊の攻撃のすべて：証拠の要約と議論の注解）、デイヴィッド・ネルソンサットン（David Nelson Sutton）により極東国際軍事法廷に提出された、1946年11月4日、p.41、米国立公文書館。
- 91 若い少女たちは乱暴に強姦され：徐淑希，*Documents of the Nanking Safety Zone no.428*、p.152。
- 91 中国人の目撃者は、日本人が一〇歳に満たない少女を：侯占清のインタビュー。
- 91 ある事例では、日本人は強姦を効果的に行うために：「ドイツ駐華大使館」報告書番号21、p.114以降、ドイツ外交文書、国家歴史档案館、中華民国。別の記事は次のように記している。「これらの幼女の肉体は十分に發育していなかったため、日本人の獸欲を十分に満たせきなかった。それでも、彼らは少女たちの外陰部を裂き開いて、強姦を続けた」。杜成祥、

「関于日軍暴行報告」(時代出版、1939年)、55ページ、高興祖、呉世民、胡雲工、査端珍、「日本帝国主義与南京大屠殺」に再録。

- 91 妊娠後期の女性でも：胡華玲「南京暴行中の中国婦女」。ロバート・ウィルソン、家族への手紙、1937年12月30日、フォルダー3875、箱番229、記録グループ11、エール大学神学大学院図書館。
- 91 九ヶ月の身重だった一人の被害者は：東京裁判判決書、451ページ、米国立公文書館。
- 91 少なくとも一人の身重の女性が、蹴られて：楚勇生と常馳祥「包括的平民和他人施以暴行的所有在中国的軍事侵略：証拠概要和弁論記録」、37ページ。
- 91 輪姦の後、ときに日本兵たちは：「血債：一個目撃関于日本侵略者在南京所施暴行的報告」、漢口「大公報」、1938年2月7日。「新華日報」、1951年2月24日。胡華玲「南京暴行中の中国婦女」。著者の唐順山へのインタビュー、中華人民共和国、南京、1995年1月26日。高興祖、呉世民、胡雲工、査端珍「日本帝国主義与南京大屠殺」。
- 91 その種の虐殺の最も有名な物語は：夏家の物語は、1937年12月13日以後の南京で撮影された写真を説明する記録の中で語られている、アーネストおよびクラリッサ・フォースター・コレクション (Ernest and Clarissa Forster Collection)、箱番263、記録グループ8、その他の個人的な文献、エール大学神学大学院図書館。
- 92 彼女は酸素の欠乏により、一生涯続く脳の損傷を受けた：夏淑琴(当時八歳だった生存者)への著者のインタビュー、南京、1995年1月27日。
- 93 「私がそこに行ったとき」：許伝音(目撃者)、東京裁判における証言、連合国作戦占領本部の記録、東京裁判速記録、項番319、記録グループ331、2572ページ、米国立公文書館。
- 93 おぞましさでは劣ることのない同じような物語：1937年12月13日以後の南京で撮影された写真を説明するジョン・マギーの映像番号7に関する記録、アーネストおよびクラリッサ・フォースター・コレクション (Ernest and Clarissa Forster Collection)、箱番263、記録グループ8、その他の個人的な文献、エール大学神学大学院図書館。
- 93 裸にされ、椅子やベッドや柱に鎖でつながれていた、ほかの多数の少女たちは：バーガミニ, *Japan's Imperial Conspiracy*, p.27 (日本語版 129 ペー

ジ)。本書の写真ページの、そのような犠牲者の一人の写真を参照された
い。写真の少女が気を失っているのか死んでいるのかは明らかでない。

- 93 「目撃者の報告によれば」：高興祖、呉世民、胡雲工、査端珍「日本帝國主義与南京大屠殺」。
- 94 大規模な強姦のときに、日本人は、目の前にいたという理由で子どもや幼児たちを殺した：嬰兒を窒息死させた事件の説明については、ジョージ・フィッチの1937年12月17日の日記を参照。これは、次の文献で引用されている。C. F. ジェフ司令官の米国アジア艦隊最高司令部宛書信（便箋の先頭に「米国艦オアフ」）、1938年2月13日情報週報、海軍作戦局、海軍情報部、一般通信、192942、フォルダー A8-21/FS#3、箱番 195、項番 81、記録グループ 38、米国立公文書館。
- 94 「四一五——二月三日午後五時ごろ」：徐淑希，*Documents of the Nanking Safety Zone*。重慶の外交部委員会の後援で作成された（上海、香港、シンガポール、Kelly & Walsh, Ltd., 1939）、p.159。
- 94 「彼の鼻に針金を通し」：東京裁判での王盼子（東京裁判当時 24 歳、南京大屠殺当時 15 歳）の証言。極東国際軍事法廷の記録、法定証拠、1948 年、第二次世界大戦戦争犯罪記録集、箱番 134、項番 14、記録グループ 238、米国立公文書館。
- 94 多分、日本人の娯楽の最も残忍な形式の一つは：「ときに、兵士たちは銃剣によって女性の胸を切り取り、内側の青白い肋骨を露出させた。ときには、銃剣を女性の陰部に突き刺し、彼女らが路上で激しく泣き叫ぶのを放置した。ときに日本人は木の棍棒、固い葦の枝、あるいはカブまでも持ち出して女性のヴァギナに突き刺し、激しく殴打して乱暴に死に至らしめた。他の兵士たちは周りに立っていて、その光景に拍手喝采し、心底から笑っていた」。国民党軍事委員会政治部「日本侵略軍所施暴行的真実記録」、1938 年 7 月編纂、より引用。高興祖、呉世民、胡雲工、査端珍「日本帝國主義与南京大屠殺」。「南京大屠殺罪行的文件集」に再録。東京裁判での王盼子の証言。胡華玲「南京暴行中的中国婦女」。
- 94 たとえば、ある日本兵は：フォスターの妻への手紙。1938 年 1 月 24 日、アーネストおよびクラリッサ・フォスター・コレクション。
- 94-95 一二月二二日には、通済門に近い：朱成山「侵華日軍南京大屠殺幸存者証言集」、50 ページ。

- 95 しばしば、中国人の男性は男色の対象にされ：徐淑希, *Documents of the Nanking Safety Zone* no.420)、p.153 参照。ディック・ウィルソン、p.76。
- 95 少なくとも一人の中国人の男性が：「失守後の南京」、「明証と公輿 20」(1938 年 1 月)。この記事は、南京から逃れ武漢に到着した人々への 1938 年 1 月 18 日付のインタビューに基づいている。「恐怖大屠殺的原始史料」(1985) に再録、150 ページ。
- 95 ある中国人の女性が男に変装して：許志庚「南京大屠殺」、115 ページ。孫宅巍『1937 南京悲歌』、353 ページ。
- 95 中国軍の大隊の指揮官だった郭岐 (クウオチー) は：郭岐「陥都血泪録」。1938 年の前半に書かれ、1938 年 8 月に、西安の新聞「西京平報」(西京は西安の旧名) 掲載された。「恐怖大屠殺的原始史料」(1985) に再録、13 ページ。
- 95 彼の報告はドイツの外交官の証言と符合し実証される：「ドイツ駐華大使館」報告書番号 21、p.114 以降、ドイツ外交報告書、国家歴史档案馆、中華民国。
- 95 ある家族が揚子江を渡っていたときに：許伝音 (目撃者)、東京裁判における証言、連合国作戦占領本部の記録、東京裁判速記録、項番 319、記録グループ 331、2573 ページ、米国立公文書館。生存者の一人李克和は、四人の日本兵が 40 歳の女性を強姦した後に、彼女の義父と息子に彼女と性交するよう強制したと証言した。胡華玲「南京暴行中の中国婦女」68 ページ参照。東京裁判の記録でも、実の娘たちとの性交を強いられた父親、姉妹に対する兄弟、息子の嫁に対する老人の事例が言及されている。「胸を裂かれ、女性は乳房を突き刺され、あごを殴られ歯が砕けていた。その恐ろしい光景は見るに耐えないものだった」と記録は付け加えている。法廷証拠、1948 年、箱番 134、項番 14、記録グループ 238、1706 ページ、第二次世界大戦戦争犯罪記録集、米国立公文書館。
- 96 多くの女性が、何ヶ月間も日本人に見つからずに隠れていることができた：ミニー・ヴォートリン、1937-40 年の日記、1938 年 1 月 23 日および 2 月 24 日、p.167、p.201。
- 96 周辺の農村では、女性たちは地下の隠された穴の中に身を潜めた：前掲書、1938 年 2 月 23 日、p.200。
- 96 ある尼僧と幼い少女は：ジョン・マギーから「ビリー (Billy)」への手紙

(ジョンの署名)、1938年1月11日、アーネストおよびクラリッサ・フォスター・コレクション。

- 96 あるものは変装した。顔に煤を摺り込み：バーガミニ、*Japan's Imperial Conspiracy*, p.37 (日本語版 130 ページ)。ミニエ・ヴォートリン、1937-40年の日記、1937年12月17日、p.115。
- 96 一人の賢い少女は、杖をついてよろけ、六歳の少年を背負い、老婦を装ったまま：ミニエ・ヴォートリン、1937-40年の日記、1938年1月23日、p.168。
- 96 あるいは、日本兵に自分は四日前に死産したばかりだと言った女性のように：徐淑希、*Documents of the Nanking Safety Zone* no.408、p.158。
- 96 別の女性は中国人の捕虜の助言を聞いて：フォスターから妻への日付のない手紙、アーネストおよびクラリッサ・フォスター・コレクション。
- 96 一人の少女は、家の三階から中国人の男性が支えてくれた竹竿で滑り降りて：ジョン・マギーの妻への手紙、1938年1月1日、デイヴィッド・マギー所蔵。
- 96 日本兵に抗った女性は：高興祖、呉世民、胡雲工、查端珍「日本帝国主義与南京大屠殺」。
- 96 ある学校教師は、射殺されるまでの間に五人の日本兵を銃で倒した：胡華玲「南京暴行中的中国婦女」68 ページ。
- 97 一九三七年当時、一八歳の李秀英は軍技術者の新妻だった：李秀英、著者とインタビュー、南京、1995年1月27日。
- 100 「その質問は大変大きなもので」：東京裁判でのマオナー・シール・ベイツの証言、2629-30 ページ。
- 100 中国の軍事専門家劉方楚：李恩涵，*Questions of How Many Chinese Were Killed by the Japanese in the Great Nanking Massacre* (南京大屠殺で日本人によって何人の中国人が殺されたかという問題)、*Journal of Studies of Japanese Aggression Against China*、1990年8月。
- 100 侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館の職員：著者の博物館職員へのインタビュー。30万人という死者数は、博物館の入り口にはっきりと刻み込まれている。日本の文筆家本多勝一は、数十年後に彼自身で事件の物語を検証するために、南京に行った。彼は、南京陥落後の二日目に20万人の中国人が殺され、二月までに死者数は30万人にのぼったと考えた(ウイ

ルソン、When Tigers Fight、p.81-82)。中国の歴史家李恩涵は、「三十万人の……死者数の推定値は、絶対的に信頼できる」と言った。胡華玲、Commemorating the 53rd Anniversary of the Great Nanking Massacre : Refuting Shintaro Ishihara's Absurdity and Lie (南京大虐殺五十三周年を記念する：石原慎太郎の荒唐無稽な嘘に反駁する)、*Journal of Studies of Japanese Aggression Against China*、1990年11月、p.27。

100 東京裁判の判決書は、南京で二六万人以上の人々が殺されたと結論づけた：「表：日本の南京大虐殺の推定犠牲者数」文書番号 1702、箱番 134、極東国際軍事裁判記録、法廷証拠、1948年、第二次世界大戦、戦争犯罪資料集、項番 14、記録グループ 238、米国立公文書館。

100 日本の歴史学者藤原彰：胡華玲「紀念南京大屠殺 53 周年」、72 ページ。

100 ジョン・ラーベは系統的な死者数の計数を行わなかったし：アドルフ・ヒトラーへの上申書、エール大学神学大学院図書館。ラーベは書いた「中国の報告書によれば、合計で十万人の中国の民間人が殺されたということです。しかし、この評価は多すぎるようです。私たちヨーロッパ人は、五万人から六万人の間ではないかと推定しています」。〔訳注：ジョン・ラーベ著、エルヴィン・ヴィツケルト編、平野卿子訳『南京の真実』、講談社文庫、2000年、362ページに該当箇所がある〕

100 日本の文筆家秦郁彦は：クックおよびクック、*Japan at War*、p.39。

100 日本には他に：同前。

100 一九九四年に……書証が発見された：UP 通信インターナショナル、1994年5月10日。

100 おそらく、江蘇省社会科学院研究員の孫宅巍孫ほど純粋な統計研究を：孫宅巍「南京大屠殺与南京人口」、75-80 ページ。「关于南京大屠殺屍体处理地研究」、*南京社会科学* 44、第四号 (1991年)、72-78 ページ。

100 南京自治委員会：この種の傀儡政府を設立するのは、日本人の中国の占領地区での長年の習慣で、これにより日本人は地域の権力機構を保持し、地域のエリートの一部を彼らの側に取り込むことができた。

101 しかしこの統計値は……さらに膨れ上がる：「南京大屠殺罪行的文件集」(1987年)、101-103 ページ。150,000 Bodies Dumped in River in Nanking Massacre Affidavit (南京大虐殺で十五万人分の死体が川に投棄されたという供述書)、ロイター、1990年12月14日。

- 102** たとえば、南イリノイ大学の呉天威名誉歴史学教授は：呉天威, Let the Whole World Know the Nanjing Massacre : A Review of Three Recent Pictorial Books on the Massacre and Its Studies (全世界に南京大虐殺を知らしめよう：最近の虐殺に関する三冊の写真集とその研究の書評)。報告書は1997年に、日本の中国侵略の研究協会 (Society for Studies of Japan Aggression Against China) によって配布された。
- 103** 文筆家のジェームス伊と史咏 (シーヨン) の両氏も：史咏への著者の電話インタビュー。
- 103** 他の専門家の議論を、彼らは否定する：岸に打ち上げられて最終的に埋葬された死体が幾つあったのかを語ることは難しい。ミニー・ヴォートリンは1938年4月11日の日記に、ある人が彼女に「揚子江の両岸には、まだ多数の死体があり、多くの膨張した死体が下流に漂流している。兵士や民間人だ。と報告されたと話した。私は、数十から数百の数かと彼に聞いたが、彼は数千の単位のように言った」。1937-1940年の日記、p.247。
- 104** 数日前に上海に戻ってから：“Red Machine (Red 暗号解読機)”，日本の外交電文、第1263番、翻訳日1938年2月1日、記録グループ457、米国立公文書館。この報告書は、元々はマンチェスター・ガーディアン紙の特派員 H. J. ティンパレイが書いたもので、上海で日本の検閲にかかり発信を禁止された (“Red Machine” 日本の外交電文、第1257番参照)。彼の30万人という推定値は、後に日本の外務大臣廣田弘毅がワシントン D. C. に送った電文に含まれている。この電文が重要なのは、日本政府が30万人という数字について知っていただけでなく、そのときに、この情報を隠蔽しようとしたことを示す点である。

第五章 南京安全区

- 106** 一九三七年の一月、フランスの宣教師ジャキノ・ド・ベサジュ神父は：呉天威, Let the Whole World Know the Nanking Massacre, p.16。
- 106** 長老派教会の牧師 M. プラマー・ミルが：アンジー・ミルズから著者への1997年2月16日付けの手紙。彼女の家族の記録の中から、ミルズはジョン・ラーベが1938年2月28日に、上海の外国 YMCA で西欧人のグループの前で行った演説の原稿のコピーを発見した。その中で、彼は言っ

ている。「私は、ミルズ氏が最初に安全区を設立することを考えたということを行わなければなりません。私は、私たちの組織の中核は、平塘郷三号(アンジー・ミルズによれば、南京大学の近くのロッシング・バックの家の住所で、この時期、9人から10人のアメリカ人が住んでいたと言う)にあったと言えます。私のアメリカ人の友人たち、ミルズ氏、ベイツ氏、スマイス博士、フィッチ氏、ソウン氏、マギー氏、フォスター氏、そしてリグ氏の聡明さのおかげで、委員会を立ち上げることができ、彼らの献身的な努力のおかげで、あの恐ろしい時期に、委員会を予想以上に順調に運営していくことができたのです」。

107 興味深いことに、後にパネー号は日本軍の飛行機に爆撃され：“Sinking of the U. S. S. Panay (米国艦パネー号の沈没)” Some Phase of the Sino-Japanese Conflict (July-December 1937) (中日の衝突の一段階、1937年7月から12月まで)の11章、W. A. アングウィン大佐(MC)の記録、米海軍、1938年12月、上海、米国アジア艦隊最高司令部、海軍情報部、一般通信、1929-1942年、フォルダー P9-2/EF16#23、箱番 284、項番 81、記録グループ 38、米国立公文書館から編集。“The Panay Incident (パネー号事件)”、海軍作戦本部の記録、海軍作戦本部代理司令官の記録、1882-1954、情報部、海軍武官の報告書、1886-1839、箱番 438、項番 98、記録グループ 38、米国立公文書館。“The Bombing of the U. S. S. Panay (米国艦パネー号の爆撃)” ノーマン・アレイ(Norman Alley)氏への取材の後に、E. ラーソン(E. Larson)氏を書いた、1937年12月31日、箱番 438、項番 98、記録グループ 38、米国立公文書館。ウェルドン・ジェイムズ(Weldon James)、“Terror Hours on Panay Told by Passenger (乗客が語るパネー号の恐怖の時間)”, シカゴ・デイリー・ニューズ、1937年12月13日。A. T. スティール, Chinese War Horror Pictured by Reporter: Panay Victims Under Japanese Fire for Full Half Hour; Butchery and Looting Reign in Nanking (記者が撮影した中国の戦争の恐怖: 一時間も続いた日本軍の攻撃にさらされたパネー号の被害者、南京における屠殺と略奪の統治)、シカゴ・デイリー・ニューズ、1937年12月17日。バーガミニ, p.24-28 (日本語版、107-112 ページ)。

108 「私たちは裕福ではありませんでした」: マジョーリー・ウィルソン、著者との電話インタビュー。

108 「彼らは私たちを殺すのだろうか」: アリス・ティスデイル・ホバート

Alice Tisdale Hobart, *Within the Walls of Nanking* (南京城内で、New York:Macmillan, 1928)、p.207-8。

- 108** 「私たちは逃亡する中国人のほうの乱暴を警戒していた」：「ドイツ駐華大使館」ドイツ外交報告書の報告書、1938年1月15日、p.214から。国家歴史档案馆、台北、中華民国。
- 109** 船長の息子として：ジョン・ラーベの若年の時期の情報は、ラーベの孫娘ウルスラ・ラインハルトと著者との文通、およびドイツ、ベルリンのゲーメンス社の記録から得た。
- 109** 「私は我々の政治制度の正しさを信じているだけでなく」：ラーベの南京大虐殺の説明は“Enemy Planes over Nanking (南京を覆う敵機)”と題されたヒトラーへの報告書(上申書)に書かれているのを見ることができる。この報告書の複写は、エール大学神学大学院図書館、侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館、そしてドイツ連邦共和国の公文書館(the Bundesarchiv of the Federal Republic of Germany)が所蔵している。この節での情報と引用は、特に断りのない場合には、この報告書からのものである。
- 112** 南京市長は：国際安全区のジョン・ラーベから大日本帝国大使館宛ての手紙、1937年12月27日、“Conditions in Nanking (南京の状態)”と題された報告書が同封されている、1938年1月25日、情報部、海軍武官報告書、1886-1939、海軍作戦代理長官事務所の記録、1882-1954、海軍情報局事務所、箱番996、項番98、記録グループ38、米国立公文書館。
- 113** 片目を失った：フィッチ、*My Eighty Years in China*、p.101。
- 113** 食料全体の中の一部だけ：徐、p.56。
- 116** 漢中路：徐、p.2。
- 116** 「民間人と混ぜておくことにした」：ジョン・ラーベから福田篤泰への手紙、1937年12月15日、箱番996、項番98、記録グループ38、米国立公文書館。
- 116** 「彼らの多くが元兵士だったことは知っていたが」：ジョージ・フィッチ、1937年12月14日の日記、*My Eighty Years in China*、p.106に再録。元のコピーの一つは次にある：C. F. ジェフ司令官の米国アジア艦隊最高司令部宛書信(便箋の先頭に「米国艦オアフ」)、1938年2月14日付、1938年2月13日情報週報、海軍作戦局、海軍情報部、一般通信、192942、フォルダーA8-21/FS#3、箱番195、項番81、記録グループ38、米国立公文書館。

日記の中でフィッチは書いている。「群集からは一言の不満も聞こえなかった。間抜けだった……彼らに、日本人が生命を救うなどと説得したなんて、なんと愚かだったのだろう！」

- 118** 市内に、現在、残っている二七人の西欧人と、中国人の居住民のすべてが：ジョン・ラーベから大日本帝国大使館宛ての手紙、1937年12月17日、封書簡番号8“Conditions in Nanking (南京の状態)”と題された報告書、1938年1月25日、箱番996、項番98、記録グループ38、米国立公文書館。この手紙は、次の資料にも収録されている。徐淑希編, *Documents of the Nanking Safety Zone: Prepared under the Auspices of the Council of International Affairs, Chungking* (南京安全区の記録：重慶外交部の後援を受けて製作された、上海、香港、シンガポール：Kelly & Walsh, 1939年)。
- 118** 安全区内にも入口にも、日本のパトロール兵は一人もいません：ラーベから大日本帝国大使館宛ての手紙、1937年12月17日。徐淑希編, *Documents of the Nanking Safety Zone*, p.12。
- 118** 昨日、白昼の下：ラーベから大日本帝国大使館宛ての手紙、1937年12月17日。徐淑希編, *Documents of the Nanking Safety Zone*, p.20。
- 118** このような暴虐が続けられるのならば：ラーベから大日本帝国大使館宛ての手紙、1937年12月17日。徐淑希編, *Documents of the Nanking Safety Zone*, p.17。
- 118** 荒れ狂う大虐殺の中で、ある大使館員は：東京裁判判決書、米国立公文書館。“Verdict of the International/Military Tribunal for Far East on the Rape of Nanking (南京大虐殺に関する国際極東軍事裁判の評決)” *Journal of Studies of Japanese Aggression Against China*, 1990年11月、p.75参照。
- 118** 「新聞記者に不利なことを話せば」：福井氏のラーベへの警告、ジョン・ラーベの日記、1938年2月10日、p.723。
- 119** あるときには、獲物を捨てて逃走する日本兵を追いかけ回し：ロバート・ウィルソンの家族宛ての手紙、1938年1月31日、p.61。
- 120** 彼らは問題を真剣に考えようとしなかった：日本の大使館員ですら、日本兵の乱暴を密かに楽しんでいるようだった。許伝音が浴室で女性を強姦している日本兵を捕らえ、日本大使館の副領事である福田にその状況を伝えたとき、彼は福田の「うす笑いしている顔」を見た。国際極東軍事裁判の速記録、許伝音、証言、RG 311、項番 319、2570-2571 ページ。連合

作戦・占領本部の記録、米国立公文書館、ワシントン D. C.

- 120** 「彼らの誰かが反論すると、(ラーベは)彼のナチ党の腕章を突き出し」:
ジョージ・フィッチの日記のコピー、海軍武官補 E. G. ハーゲン (E. G. Hagen) から海軍作戦局長官 (海軍情報局長官) 宛ての資料に同封されていた。海軍部、ワシントン D. C.、1938 年 3 月 7 日、海軍作戦局長官事務所、海軍情報部、一般通信、192942、フォルダー P9-2/EF16#8、箱番 277、項番 81、記録グループ 38、米国立公文書館。
- 121** たとえば、強姦と略奪の最中の日本兵たちが: “Cases of Disorder by Japanese Soldiers in Safety Zone (安全区内での日本兵の無秩序の事例)” 1938 年 1 月 4 日収録、徐淑希, *Documents of the Nanking Safety Zone*, p.65。
- 121** 「ドイツ関係に発砲するのは割に合わないことだ」: “Cases of Disorder by Japanese Soldiers in Safety Zone” 封筒番号 1-C に副封、海軍武官の報告書、1886-1939、海軍作戦代理局長の記録、1882-1954、海軍情報局、フォルダー H-8-B 登録番号 1727A、箱番 996、項番 98、記録グループ 38、米国立公文書館。
- 121** ある日、ラーベが安全区を訪れると: ミニー・ヴォートリン、1937-40 年の日記、1938 年 2 月 17 日、p.198。
- 121** 「ナチのバッジを身につけようかとさえ」: フィッチ, *Nanking Outrages*, 1938 年 1 月 10 日、フィッチ・コレクション。
- 121** 「彼はナチの社会では突出している」: ロバート・ウィルソン、家族への手紙、1937 年のクリスマス・イブ、p.6。
- 122** 一九〇四年に生まれた: ロバート・ウィルソンの若年の時期の情報は、マジョーリー・ウィルソン (彼の未亡人) への著者の電話インタビューから得た。
- 122** 最初の二年間は: 同前。
- 122** 七月の盧溝橋事件の後: ロバート・ウィルソン、家族への手紙、1937 年 8 月 18 日。
- 123** 「彼はそのことを義務だと思っていました」: マジョーリー・ウィルソン、電話インタビュー。
- 123** 孤独を紛らわすために: ロバート・ウィルソン、家族への手紙、1937 年 9 月 12 日、p.15。
- 123** ほとんどの手紙には……身の毛もよだつ描写が: 同前、1937 年 8 月 20

日、p.9。

- 123** 「立派な博物館」：同前、1937年12月9日、p.35。
- 123** 九月二五日に、南京が経験した最悪の空爆のひとつ：同前、1937年9月25日と27日。ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1937年9月26日、p.33。
- 124** 黒い厚手のカーテンで閉ざれた：ロバート・ウィルソン、家族への手紙、1937年8月23日。
- 124** およそ一〇万人の中国軍負傷兵がいた：揚子江巡回隊司令官 E.J. マーカート (E.J. Marquart) の米国アジア艦隊最高司令部宛書信 (便箋の先頭に「揚子江巡回、米国艦ルーゾン (旗艦)」)、1937年10月24日付、1937年10月25日、海軍作戦最高司令部、海軍情報部、一般通信、192942、フォルダー A8-2/FS、箱番 194、項番 81、記録グループ 38、米国立公文書館。ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1937年10月26日と11月8日、p.55、p.64 (彼女は約10万人の兵士が上海地区で殺傷されたと書いている)。
- 124** 回復したものは前線に戻った：同前。
- 124** 中国人の医師と看護婦は：ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1937年12月5日、p.96。アーネスト・フォスターとクラリッサ・フォスター (Ernest and Clarissa Forster)、父母への手紙、1937年12月7日、アーネストおよびクラリッサ・フォスター・コレクション。
- 124** しかし、結局のところ、ウィルソンには彼らに残ることを決心させることはできなかった：ロバート O. ウィルソン (証人)、証言、連合国外戦・占領本部の記録、東京裁判速記録、項番 319、記録グループ 331、2531-32 ページ、米国立公文書館。
- 124** 一二月の最初の週末には：E. H. フォスター夫人 (Mrs. E. H. Forster) の報告書、1937年12月12日、アーネストおよびクラリッサ・フォスター・コレクションの回報より。
- 124** 「プレイディーが南京を去ったときに」：ロバート・ウィルソン、家族への手紙、1937年12月2日。A. T. スティール, Tells Heroism of Yankees in Nanking (南京のアメリカ人の英雄主義を語る)、シカゴ・デイリー・ニューズ、1937年12月18日。
- 125** ものすごいことだ：ロバート・ウィルソン、家族への手紙、1937年12月7日。

- 125 「当然、ひどく震えている」：同前、1937年12月14日。
- 125 ウィルソンは市の至る所に日本の旗がはためいているのを見た：同前。
- 125 彼らは、……の主な病院に乱入し：ダーディン, Japanese Atrocities Marked Fall of Nanking。ラーベ, Enemy Planes over Nanking (ヒトラーへの上申書)。1937年12月9日から15日までの間に南京でおきた事件について、ロイターのスミス氏の口述の説明の抜粋、文書番号178、漢口、1938年1月1日、「ドイツ駐華大使館」ドイツ外交報告書、国家歴史档案馆、中華民国。
- 125 「すばやいケリ」：ロバート・ウィルソン、家族への手紙、1937年12月18日。
- 125 また、彼は兵士たちが通りで楽器を積み上げて火をつけているのを見て：同前、1937年12月28日。
- 126 「圧巻だったのは」：前掲、1937年12月19日。
- 126 一二月一五日 民間人の殺戮は凄まじい限りだ：同前、1937年12月15日。
- 126 一二月一八日 今日、ダンテ地獄篇の現代版の六日目だ：同前、1937年12月18日。
- 126 一二月一九日 貧しい人たちからすべての食料が盗まれた：同前、1937年12月19日。
- 126 クリスマス・イブ 彼らは、……我々に語り：同前、1937年12月24日。
- 126 「唯一の慰め」：同前、1937年12月30日。
- 127 ウィルソンたちは、日本人が……を何度も見た：ダーディン, Japanese Atrocities Marked Fall of Nanking。
- 127 南京陥落後……大きな塹壕が：ロバート・ウィルソン、家族への手紙、1937年12月24日。
- 127 ウィルソンが立ち向かった日本兵たちは：ロバート・ウィルソン、家族への手紙、1937年12月21日、6ページ。マジョーリー・ウィルソン、著者の電話インタビュー。ジョン・マギーから「ピリー」への手紙（ジョンの署名）、1938年1月11日、アーネストおよびクラリッサ・フォスター・コレクション。
- 127 最悪の光景の一つ：マジョーリー・ウィルソン、著者の電話インタビュー。
- 127 彼は……女性を決して忘れることはないと言った：同前。

- 127 「今朝、悲惨な窮状の恐ろしい身の上の女性がまた一人来た」：J. H. マッカラム、1938年1月3日の日記、*American Missionary Eyewitnesses to the Nanking Massacre, 1937-1938* (1937年から1938年にかけての南京大虐殺のアメリカ宣教師の目撃証言)、Martha Lund Smalley 編 (ニュー・ハーベン、コネティカット：エール大学神学大学院図書館、1997年)、p.39。
- 128 生存者の信じがたい話：ロバート・ウィルソン、家族への手紙、1938年1月1日、p.11。
- 128 華氏一〇二度の高熱に冒されながら奮闘していた：同前、1937年12月26日、p.7。
- 129 虐殺の生存者は：ジェームス伊 (*The Rape of Nanking* の共著者)、著者の電話インタビュー。マッカラムに関する情報は、彼の中国での調査によって得られた。
- 129 虐殺と強姦が徐々に収まってきたときに：マジョーリー・ウィルソン、著者の電話インタビュー。
- 130 鍛冶屋の娘だったヴォートリンは：ヴォートリンの若年の時期の情報は、エンマ・リオン Emma Lyon (ヴォートリンの姪) への著者の電話インタビューから得た、1996年10月28日。
- 130 日記の中で、彼女は南京の景観の美しさをとめどなく賛嘆し続けた：この節の情報のほとんどは、エール大学神学大学院図書館所蔵のミニ・ヴォートリンの1937-40年の日記から直接とっている。彼女は(各ページの先頭行の真中に)独自のページ番号を振っているが、私は各ページの先頭行の右側にスタンプで押されているエール大学神学大学院のページを使用する。
- 130 一九三七年の夏、友人たちといっしょに休暇を：ミニ・ヴォートリン、1937-40年の日記、1937年7月2日から18日、p.2。
- 130 それでもヴォートリンは、南京から去っていく他のアメリカ人たちに加わることを拒否した：同前、1937年9月20日、p.27。
- 131 さらに、大使館職員は彼女と他の国際委員会のメンバーに縄梯子を結ぶための長い縄を与えて：同前、1937年12月1日と8日、p.91、p.100。C. F. ジェフ司令官の米国アジア艦隊最高司令部宛書信(便箋の先頭に「米国艦オアフ」、1938年2月14日付、1938年2月13日情報週報(日本の報復を恐れて、新聞社に公表されなかった宣教師からの手紙の抜粋が引用さ

- れている)。ジョージ・フィッチの日記（報告書では名前は伏せられている）、海軍作戦局、海軍情報部、一般通信、1929-42、フォルダー A8-21/FS#3、箱番 195、項番 81、記録グループ 38、米国立公文書館。
- 131** 彼女はキャンパスに女性の難民を受け入れる準備と負傷兵をその地区から撤退させることのために労力を費やした：ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1937年12月3、6、7日、p.94、p.97、p.98。
- 131** ヴォートリンは二つ目のアメリカ国旗の縫製も指示した：同前、1937年10月6日、p.41。
- 131** 一二月の第二週の前に：ミニー・ヴォートリン、Sharing 'the Abundant Life' in a Refugee Camp (難民キャンプでの「豊かな人生」を共に過ごして)、1938年4月28日、箱番 103、記録グループ 8、ジャーヴィス・コレクション、エール大学神学大学院図書館。
- 131** 難民たちは一日に千人の割合で市内を通り抜けてやってきた：おそらくフォスターからの両親への手紙。1937年10月4日、下関から。アーネストおよびクラリッサ・フォスター・コレクション。
- 131** 疲れきり、混乱して、空腹だった彼らの多くは：793.94/12060、報告書番号 9114、1937年12月11日、制限報告書、国務省一般記録、米国立公文書館。
- 131** 「今日は昼食の時間を除いて朝八時三〇分から」：ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1937年12月15日、p.111。
- 131** ヴォートリンは女性たちと子どもたちが自由に入ることを許したが：同前。
- 132** ヴォートリンは……心を乱したが：同前、1937年12月16日、p.112-3。
- 132** 彼らは間違いなく殺されていたろう：前掲、1937年12月16日、p.13。
- 132** 一台のトラックに八人から一〇人の少女が積まれて走っていき：同前、1937年12月16日、p.114。日記の中でヴォートリンは女性たちの叫び声を“Gin Ming”と書いているが、正確には中国語の発音の“Jiu Ming (救命)”である。
- 132** 「なんという痛ましい光景なの！」：同前、1937年12月27日、p.130。
- 133** 「あの光景はけっして忘れることはできない」：同前、p.117-18。
- 133-134** 日本兵たちが……少なくとも一度はあった：同前、1937年12月27日、p.130。

- 134 「くじ引き」：南京進行的恐怖大屠殺の原始史料(1985年)、9-10 ページ。
- 134 一九三八年の元旦の日に、ヴォートリンは：ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1938年1月1日、p.137。
- 134 「獯猛で常軌を逸して」：同前、1937年12月18日、p.119-20。
- 134 「彼らの要求は……許可してもらいたい」：同前、1937年12月24日、p.127。
- 135 「少女たちが次から次にやってきて」：同前。
- 135 市の陥落から一週間後に：報告書封書“Conditions in Nanking” 1938年1月25日、情報部、海軍武官の報告書、1886-1839、海軍作戦本部代理司令官の記録、1882-1954、海軍情報部事務所、箱番996、項番98、記録グループ38、米国立公文書館。胡華玲「南京暴行中の中国婦女」、69 ページ。
- 135 ヴォートリンは、登録にやってきた男性たちの：ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1937年12月28日、p.131。
- 135 安全区の指導者たちの交渉はいくつかの例では：フィッチ、*My Eighty Years in China*、p.117。
- 135 「これははったりには違いない」：ジョン・マギー、妻への手紙、1937年12月30日、デイヴィッド・マギー所蔵。
- 136 日本人の苛酷な威嚇は：徐淑希、*Documents of the Nanking Safety Zone*、p.84。
- 136 「君たちは伝統的な結婚の習慣に従わなければならない」：ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1937年12月31日、p.135。
- 136 ヴォートリンは、日本兵が女性たちを家畜のように駆りたてていることに：同前、1938年1月4日、p.141。
- 136 日本兵は女性たちに、日本の新聞記者や写真家に向かって微笑み：同前、1938年1月6日、p.144。
- 136 「母親や他の人が彼らの保証人になったからだった」：同前、1937年12月31日、p.135。
- 136 登録が終わると、日本人は安全区自体を排除しようとした：アーネスト・フォスター、1938年1月21日の手紙、アーネストおよびクラリッサ・フォスター・コレクション。
- 136 二月四日が最終期限とされた：(筆者不明だが、ルイス・スマイスと思われる) 1938年2月1日付けの手紙、箱番228、記録グループ8、エー

ル大学神学大学院図書館。

- 137** ヴォートリンは彼らの約束を信じかねていた：ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1938年2月4日、p.183。
- 137** 何百人もの女性たちがペランダにすし詰めになり：ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1937年12月18日。
- 137** 「肩を寄せ合って眠った」：(漢口からの筆者不明の) 1939年2月12日付けの手紙、アーネストおよびクラリッサ・フォスター・コレクション。
- 137** 「神様、今夜は南京での日本兵による野獣のような残忍行為を制止してください」：ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1937年12月16日、p.114。
- 137** 「あなた方は悩むことはありません」：許志庚「非常之南京大屠殺：目撃者們証詞」(台北、1993年、56-57ページ)。
- 137** 「あなたはそんな旭日の紋章を身につける必要はありません」：同前、60ページ。
- 138** 「中国は滅びていません」：胡華玲 (Hua-king W. Hu), Miss Minnie Vautrin : The Living Goddess for the Suffering Chinese People During the Nanking Massacre (南京大屠殺の時期の中国人被害者たちの生ける女神、ミニー・ヴォートリン女史)、*Chinese American Forum* 11, no.1 (1995年7月): 20。郭岐「陥都血泪録」『恐怖大屠殺の原始史料』(1985)。
- 138** 「彼女は朝から夜まで眠っていませんでした」：舒璜、映画製作者ジム・カルプ (Jim Culp) のインタビュー、ジム・カルプの個人収集記録から、サンフランシスコ。
- 138** 「あるときは、残忍な日本兵によって彼女が何度も殴られたと聞きました」：郭岐「陥都血泪録」、16ページ。胡華玲, Miss Minnie Vautrin, p.18。
- 138** ナチ党员で国際委員会のメンバーのクリスチャン・クレーガー：クリスチャン・クレーガー, *Days of Fate in Nanking* (南京の運命の日々)、未刊行の報告書、1938年1月13日、ピーター・クレーガーの収集記録。
- 138** 略奪と放火により食物がほとんどなくなった：ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1938年5月4日、p.208。茸については、1995年7月29日の、中国南京での、Liu FongHua への著者のインタビュー参照。
- 138** 彼らは炊き出しで無料の米の食事を配給しただけでなく：ルイス S. C. スマイスから福田篤泰、公使から日本大使館へ、封筒番号 1 に同封、

“Conditions in Nanking (南京の状態)”と題された報告書、1938年1月25日、情報部、海軍武官報告書、1886-1939、海軍作戦代理長官事務所の記録、1882-1954、海軍情報局事務所、箱番996、項番98、記録グループ38、米国立公文書館。

138 彼らは市内の中国人警察に対してさえ、その警護者として行動した：ジェイムズ・マッカラム、日記、1937年12月30日、エール神学大学院図書館。

139 「彼の日本刀で三度にわたりリグズを脅したが」：徐淑希編, *Documents of the Nanking Safety Zone*, p.24。

139 日本兵がマイナー・シール・ベイツを拳銃で脅したこともあった：“Cases of Disorder by Japanese Soldiers in Safety Zone” 封筒番号1-Cに副封、海軍武官の報告書、1886-1939、海軍作戦代理局長の記録、1882-1954、海軍情報局、フォルダー H-8-B 登録番号1727A、箱番996、項番98、記録グループ38、米国立公文書館。

139 別の事件では……兵士をロバート・ウィルソンが病院から叩き出そうとしたときに、兵士は彼に向けて拳銃を構えた：ジョン・マギーの妻宛ての長い手紙の中の日記、1937年12月19日、デイヴィッド・マギー所蔵。

139 別の兵士はジェイムズ・マッカラムとC・S・トリマーに向けて小銃を発砲した：“Cases of Disorder by Japanese Soldiers in Safety Zone”、封筒番号1-Cに副封、海軍武官の報告書、1886-1939、海軍作戦代理局長の記録、1882-1954、海軍情報局フォルダー H-8-B 登録番号1727A、箱番996、項番98、記録グループ38、米国立公文書館。

139 マイナー・シール・ベイツが日本軍の憲兵隊本部を訪れたときには：ジョン・マギーから「ビリー (Billy)」への手紙 (ジョンの署名)、1938年1月11日、アーネストおよびクラリッサ・フォースター・コレクション。

139 ハッツは椅子で身を護ったが：ジョン・ラーベの日記、1937年12月22日、p.341-2。

139 最終的に、安全区は二〇万人から三〇万人の難民を収容した：Days of Fate in Nanking で、クリスチャン・クレーガーは12月12日に20万人から25万人の難民が安全区に逃れてきたという彼の考えを書いている。マイナー・シール・ベイツの25万人という数字はこれに符合している (“Preliminary Report on Christian Working in Nanking [南京で働くキリスト教徒への予備

的な報告書” 邵子平所蔵)。安全区の難民の 30 万人という人数の推定値は、安全区で住宅供給に従事していた許伝音の東京裁判での証言からきている。東京裁判速記録、項番 319、記録グループ 331、2561 ページ、米国立公文書館を参照。

第六章 世界が知っていたこと

- 144** 南京そばの祝勝料理：モリス・スズキ、Showa、p.34。
- 144** ヒューストンから来た二九歳の記者だったダーディンは：フランク・ティルマン・ダーディン、著者との電話インタビュー、1996 年 1 月。
- 144** スティールはもっと年上の特派員で：A. T. スティール・コレクション、アリゾナ州立大学図書館。
- 144** 多分、三人の中で最も向こう見ずだったのはマクダニエルだろう：C. イェイツ・マクダニエル、Nanking Horror Described in Diary of War Reporter (戦争記者の日記に描かれた南京の恐怖)、シカゴ・トリビューン、1937 年 12 月 18 日。
- 144-145** 彼らはアメリカ合衆国最大で、最も信頼されている新聞紙上に掲載される記事を書いただけでなく：南京大虐殺のまとまった記事を最初に発表したのは、アーチボルド・スティールだった。記者たちがオアフ号に乗船したとき、二十九歳の青年だったダーディンは、交換手が規則違反になるというので、記事を発信することができなかった。しかし、どういふわけか、スティールは記事を送っていた。「多分、50 ドル紙幣か何かをそっと渡したんじゃないかなと思うよ！」。数十年後にダーディンは強調している。Mr. Tillman Durdin's Statement on the News Conference — Refuting the Distortions of His Reports on the Great Nanking Massacre by the Japanese Media (記者会見でのダーディン氏の発言：南京大虐殺に関する彼の記事の日本のメディアによる歪曲を論駁する、*Journal of Studies of Japanese Aggression Against China*、1992 年 8 月、p.66)。「私は若く新米だったが、スティールは老練だった。だから彼は私を出し抜いたんだ」。
- 145** 大虐殺の間、彼らの多くは非常に怯えていて：C. イェイツ・マクダニエル、Nanking Horror Described in Diary of War Reporter (戦争記者の日記に描かれた南京の恐怖)、シカゴ・トリビューン、1937 年 12 月 18 日。

- 146** 「私は彼をどこに連れて行ったらいいのか、どうすればいいのか分からなかった」：Mr. Durdin's Statement on the News Conference – Refuting the Distortions of His Reports on the Great Nanking Massacre (記者会見でのダーディン氏の発言：南京大虐殺に関する彼の記事の日本のメディアによる歪曲を論駁する)、*Journal of Studies of Japanese Aggression Against China*、1992年8月、p.66。
- 146** 「私には何もできなかった」：マクダニエル、Nanking Horror Described in Diary of War Reporter (戦争記者の日記に描かれた南京の恐怖)。
- 146** ダーディンとスティールの南京最後の日の詳細な話は、彼らのニュース記事、フィッチの日記、そして Mr. Tillman Durdin's Statement on the News Conference (記者会見でのダーディン氏の発言) で記述されている。
- 146** 自らの生命を危険にさらしてパネー号の爆撃を撮影した、アメリカ人の二人の映画ジャーナリストがいた：ノーマン・アレイとフォックス・ムービートーンのエリック・メイエルについては、*Camera Men Took Many Panay Pictures* (カメラマンが多数のパネイ号の写真を撮るとる)、*ニューヨーク・タイムズ*、1937年12月19日、参照。
- 146** 彼らは攻撃から無傷で生還することができたが：スティール、*Chinese War Horror Pictured by Reporter*。
- 146** 生き残ったパネー号の乗員と共に、川岸の葦の茂みに隠れていたとき：ハミルトン・ダービー・ペリー (Hamilton Darby Perry), *The Panay Incident: Prelude to Pearl Harbor* (パネー号事件：真珠湾への序曲、トロント：マクシミリアン、1969)、p.226。
- 146** 一二月三日にフランクリン D・ルーズベルト大統領は：UP 通信、*シカゴ・デイリー・ニューズ*、1937年12月13日に掲載された記事。
- 146** 汚れて寒さに震え、毛布と中国の掛け布団、ぼろぼろになった衣服を身にまとった：“Sinking of the U. S. S. Panay (米国艦パネー号の沈没)”, *Some Phase of the Sino-Japanese Conflict (July-December 1937)* (中日の衝突の一段階、1937年7月から12月まで)の11章、「W. A. アングウィン大佐 (MC)、米海軍、1938年12月、上海、米国アジア艦隊最高司令部、海軍情報部、一般通信、1929-1942年、フォルダー P9-2/EF16#23、箱番 284、項番 81、記録グループ 38、米国立公文書館」から編集。
- 147** アレイとメイエルのフィルムが劇場で上映されると：UP 通信、シカ

ゴ・デイリー・ニュース、1937年12月29日に掲載された記事。793.94/12177、
国務省の一般記録、記録グループ 59、米国立公文書館。

- 147 「大使館は軍に対しては何の役にも立たない」：ジョージ・フィッチの
日記のコピー、海軍武官補 E. G. ハーゲン (E. G. Hagen) から海軍作戦
局長官 (海軍情報局長官) 宛ての資料に同封されていた。1938年3月7
日、米国立公文書館。
- 147 二月に、彼らは数人のアメリカ海軍士官が南京を訪れることを認め
たが：司令官の米国アジア艦隊最高司令部宛書信 (便箋の先頭に「米国艦
オアフ」、1938年2月20日情報週報、1938年2月21日、海軍作戦局、海
軍情報部、一般通信、192942、フォルダー A8-21/FS#3、箱番 195、項番
81、記録グループ 38、米国立公文書館。
- 147 四月になると：“Red Machine (Red 暗号解読機)” 日本の外交電文、第
1794番、翻訳日 1938年5月4日、箱番 14、記録グループ 457、米国立公
文書館。
- 147 「私が前の報告書で述べた……想定」：「ドイツ駐華大使館」文書番号 203、
ドイツ外交報告書、国家歴史档案馆、台北、中華民国。報告書によれば、
ドイツの外交官は 1938年1月9日に南京市に戻った。
- 148 暗号によって保護されていたが：アメリカの Red 暗号解読機の詳細に
ついては、デイヴィッド・カーン (David Kahn), *Roosevelt, Magic and Ultra*
(ルーズベルト、魔法と超能力)、*Historians and Archivists*、ジョージ O. ケン
ト編集 (Fairfax, Va. : George Mason University Press, 1991) 参照。
- 148 「彼らが戻って」：“Red Machine (Red 暗号解読機)” 日本の外交電文、第
1171番、記録グループ 457、米国立公文書館。
- 148 たとえば、ユニバーサル映画のニュース映画製作者ノーマン・アレ
イは：ペリー、*The Panay Incident*, p.232。
- 149 「極秘」：“Red Machine (Red 暗号解読機)”、日本の外交電文、箱番 2、
記録グループ 457、米国立公文書館。
- 149 「それが南京から発せられるニュースのすべてならば」：ロバート・
ウィルソン、家族宛ての手紙、1937年12月20日。
- 150 「注意深く、彼らは、現在では死体が片付けられている僅かな通りを
案内されていった」：リーダーズ・ダイジェスト 1938年7月号に掲載され
たジョージ・フィッチの日記。

- 150 「大いに満足していて」：ジョージ・フィッチ, *My Eighty Years in China*, p.115。
- 150 「自発的な」祝賀会：リーダーズ・ダイジェスト 1938 年 7 月号。
- 150 「このような行為は繰り返されなかった」：スマイス、1938 年 3 月 8 日の手紙、箱番 228、記録グループ 8、エール大学神学大学院図書館。
- 150 「皇軍が入城すると」：デイヴィッド・マギー所蔵。この記事は、ジョージ・フィッチの日記のコピーにもある。海軍武官補 E. G. ハーゲン (E. G. Hagen) から海軍作戦局長官 (海軍情報局長官) 宛ての資料に同封されていた。1938 年 3 月 7 日、米国立公文書館。
- 151 日本人たちは安全区における我々の努力を貶めようとしている：ジェイムズ・マッカラム、1938 年 1 月 9 日の日記 (コピー)、箱番 119、記録グループ 119、エール大学神学大学院図書館、Smalley に再録、*American Missionary Eyewitnesses to the Nanking Massacre* (アメリカの宣教師による南京大虐殺の目撃証言)、p.43。
- 151 発行されている日本の新聞のいくつかを目にした：ジョージ・フィッチの 1938 年 1 月 11 日の日記のコピー、海軍武官補 E. G. ハーゲン (E. G. Hagen) から海軍作戦局長官 (海軍情報局長官) 宛ての資料に同封されていた。1938 年 3 月 7 日、米国立公文書館。
- 151 三月に、東京の国営ラジオ局が：リーダーズ・ダイジェスト 1938 年 7 月号。
- 151 日本の新聞の最新記事によると：ルイス・スマイスとマーガレット・スマイスの、「神の国の友人」への手紙、1938 年 3 月 8 日、箱番 228、記録グループ 8、エール大学神学大学院図書館。
- 152 「戻った良い中国人は」：リーダーズ・ダイジェスト 1938 年 7 月号。
- 152 「魅力的で、愛すべき兵士」：「ドイツ駐華大使館」p.107 以降の文書、1938 年 3 月 4 日、国家歴史档案馆、中華民国。
- 152 二月初めに、日本の将官が：アーネスト・フォスター、1938 年 2 月 10 日の手紙、アーネストおよびクラリッサ・フォスター・コレクション。
- 153 「一歳の少女の母親は」：「ドイツ駐華大使館」、134 ページ以降の文書、1938 年 2 月 14 日、国家歴史档案馆、中華民国。
- 153 日本政府は……他の記者が南京に入ることを禁止し：“Red Machine (Red 暗号解読機)”、日本の外交電文、D (7-1269) #1129-A、箱番 14、記録グ

ルーヴ 457、米国立公文書館。

- 153** 言葉を駆使する技芸における高度な訓練：ジョン・ギレスピー・マギー・シニアは、カナダ空軍 (RCAF) 勤務にして、有名な第二次世界大戦の詩 “High Flight” を書いたジョン・ギレスピー・マギー・ジュニアの父親である。（“Oh! I have slipped the surly bonds of the earth/And danced the skies on laughter-silver wings…”）
- 154** 完全な無秩序状態が一〇日間も続いている：ジョージ・フィッチの 1937 年 12 月 24 日の日記のコピー、海軍武官補 E. G. ハーゲン (E. G. Hagen) から海軍作戦局長官 (海軍情報局長官) 宛ての資料に同封されていた。1938 年 3 月 7 日、米国立公文書館。フィッチ, *My Eighty Years in China* に再録。
- 154** 語ろうとするだけで恐ろしくなる話だ：ジェイムズ・マッカラム、1938 年 1 月 19 日の日記 (コピー)、箱番 119、記録グループ 119、エール大学神学大学院図書館、Smalley に掲載、*American Missionary Eyewitnesses to the Nanking Massacre* (アメリカの宣教師による南京大虐殺の目撃証言)、p.21。
- 155** いやというほど話してきたと思う：ジョン・マギーの妻への手紙、1937 年 12 月 31 日、デイヴィッド・マギー所蔵。
- 155** 「くれぐれもその取り扱いには慎重に行ってください」：ジョン・マギーから「ビリー (Billy)」への手紙 (ジョンの署名)、1938 年 1 月 11 日、アーネストおよびクラリッサ・フォスター・コレクション。
- 155** 「センセーション」：フィッチ, *My Eighty Years in China*, p.92。
- 155** 「私が語ろうとしているものは」：ジョージ・フィッチの 1937 年 12 月 24 日の日記のコピー、海軍武官補 E. G. ハーゲン (E. G. Hagen) から海軍作戦局長官 (海軍情報局長官) 宛ての資料に同封されていた。1938 年 3 月 7 日、米国立公文書館。フィッチ, *My Eighty Years in China*, p.97-98 に再録。
- 156** 「このようなものを信じる人がいるとは到底考えられない」：リーダーズ・ダイジェスト 1938 年 10 月号。
- 156** 大虐殺のときに映画のカメラを所有していた西欧人はジョン・ギレスピー・マギーだけで、ジョージ・フィッチがそれを借りて日本人に連行されていく中国人捕虜の映像を写したのではないかと信じられている。ジョン・マギーの息子のデイヴィッド・マギーは、今でも彼の父親が南京大学病院内の光景を撮影した 16 ミリカメラ所蔵している。フィルムのコピー

は、ジョージ・フィッチの孫娘タニア・コンドン (Tanya Condon)、ジョン・マギーの息子のデイヴィッド・マギー、そしてロバート・ウィルソンの未亡人マーゴリー・ウィルソンが所蔵している。フィルムの内容の英語の要約は、「ドイツ駐華大使館」、文書番号 203、ドイツ外交報告書、国家歴史档案馆、台北、中華民国にある。

- 156** 「兵士が混み合った、不快な」：フィッチ, *My Eighty Years in China*, p.121。
156 覚悟していた：タニア・コンドン、著者の電話インタビュー、1997年5月27日。
157 少なくともジョージ・フィッチは……疑っていた：同前。
157 彼らは我々を敵以上に憎んでいる：ジョン・マギーの家族への手紙、1938年1月28日、デイヴィッド・マギー所蔵。

第七章 占領下の南京

- 159** 「市の無秩序は想像することもできないほどのものです」：ジョン・マギー、日付のない手紙 (1938年2月と思われる)、デイヴィッド・マギー所蔵。
159 何フィートも積み重なっている死体：ダーデイン、ニューヨーク・タイムズ、1937年12月18日。
160 日本のために蒙った公共財の損害の合計は：損害額の推定値については、ルイス・スマイス, *War Damage in the Nanking Area* (南京地区の戦争被害)、1938年7月、を参照。伊と咏, *The Rape of Nanking*, p.232 で引用。
160 一九三八年の六月に、六〇ページの報告書が公表され：ルイス・スマイスからウィラード・シェルトン (Willard Shelton、セントルイスの *Christian Evangelist* 誌の編集長) に送付された、1938年4月29日、箱番 103 記録グループ 8、ジャーヴィス・コレクション、エール大学神学大学院図書館。
160 南京市の火事は市の陥落とともに始まり：マイナー・シール・ベイツ (目撃者) の証言、連合国作戦占領本部の記録、東京裁判速記録、p.2636-37、項番 319、記録グループ 331、米国立公文書館。南京における谷寿夫の裁判の評決も参照、*Journal of Studies of Japanese Aggression Against China*, 1991年2月、p.68。
160 兵士たちは士官の指導にしたがって建物に火をつけ：Harries and Harries,

Soldiers of the Sun, p.223。

- 160 安全区の指導者は火事を消すことができなかった：徐淑希, *Documents of the Nanking Safety Zone*, p.51。
- 160 南京大虐殺の最初の数週間で：東京裁判判決書。“German Archival Materials Reveal ‘The Great Nanking Massacre’ (ドイツの資料記録で明らかになる「南京大虐殺」)” *Journal of Studies of Japanese Aggression Against China*, 1991年5月, p.68。ルイス・スマイスとマーガレット・スマイス、友人への手紙、1938年3月8日、ジャーヴィス・コレクション、
- 160 彼らはロシアの公使館を焼却し：許伝音(目撃者)、東京裁判における証言、p.2577。A. T. スティール, *Japanese Troops Kill Thousands: ‘Four Days of Hell’ in Captured City Told by Eyewitnesses; Bodies Piled Five Feet High in Streets* (日本軍が数千人を殺害、目撃者が語る陥落した都市の「四日間の地獄」—通りには何フィートにも積み上げられた死体)、シカゴ・デイリー・ニューズ、1937年12月15日。ジェイムズ・マッカラム、1937年12月29日の日記、エール大学神学大学院図書館。
- 160 日本人は特にアメリカの所有物には特別な侮辱を用意しているかのようだった：リーダーズ・ダイジェスト 1938年7月号。
- 161 顕著な：「ドイツ駐華大使館」 p.214以降の記録、ドイツ外交文書、国家歴史档案馆、台北、中華民国。クレーガー, *Days of Fate In Nanking* (南京の運命の日々)。
- 161 日本兵は南京の周辺地区を荒廃させた：「ドイツ駐華大使館」報告書番号 21、p.114以降の記録、中国人農夫により 1938年1月26日に提出された、ドイツ外交文書、国家歴史档案馆、中華民国。
- 161 また、日本人はアセチレンのガスの切断器具を使用し：ベイツ、東京裁判における証言、p.2635-36。クレーガー, *Days of Fate In Nanking*。
- 161 兵士たちは彼らの獲物の一部を日本に郵送することを許されていたが：東京裁判判決書。パーガミニ, *Japan’s Imperial Conspiracy*, p.37 (日本語版 128 ページ)。
- 161 二〇〇台を超えるピアノ：ベイツ、東京裁判における証言、2636 ページ。
- 161 一二月末に日本人は：国民党歴史委員会、革命文献、1987年、109巻、311 ページ、台北、中華民国。
- 161 彼らは外国の自動車を狙う：ルイス・スマイスとマーガレット・ス

マイス、友人への手紙、1938年3月8日、ジャーヴィス・コレクション。

- 161** 死体を片付けるために使用するトラックも：徐淑希, *Documents of the Nanking Safety Zone*, p.14 (ジョン・ラーベから日本大使館への書簡、1937年12月17日、文書番号9)。
- 161** ところが、日本兵は、南京大学病院に侵入して：ロバート・ウィルソン、家族宛ての手紙、1937年12月14日。ベイツ、東京裁判における証言、2635-36 ページ。
- 161** ドイツ人の報告書は、一二月一五日に：1937年12月9日から15日までの南京での出来事に関するロイターのスミス氏による口述の発表の抜粋、「ドイツ駐華大使館」p.178 ページ以降の文献、1938年1月1日に漢口で書かれた、ドイツ外交文書、国家歴史档案馆、中華民国。
- 161** 「一握りの汚れた米までもが」：The Sack of Nanking: An Eyewitness Account of the Saturnalia of Butchery When Japanese Took China's Capital, as Told to John Maloney by American, with 20 Years' Service in China, Who Remained in Nanking After Its Fall (南京の略奪：日本が中国の首都を掌握した後の虐殺の横行に関する目撃者の説明、中国での仕事に20年間従事していて、南京陥落後も当地に残っているアメリカ人がジョン・マロネイに語った)、Ken (シカゴ)、1938年6月2日、リーダーズ・ダイジェスト 1938年7月号に再録。この記事の発信元の後ろにはジョージ・フィッチがいた。
- 161** 一九三八年の一月には……開店している店舗は一軒もなかった：フィッチ, *Nanking Outrages* (南京の暴行)、1938年1月10日、フィッチ・コレクション。
- 162** 事実上、港に入っている船はなかった：司令官の米国アジア艦隊最高司令部宛書信(便箋の先頭に「米国艦オアフ」)、1938年2月20日情報週報、1938年2月21日、海軍作戦局、海軍情報部、一般通信、1929-42、フォルダー A8-21/FS#3、箱番 195、項番 81、記録グループ 38、米国立公文書館。
- 162** 市のほぼ全域で、電気……が利用できなくなっていた：徐淑希, *Documents of the Nanking Safety Zone*, p.99。1月末まで、電気を利用できるのは特別に選ばれた建物だけで、水は低い給水栓でときどき出ることがあるという状態だった。ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1937年12月29日。Work of the Nanking International Relief Committee, March 5, 1938 (南京国際

救済委員会の仕事、1938年3月5日)、マイナー・シール・ベイツ文集、エール大学神学大学院図書館、p.1。行政院宣伝局新聞訓練所、南京指南(南京、南京新報社、1938年)、49ページ。(ここで示す情報は、サンディエゴのカルフォルニア大学のマーク・アイコルト [Mark Eykholt] の未発表論文を参考にしている)。発電所の従業員に対する日本人の虐殺の詳細については、次を参照。ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1937年12月22日、125ページ。および、海軍武官補 E. G. ハーゲンから海軍作戦局長官への資料に同封されていたジョージ・フィッチの日記のコピー、米国立公文書館。ジョージ・フィッチは、「英雄的に発電施設を維持していた」従業員たちが、発電所の会社は政府機関だという理由で連れ去られ(政府機関ではない)、射殺されたことを報告している。「日本の役人たちは毎日私の事務所に来て、タービンを稼働させて電気を使用できるようにするために、これらの人員を確保しようとしている。彼らに、あなた方の軍隊が、その人員のほとんどを殺したのだと言えることは、私の小さな慰めだった」。

- 162** 女性たちは……入浴しないままでいようとしていた：マーク・アイコルト(大虐殺後の南京の生活状況に関する未発表論文の著者、サンディエゴのカルフォルニア大学)、著者の電話インタビュー。
- 162** 家々に侵入して物を持ち去っていく人々が見られた：ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1938年2月10日、p.189。
- 162** 安全区の上海路には：同前、1938年1月9日、p.149、1938年1月12日、p.153、1938年1月27日、p.172。
- 162** この活動は地方の経済を蘇らせ、飛躍させた：同前、1938年1月20日、p.163。
- 162** 一九三八年の一月一日に日本人は、南京自治委員会という：A Short Overview Describing the Self-Management Committee in Nanking, 7 March 1938(南京の自治委員会を説明する簡単な概要、1938年3月7日)、「ドイツ駐華大使館」ドイツ外交文書、p.103以降の文献、国家歴史档案馆、中華民国。ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1937年12月30日と1938年1月1日。極東国際軍事法廷の記録、法定証拠、1948年、第二次世界大戦戦争犯罪記録集、箱番134、項番14、記録グループ238、p.1906、米国立公文書館。C. F. ジェフ司令官の米国アジア艦隊最高司令部宛書信

(便箋の先頭に「米国艦オアフ」、1938年4月10日付、1938年4月11日情報週報、海軍作戦局、海軍情報部、一般通信、192942、フォルダーA8-21/FS#3、箱番195、項番81、記録グループ38、米国立公文書館。

162 水道、電灯：C. F. ジェフ司令官の米国アジア艦隊最高司令部宛書信(便箋の先頭に「米国艦オアフ」、1938年4月10日付、1938年4月11日情報週報、海軍作戦局、海軍情報部、一般通信、192942、フォルダーA8-21/FS#3、箱番195、項番81、記録グループ38、米国立公文書館。

162 中国の商人は……負担させられた：同前。「ドイツ駐華大使館」ドイツ外交文書、1938年3月4日付の文献、p.107以降、国家歴史档案館、中華民国。A Short Overview Describing the Self-Management Committee in Nanking, 7 March 1938、1938年3月7日、「ドイツ駐華大使館」、文書番号103。

162 日本人は中国人の消費者向けの軍人の商店を開業し：「ドイツ駐華大使館」1938年5月5日の文献、p.100から、ドイツ外交文書、国家歴史档案館、台北、中華民国。

162-163 中国人の傀儡政府は……貧困を加速させた：A Short Overview Describing the Self-Management Committee in Nanking, 7 March 1938、前掲の資料内、p.103以降の資料。

163 「我々は今、認可された略奪を行っている」：同前。

163 民衆からの搾取や押収よりも遙かに驚くべきものは：麻薬取引の詳細については、東京裁判でのベイツの証言を参照。2649-54、p.2658。

163 あるものは、大量の阿片を一度に飲み込んで、自殺を図った：エリザベス・カーティス・ライト (Elizabeth Curtis Wright), *My Memoirs* (思い出、Bridgeport, Conn., Winthrop Corp., 1973)、箱番222、エール大学神学大学院図書館。

163 あるものは、麻薬を手に入れようと犯罪に走り：「ドイツ駐華大使館」1938年3月4日付の文献、p.107から、ドイツ外交文書、国家歴史档案館、台北、中華民国。

163 日本人の雇用主は、地域の多くの中国人労働者を奴隷以下に扱い：唐順山、著者のインタビュー、南京、中華人民共和国、1995年7月26日。

164 日本人は、南京の人々を使って医学実験まで行った：シェルダン・ハリス (Sheldon Harris), *Factories of Death: Japanese Biological Warfare, 1932-1945 and the American Cover-up* (死の工場：1932年から1945年までの日本の生物

- 兵器、およびそのアメリカの隠蔽、London:Routledge、1994)、p.102-12。
- 165** 日本の当局は……大衆を支配する方法を案出した：“From California to Szechuan, 1938” アルバート・スチュワードの日記、1939年12月20日、リーランド R. スチュワード (Leland R. Steward) の個人収集物。
- 165** 壊滅的な飢饉は発生しなかった：ルイス・スマイス、War Damage in the Nanking Area、p.20-24。ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1938年5月5日。
- 166** 城内の菜園や農園は：ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1938年3月21日。Notes on Present Situation, March 21,1938 (現況に関するメモ、1938年3月21日)、p.1、フィッチ・コレクション、エール大学神学大学院図書館。
- 166** ひどい飢えや栄養不良を被ったことを示す証拠はない：マーク・アイコルト、著者の電話インタビュー。
- 166** また、彼らはコレラとチフスに対する積極的な予防接種計画を展開し：同前。日本軍が他の地域に対して致命的な生物兵器を使用したときは、南京のような日本が占領していた地域では明らかに疫病の流行を防ぐために予防措置を講じていた。多分、これらの地域に日本国籍の人間がいたからだろう。
- 166** 西欧の宣教師の子供たちは……覚えている：アンジー・ミルズ、著者の電話インタビュー。
- 166** リゾールを噴霧された：1939年2月12日付の筆者不明の手紙、フォスター・コレクション、RG 8、箱番 263、エール大学神学大学院図書館。
- 166** 一九三八年の春に、勇気を振り絞った男たちが市に戻り始めた：アイコルトのインタビュー。
- 167** ときには、地下組織の抵抗もあった：同前。
- 167** 日本人は中国の首都だった南京に、降伏の日まで残っていて：著者の生存者へのインタビュー。

第八章 審判の日

- 169** 一九四四年の三月に、連合国は：Judgement of the Chinese War Crimes Military Tribunal on Hisao Tani, March 10,1947 (中国戦争犯罪軍事法廷の谷

寿男に対する判決書、1947年3月10日)、*Journal of Studies of Japanese Aggression Against China*、1991年2月、p.68。

- 170 審理では：許志庚「南京大屠殺」、219、223、226、228 ページ。
- 170 最も有名な証拠物件は：呉旋と羅瑾に関するテレビ・ドキュメンタリー番組。放映日、1995年7月25日、江蘇電視台、チャンネル1。
- 171 ジャパン・アドヴァタイザー紙の記事：許志庚「南京大屠殺」、215-16 ページ。
- 171 南京戦争犯罪法廷の焦点：同前、218-30 ページ。
- 172 審理の範囲は驚異的である：東京裁判に関する統計は、アーノルド・ブラックマン (Arnold Brackman), *The Other Nuremberg: The Untold Story of the Tokyo War Crimes Trials* (ニューヨーク: Morrow, 1987年)、p.9、p.18、p.22 参照 (日暮吉延訳『東京裁判—もう一つのニュルンベルク』時事通信社、1991年)。World War II magazine、1996年1月、p.9。
- 173 「東京裁判には千のミ・ライ (ソンミ) があった」：同前、p.9 (日本語版3ページに該当箇所)。
- 173 検察当局が究明したのは：東京裁判速記録。
- 173 二五人に一人の割合でしか死んでないのに比べて：ケン・リングル (Ken Ringle), *Still Waiting for an Apology: Historian Gavan Daws Calling Japan on War Crime* (今でも謝罪を待っている：歴史家ギャヴァン・ドウズは日本の戦争犯罪を訴える)、ワシントン・ポスト、1995年3月16日。ギャヴァン・ドウズへの著者の電話インタビューと電子メールによる会話。ドウズによれば日本の連合国戦争捕虜全体の死亡率は27パーセントだった。アメリカ人は34パーセント、オーストラリア人は33パーセント、イギリス人は32パーセント、そしてオランダ人は20パーセント以下であった。これに対し、ドイツの西部戦線の連合軍捕虜全体の死亡率は4パーセントだった。詳細は、ギャヴァン・ドウズ, *Prisoners of the Japanese: POWs of World War II in the Pacific* (日本軍の捕虜：第二次世界大戦太平洋戦争の戦争捕虜、ニューヨーク、Morrow、1994年)、p.360-61、p.437 参照。
- 173 「事件は、あらゆる戦争に共通する偶発的事件という類いのものではなかった」ブラックマン, *The Other Nuremberg*、p.182 (『東京裁判』203 ページ)。
- 174 「野蛮人の大群のように解き放たれた」：東京裁判判決書。

- 174 「国民政府と暴支を懲罰する」：東京裁判判決書。
- 174 南京での罪を償うために：バーガミニ, *Japan's Imperial Conspiracy*, p.34 (日本語版 62-66 ページ)。
- 175 「私だけでもこういう結果になるということは……大變に嬉しい。折角こうなつたのだから、このまま往生したいと思つている」：前掲書、p.47 (日本語版 150 ページ)。花山信勝『平和の発見』、朝日新聞社、昭和 24 年、223 ページ。
- 175 「秘密裡に命令されたか、故意に許された」：東京裁判判決書、1001 ページ。
- 175 不幸なことに、南京大虐殺の主犯格である犯罪者たち：ブルマ (Ian Buruma), *The Wage of Guilt*, p.175。バーガミニ, *Japan's Imperial Conspiracy*, p.45-48 (日本語版 148-153 ページ)。
- 175 中島今朝吾に関する情報は、木村久邇典『個性派将軍中島今朝吾』光人社、1987 年、から得た。
- 176 柳川平助に関する情報は、菅原裕『日本心覆面将軍柳川平助清談』経済往来社、1971 年、166 ページから得た (1945 年 1 月 22 日の、心臓麻痺による彼の死については、239 ページで触れている)。
- 176 「多くの人は……信じるのが困難だった」：ハーバート・ビックス (Herbert Bix), “The Showa Emperor’s Monologue” and the Problem of War Responsibility (「昭和天皇独白録」と戦争責任問題), *The Journal of Japanese Studies*, summer 1992, vol.18, no.2, p.330。
- 177 「極めて貴重な歴史の宝物」：中国協会のジョン・ヤングへの著者のインタビュー。1957 年に、ヤングはジョージタウン大学の教授で、1945 年にアメリカの占領軍が接収した日本の陸軍省と海軍省の記録文献の一部をマイクロフィルム化する許可を与えられていた学者のグループに属していた。翌年、合衆国政府は、これらの資料を日本に返還することを、突然、決定した。これは、ヤングやその他の学者たちにとってとてつもない痛手だった (「私が受けた衝撃はとてもあなたに表現できるようなものではありません」。ヤングは回想した。「私は驚き、仰天しました」)。この決定の結果、日本の軍事記録を 1958 年の 2 月に荷造して日本に返還するまえにマイクロフィルム化することができたのは、文書のほんの僅かの部分でしかなかった。ヤングは、彼の一生の悔恨はこの決定を予見することができなかった

ことだと言う。それを予想していれば、ヤングと彼の同僚たちは記録集の最も重要な部分をマイクロフィルム化する時間を確保することができたはずなのだ。

返還の背景の事情は謎であったし、今日でもそのマイクロフィルム化プロジェクトに関与していた歴史家たちを困惑させつづけている。「これは、私には決して理解できないことでした」。前に下院の図書館に勤務していたエドウィン・ビール (Edwin Beal) は 1997 年 4 月の電話インタビューで語った。「これらの文書の返還は高度な政策の問題であり、疑問をさしはさんではいけないと私たちは言われました」。

何年か後に、ジョン・ヤングは、返還された文書は日本政府によって、戦争時の体制に十分に忠誠でなかったものをその地位から追放するために使用されたという噂を聞いた。

177 厳しく批判されている：公平に見て、バーガミニの著書の記述の多くは正確であり、彼が第二次世界大戦の歴史に関する重要な日本語の文献の研究・調査によって彼が得たということを指摘しなければならない。それだからこそ、学者たちは、たとえ誤りがあつて混乱しているとしても、*Japan's Imperial Conspiracy* (天皇の陰謀) には価値があることをしばしば認めるのである。

178 「世界を征服するためには」：W.モートン (W.Morton), *Tanaka Giichi and the Japan's China Policy* (田中義一と日本の中国政策, Folkestone, Kent, Eng. : Dawson, 1980), p.205. Harries and Harries, p.162-63.

178 「現在……日本のまともな歴史家」：ラナ・ミッター (Rana Mitter) から著者への手紙、1997 年 7 月 17 日。

178 「想像もできない」：ハーバート・ビックスの主張は、著者の電話インタビューで得たものである。

179 話は一九四三年にさかのぼる。天皇裕仁の末弟三笠宮崇仁親王は：A Royal Denunciation of Horrors : Hirohito's Brother — an Eyewitness — Assails Japan's Wartime Brutality (皇族による恐怖への弾劾：裕仁の弟—目撃者—が日本の戦争の時期の残虐行為を告発する)、*Los Angeles Times*、1994 年 7 月 9 日。メリル・グーズナー (Merrill Goozner), *New Hirohito Revelations Startle Japan : Emperor's Brother Says He Reported WWII Atrocities to Him in 1944* (裕仁の新たな発覚が日本を驚愕させる。天皇の弟が 1944 年に第二次世界大戦

の虐殺を天皇に報告したと証言)、シカゴ・トリビューン、1994年7月7日。
Daily Yomiuri、1994年7月6日。〔訳註：「闇に葬られた皇室の軍部批判」、
「This is 読売」1994年8月号〕

- 179 「それで根性ができる」：Daily Yomiuri、1994年7月6日。〔訳註：「闇
に葬られた皇室の軍部批判」「This is 読売」1994年8月号〕
- 179 「断片的に」：New Hirohito Revelations Startle Japan、1994年7月7日。〔訳
註：「闇に葬られた皇室の軍部批判」、『This is 読売』1994年8月号〕
- 179 とても満足していた：朝日新聞、東京版、1937年12月15日。
- 179 閑院宮の電報について。同前。
- 179 銀の壺：朝日新聞、東京版、1938年2月27日。
- 180 たとえば朝香宮王は、引退した後に：バーガミニ、Japan's Imperial Con-
spiracy、p.46 (日本語版 148 ページ)。朝香宮のゴルフコースの開発に関す
る情報は、『大人名辞典』東京、平凡社、1955年、第九巻、16 ページより
得た。

第九章 生き残った人たちの運命

- 183 カレン・パーカーによれば：カレン・パーカー (Karen Parker)、著者の
電話インタビュー。パーカーの国際法強制原理 (Jus Cogens) と日本の第二
次世界大戦の被害者に対する債務の法的な分析については、次の文献を参
照。カレン・パーカーとリン・ベス・ネイロン、Jus Cogens: Compelling the
Law of Human Rights (Jus Cogens: 人法の強制原理)、*Hastings International and
Comparative Law Review* 12, no.2 (1989年冬): 411-63。カレン・パーカーと
ジェニファー F. チュウ (Jennifer F. Chew), *Compensation for Japan's World
War II War-Rape Victims* (日本による第二次世界大戦の戦争残虐行為の被害
者に対する補償)、*Hastings International and Comparative Law Review* 17, no.3
(1994年春): 497-549。

日本の中国侵略 58 周年記念セミナーで、学者たちは中国の被害者が日本
に賠償を請求するよう強く主張した。コロンビア大学教授唐徳剛は、被害
者たちが日本に補償を求めるのは、日本自身が他の 7 カ国とともに清朝時
代の中国を侵略したときに、賠償を要求してそれを受け取ったという先例
に沿っていると語った。歴史家の呉天威は、中国人被害者の補償は国際法

によって認められているという。リリアン呉, Demand Reparations from Japan, War Victims Told (日本に補償を求める、戦争被害者は語った)、Central News Agency、1994年7月7日。

- 184** 焼き殺されそうになった一人の男性は：生存者への著者のインタビュー（本人の希望により匿名とする）。
- 184** 南京大虐殺で父親を処刑された別の女性は：リュウ・フォンホワ (Liu Fonghua)、著者のインタビュー、1995年7月29日。
- 185** ルイス・スマイスは……地方の新聞の記事を見た：キュリウス・ピーク (Cyrus Peake) とアーサー・ローゼンボーム (Arthur Rosenbaum) によるルイス・スマイスへの口述歴史インタビュー、クレアモント大学院、1970年2月26日、1971年3月16日、箱番228、記録グループ8、ユール大学神学大学院図書館。
- 185** 「アメリカ政府の帝国主義政策に応じただけでなく」：『追憶日寇在南京大屠殺』、新華月報に再録、988-91 ページ。
- 185** 「スマイス博士、市内にはあなたが人々のために何をしたかを知っている一〇万人の人間がいるのです」：ピークとローゼンボームによるスマイスへの口述歴史インタビュー。
- 186** 「一九五一年に、彼は南京大学の職を辞し」：ピークとローゼンボームによるスマイスへの口述歴史インタビューの Biographic Sketch and Summary of Contents (簡単な伝記と内容の要約)。
- 186** ベイツも南京を去ったが：モートン G. ベイツ (Morton C. Bates)、1996年10月7日付けの著者への手紙。
- 186** ジョン・マギー牧師の息子のデイヴィッド・マギーは……確信している：デイヴィッド・マギー、著者の電話インタビュー。
- 186** たとえば……エディス・フィッチ・スワップは：エディス・フィッチ・スワップ (Edith Fitch Swapp)、著者の電話インタビュー。フィッチ, My Eighty Years in China, p.125。著書の中でフィッチは、彼の症状が記憶の欠落だったことと、神経科医を訪れたことを記している。「私の大きな救いは、医師の私の脳には何の問題もないと診察結果だった。私は神経の疲労を被っていただけだった。私は非常に激しい日々を送っていたし、もちろん、あの南京の日々の恐ろしい記憶もその何らかの原因になったのだろう」(p.125)。

- 186** 南京大学病院の外科医ロバート・ウィルソン：マジョーリー・ウィルソン、著者の電話インタビュー。
- 187** 「私の力はもう終わってしまっているようだ」：ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1940年4月14日、p.526。
- 187** 「一九四〇年五月、ヴォートリン女史の健康が破壊されたので」：ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、最後のページの最下行に筆記された注記。
- 187** 彼女の姪は……思い出す：ヴォートリンのアメリカに戻る旅路、彼女の電気ショック療法、家族との最後の連絡、そして彼女の自殺の詳細は、エンマ・リオン (Emma Lyon) への著者の電話インタビューから得た。
- 187** 召喚されてドイツに戻る前に：ラーベの南京での最後の日々の詳細については、次の文献を参照。ミニー・ヴォートリン、1937-40年の日記、1938年2月21日、p.199。ジョージ・ローゼンの報告書「ドイツ駐華大使館」文書番号122、国家歴史档案館、中華民国。
- 188** また、彼の友人の一人とのインタビューでは：ピークとローゼンボームによるスマイスへの口述歴史インタビュー。
- 189** 「私はあなたに協力できて幸福です」：マーサ・ベージマン (Martha Begemann)、著者への手紙、1996年4月26日。
- 189** ラーベは……中国人との約束を守っていた：ラーベが南京大虐殺を公表しようとして努力したことと、その後の彼の転落についての詳細は、1996年から1997年の間に受け取ったウルスラ・ラインハルトから著者への書信から得た。
- 190** 「祖父は当惑しているようでした」：ウルスラ・ラインハルト、著者への手紙、1996年4月27日、p.2。
- 191** ジーメンスに仕事はない：1945年と1946年のジョン・ラーベの日記。ウルスラ・ラインハルトが1996年9月18日に著者に送付した手紙の中で、彼女が1996年9月12日に英語に翻訳したもの。
- 191** 「前の日曜日はマミー……と一緒に」：同前。
- 192** 今、マミーの体重は……四四キロしかない：同前。
- 192** 私たちは、ずっと空腹だった：同前、1996年4月18日。
- 192** 昨日、非ナチ化の嘆願が：同前、1996年4月18日。
- 192** 私が中国でナチの虐殺を聞いていたら：同前、1996年4月18日。

- 192** 六月三日……私はとうとう非ナチ化された：同前、1996年6月7日。
- 193** 今日……に行った：同前、1996年6月7日。
- 193** 何日かのうちに：人民日報、1996年12月25日、6ページ。
- 193** ラインハルトによると、W. プラマー・ミルズの家族もラーベに食料を梱包して送った (CARE パッケージ)。それによって、ラーベの栄養不良が原因の皮膚病が治癒した。
- 193** 国民政府は、中国の住宅をラーベに無料で提供し：前掲。ウルスラ・ラインハルト、著者への手紙、1996年4月27日。人民日報、1996年12月27日も参照。
- 193** 一九四八年の六月に……南京市民は：人民日報、1996年12月25日。
- 194** ラーベは、一九五〇年に脳卒中で死んだ：ウルスラ・ラインハルト、著者への手紙、1996年4月27日。
- 194** ラインハルトはそのとき妊娠していて、また学校の入学試験の準備に没頭していた：人民日報、1996年12月27日。
- 194** ラーベの前ナチ党員という経歴：ウルスラ・ラインハルト、著者との電話インタビュー。
- 194** ラーベの文献の発見の少し後に：ピーター・クレーガー、著者への手紙、1996年10月23日。
- 195** 「ヒトラー政権の現在の見解に反する」：クレーガー、Days of Fate In Nanking。
- 195** その内容は彼女が予測していた最高の荒々しさを遙かに超えて暴力的だった：人民日報、1996年12月27日。
- 195** 彼女は、その日記が……政治的爆弾だと考えていた：ウルスラ・ラインハルト、講演、1996年12月12日、ニューヨーク市。ラインハルト、著者との電話インタビュー。
- 195** 彼女は一五時間かけて：ウルスラ・ラインハルト、著者への手紙、1996年12月3日。
- 195** 危惧した邵 (シャオ) は：邵子平、著者との電話インタビュー。
- 196** 「信じられないほど魅力的だが憂鬱な物語だ」：デイヴィッド・チェン、ニューヨーク・タイムズ、1996年12月12日、p.A3。
- 196** 「当時、現地にいたドイツ人による初めての記録としての史料価値だけでなく、ヒトラーに訴えていたことの意味も重要だ」：朝日新聞、1996年12月8日。

- 197 「その意味で、当時から日本への反感が強かったとされる米国人牧師の証言よりも史料的な価値は高いと思う」：前掲。

第十章 忘れられたホロコースト—二度目のレイプ

- 201 「日本軍が南京で虐殺をおこなったと言われていますが」：Playboy interview: Shintaro Ishihara – candid conversation、デイヴィッド・シェフ (David Sheff)、聞き手 Playboy、1990年10月、37号、no.10、p.63。日本語版「月刊プレイボーイ」1990年11月号。
- 201 「日本が南京大虐殺を否定することは」：鶴見良行 (Yoshi Tsurumi)、Japan Makes Efforts to Be Less Insular (日本は島国根性を克服しようと努力している)、ニューヨーク・タイムズ、1990年12月25日。
- 201 彼は反証を展開した：Journal of Studies of Japanese Aggression Against China、1991年2月、p.71に再録。
- 202 「女性の強姦は」：ジョン・マギーから「ビリー (Billy)」への手紙 (ジョンの署名)、1938年1月11日、アーネストおよびクラリッサ・フォスター・コレクション。
- 202 「市内のどの街路にも、裏道にも死体がある」：同前。
- 203 「私は南京大虐殺などはでっち上げだったと思う」：セバスチャン・モフェット、Japan Jusutice Minister Denies Nanking Massacre (日本の法務大臣が南京大虐殺を否定)、ロイター、1994年5月4日。
- 203 彼の発言に対してアジア各地から巻き起こった猛烈な反発：ロイター1994年5月6日に、永野の人形が焼かれ、日本大使館に卵が投げつけられたという記事が見られる。彼の辞任の詳細については、ミホ・ヨシカワ (Miho Yoshikawa)、Japan Jusutice Minister Quits over WWII Gaffe (日本の法務大臣が第二次大戦の失言で辞任)、ロイター、1994年5月7日。
- 203 「単に戦争の一部」：カール・ショエンバーガー (Karl Shoenberger)、Japan Aide Quits over Remark on WWII (日本の高官が第二次大戦の発言で辞任)、ロサンゼルス・タイムズ、1988年5月14日。
- 203 その月に、日本の中曽根康弘首相は彼を罷免した：同前。
- 203 「侵略の意図はなかった」：同前。
- 203 「私は日本が侵略者ではなかったと言ってはいない」：同前。

- 203** 五月には、奥野は辞任させられた：同前。
- 204** 一九九四年八月、桜井新環境庁長官は：毎日デイリー・ニュース (Mainichi Daily News)、1994年8月13日。
- 204** 「中国政府は……遺憾に思う」：京都ニュースサービス (Kyoto News Service)、1994年8月13日。
- 204** 「発言は不適切」：同前。
- 204** 日本は中国に対しては侵略的だったといわれても仕方がないが：ロバート・オー (Robert Orr), Hashimoto's War Remarks Reflect the Views of Many of His Peers (橋本の戦争の発言は、彼の多くの同僚の観点を反映している)、東京経済 (Tokyo Keizai)、1994年1月28日。
- 204** 「金のためだった」：Japanese Official Apologizes (日本の公的な謝罪)、AP通信、1997年1月28日。
- 204** 「不快感……を生じさせた」：同前。
- 205** 彼は一九九〇年に……辞任させられた：同前。
- 205** 日本の教育制度全体が：ヒュー・ガードン (Hugh Gurdon), Japanese War Record Goes into History (日本の戦争記録は歴史に埋もれる)、Daily Telegraph、1994年4月20日。
- 205** 生徒たちが最初に知りがったのは、どちらが勝ったのかということだった：ニューヨーク・タイムズ、1991年11月3日。心理学教授のヒロキ・ヤマジは、日本の大学生も彼に同じ質問をしたと私に言った。第二次世界大戦で勝ったのはどっち、アメリカ、日本？ (1997年3月30日のサンフランシスコのワークショップでのヤマジへのインタビュー)。
- 206** たとえば、一九七七年に日本の文部省は：ブラックマン (Arnold Brackman), *The Other Nuremberg*, p.27 (『東京裁判—もう一つのニュルンベルク』、29ページ)。
- 206** 「南京占領の直後」：家永の教科書の文言と検閲者の意見は、“Truth in Textbooks, Freedom in Education and Peace for Children : The Struggle against the Censorship of School Text in Japan” (booklet) [教科書の真実—教育の自由と子供たちのための平和：日本の学校教科書検定に対する闘い (英文パンフレット)]、(東京、教科書検定訴訟を支援する全国連絡会、第二版、一九九五年六月) より得た。
- 207** 一九七〇年に家永が勝訴すると：ブルマ, *The Wages of Guilt*、p.196。

- 207** 「政治音痴」：デイヴィッド・サンガー (David Sanger), *A Stickler for History Even If It's Not Very Pretty* (生真面目な歴史観、たとえ非常に美しいものでなくとも)、*ニューヨーク・タイムズ*、1993年5月27日。
- 208** 「南京大虐殺は……日本軍への誹謗だよ」：*週刊朝日*、1982年8月13日、20ページ。
- 208** 藤尾の罷免の前に：藤尾の罷免の前後での教科書における南京大虐殺の取り扱いの情報は、ロナルド E. イェイツ (Ronald E. Yates), 'Emperor' Film Keeps Atrocity Scenes in Japan (「皇帝」の映画の日本の虐殺シーン)、*シカゴ・トリビューン*、1988年1月23日から得た。
- 209** 「佐々木部隊は」：*毎日デイリー・ニュース*、1994年5月30日。1997年8月29日に家永は、文部省に対する最後の三つの訴訟で部分的に勝訴した。最高裁は中央政府に対し、家永に40万円の損害賠償金を支払うよう命令し、文部省は彼の教科書から第二次世界大戦で731部隊が実施した生体実験の記述を削除することを強いたときに、権力を乱用していたと結論付けた。しかし最高裁は教科書検定制度自身については、日本国憲法で保証されている表現の自由、学術の自由、教育の自由を侵すものではないと判断して、それを支持した (*Japan Times*, August 29, 1997)。
- 209** 「我々はいつまで……謝罪しなければならないのか？」：軍事史家児島襄、*ニューヨーク・タイムズ*、1991年11月3日で引用。
- 209** 「籤を引く」：ソニ・エフロン (Sonni Efron), *Defender of Japan's War Past* (日本の戦争の過去の擁護者)、*ロサンゼルス・タイムズ*、1997年5月9日。
- 209** 工場労働者である小野賢二：チャールズ・スマス (Charles Smith), *One Man's Crusade: Kenji Ono Lifts the Vail on the Nanking Massacre* (一人ぼっちの改革運動：小野賢二が南京大虐殺のベールをはがす)、*Far Eastern Economic Review*、1994年8月25日。
- 210** 一九九六年に、彼は共著で：小野賢二、藤原彰、および本多勝一編、『南京大虐殺を記録した皇軍兵士たち』(東京、大月書店、1996年)。
- 210** 「日本の配給元は……カットしただけでなく」：イェイツ, 'Emperor' Film Keeps Atrocity Scenes in Japan。
- 211** 鈴木は、本多や洞の記述のいくつかは：まぼろし派と虐殺派の論争、偕行社の調査、および松井の陣中日記の改竄の情報のほとんどは、楊大慶, *A Sino-Japanese Controversy: The Nanjing Atrocity as History* (中日論争：

歴史としての南京大虐殺)、*Sino-Japanese Studies* 3、no.1 (1990年11月) から得た。

- 212 「敵のプロバガンダ」：ブルマ、*The Wage of Guilt*、p.119 で引用。
- 212 「当時の日本軍将士、日本人一般」：同前、田中『“南京虐殺”の虚構』渡部昇一の前掲6ページ、121-22 ページ。
- 213 「数万人を下らない」：楊大慶、*A Sino-Japanese Controversy: The Nanjing Atrocity as History* (中日論争：歴史としての南京大虐殺)、*Sino-Japanese Studies* 3、no.1 (1990年11月)。
- 213 「弁解の言葉はない」：同前。
- 213 東史郎に起こったこと：キャサリン・ローゼル、*For One Veteran, Emperor Visit Should Be Atonement*、ロイター、1992年10月15日。
- 213 本島等の受難：ブルマ、*The Wage of Guilt*、p.249-50。

エピローグ

- 215 奪いつくし、殺しつくし、焼きつくす：ランメル、*China's Bloody Century*、p.139。
- 215 「私は……命令を受け取った」：ウィルソン、*When Tigers Fight*、p.61 で引用。
- 216 少なくとも中国研究者の一人：ジュールス・アーチャー (Jules Archer)、*Mao Tse-tung* (毛沢東、NewYork: Hawthorne, 1972)、p.95。
- 216 「*China's Bloody Century* (中国の血まみれの世紀) の著者 R. J. ランメルは……指摘する」：ランメル、*China's Bloody Century*、p.139。
- 216 着陸地となった可能性がある地域で：同前、p.138。
- 216 日本の飛行機が……投じたことが分かっている：同前、p.140-41。
- 216 最終的な死者数は……ほとんど信じがたい値である：同前、p.149、p.150、p.164。
- 217 「抑圧の移転」：ジョージ・ヒックス (George Hicks)、*The Comfort Women* (従軍慰安婦、NewYork: Norton, 1994)、p.43。
- 217 日本兵は将校の下着を洗濯させられ：ニコラス・クリストフ (Nicholas Kristof)、*A Japanese Generation Haunted by Its Past* (過去が付きまとう日本の世代)、*ニューヨーク・タイムズ*、1997年1月22日。

- 217 「愛の行為」：タナカ・ユキ、Hidden Horrors2、p.203。
- 218 「率直に言えば」：Xiaowu Xingnan, *Invasion—Testimony from a Japanese Reporter*, p.59。〔訳注：小俣行男『現代のドキュメント 侵掠—中国戦線従軍記者の証言』徳間書店、現代史出版会、1982年、79ページ〕
- 218 「南京で中国人捕虜を一〇人ずつの組に縛り……日本軍の将校は」：許志庚『南京大屠殺』、74ページ。
- 218 「一人の支那人の命より、一匹の豚の方が大切なのである」：東史郎の日記、1938年3月24日。東史郎『わが南京プラトーン』（青木書店、東京、1987年）、163-164ページ。
- 218 「一つの弾丸にも」：荒木貞夫大将の演説、丸山眞男, *Differences Between Nazi and Japanese Leaders (軍国支配者の精神形態)*、で引用、*Japan 1931-1945: Militarism, Facsim, Japanism?* (1931年から1945年の日本—軍国主義、ファシズム、日本主義?)、イワン・モリス (Ivan Morris) 編 (Boston: D. C. Heath, 1963年)、p.44。〔訳註：原典は、丸山が雑誌『潮流』の1949年5月号に掲載した「軍国支配者の精神形態」。この論文は、『現代政治の思想と行動』、未来社、2006年、に収録、荒木の1933年の演説の部分の原典は、東京裁判の法廷証拠3164号として提出された「全日本国民に告ぐ」大道書院、1933年、27ページにある〕
- 219 「神と日本の天皇とどちらが偉いのか?」：ジョアンナ・ピットマン, *Repentance*, *New Republic*、1992年2月10日。
- 219 「自分は戦に行くというより」：バーガミニ, *Japan's Imperial Conspiracy*、p.10 (日本語版76ページ)。
- 219 「抑(そもそ)も日華両国の闘争は」：入谷敏男, *Group Psychology of the Japanese in the Wartime* (London and New York: Kegan Paul International, 1991年)、p.290。東京裁判速記録第320号。
- 220-221 政府内部の制約が小さければ小さいほど：R. J. ランメル, *Death by Government (政府による死)*, New Brunswick, N.J.: Transaction Publishers, 1995)、p.1-2。
- 222 ドイツ政府は……を支払っていて：ドイツの戦後保障の支払いに関する情報は、ニューヨーク市のドイツ情報センターから得た。
- 223 「歴史を無視する人は」：Japan Military Buildup a Mistake, Romulo Says (日本の軍勢力増強は誤りだ—ロムロは語る)、UPI 通信、1982年12月30日。
- 224 一九九七年四月、前駐日大使ウォルター・モンデールは：バリー・シュ

ワイト (Barry Schweid)、AP 通信、1997 年 4 月 9 日。

224 南京大虐殺は……法案でも取り上げられている：ウィリアム・リピニスキー (イリノイ地区下院議員) が書いた決議案の草稿は、彼の事務所、またはウェブサイト www.sjwar.org から、直接、取得することができる。

224 過去の戦争で：Chinese American Forum 12、no.3 (1997 年冬)：17。